
魔法の国のティカ

館野和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Nコード】

N7094P

【作者名】

館野和

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚される。たまたま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囲まれてうるたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

00 食べ物の恨みは恐ろしい

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」
残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなって連呼した。

今外に出たら暑いだろうなー。あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷った後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー？」

二階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行ってくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買ってきてよ」

「うん、分かった。行ってくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……あつつ……蝉うるさー……」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどのコンビニに着く
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。

すると、目の前にきらきら光るものが見えてきた。

やだ、ガラス？ 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かずに自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素っ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるといきなり停止した。

「おおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るものがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まると、千花はまったく見知らぬ場所にいた。——
それも、どう見ても室内。

千花が呆然としていて、目の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビ二袋を取り出した。

——緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言っていると思う。千花が今までお目にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれていると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやっと千花ははっと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てると男に向かって叫んだ。

「ちよっ、わたしのハゲ抹茶！勝手に食べないでよ！」

「禿マツチヨ？ おかしな名前だな。もう一つあるだろう、それを食べろ」

「なんであなたに指図されなきゃいけないのよ、禿ドロボー！」

楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？ 俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいっと叫びたくなる。

「いらないのならそちらも俺が貰うが」

「！ 食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビ二袋を奪い返した。そして溶けかかったいちごのかき氷をかきこむ。

「う」

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「うるさいよ！」

一声叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目ファントジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

01 どうやら異世界らしい

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なにか突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろうか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うと言ったはずだが。またおまえは使ったのか』

千花のアイスを奪った男に文句を言っているようだが、なんとなくべつていいのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のような格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じゃなかった。

千花の疑問には二人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言った。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法ってなによ？ ファンタジー小説とかゲームじゃあるまいし」

いくら目の前の男の格好がファンタジーでも、言ってることまでそんなことってある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が目の前の男から更に距離を取る。

『……なにを言ってるのか分らん。ひょっとして異世界の者が？』

「そうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して目の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……おまえ、なんてことをしてくれたんだ。異世界の者を召喚した。今すぐ帰すんだ』

「そついうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になってもら

わなければ」

「弟子ってなによ？　なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子って、なにかの伝統芸かなにかだろうか？

なににせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙ってろ」

「なっ」

そっけなく男に一蹴されて、千花は気色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだろう。それをこちらの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだろう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主であることには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ」

「魔力ってなによ？　勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなった。

な、な、なによこれーっ！？

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだろう？」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からないが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるように話して欲しいものだ。そう思っ
て、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壮年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なっ、なにあれ？　なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄って左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呟いたとたん、体が動かなくなっただけで千花は焦る。

な、な、なんだこれー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろう。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？　話が分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かって短くなにかを呟く。

「……ちよつと、ここはどこなのよーっ！？」

話せるようになったとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかったか？」

「そう言うわけにもいかないだろう。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？　聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

いせかい。異世界。異世界！？

「あはははは、冗談きつついわ」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたって真面目な表情だ。……すぐには信じられないのも仕方ないだろうな」

壮年の男がなにごとかを呟くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちよ、うそっ！　足、体浮いてるっ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」

カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての！」

「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？　ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしくなくても城だが、おまえの言うようなヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてもすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔でもある」

壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。

「さつきから魔法、魔法って……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？　さつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言うのと二人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なっ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかない」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんという」

偉そうに言われて、千花は力チンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗ったらどうよ？」

「……なんだと。——まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ。魔術師？ やっぱり鳩とか出すあれじゃないの？」

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな」

「ティカ・サトー？」

「ティカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければティカと呼ばせてもらっていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしょうがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、ティカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子ってなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポンジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕った。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。ティカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい」

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですって？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをかの世界から喚び寄せた。どうしても帰りたいたら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だな」

「ちよつと、勝手なこと言わないでよ！ わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言っていないわよ！ わたしは的意思是どつなつちやうわけ！？」

「はつきり言えない」

きつぱりとカイルが言うのと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいかな？ まさか召喚魔法で弟子を喚びだすなんて普通思わんだろう」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの二人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、ここは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで喚びだしたわけね？ それで、その理由は弟子を取るからだったと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあっさりと頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないってことよね？」

「そついうことになるな。まあ、諦めろ」

——諦めろと言われて、そう簡単に諦められるかつての！

「そうなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

02 異世界で初お風呂

「……なにをする!」

カイルは打たれた頬を押さえて一瞬呆気にとられた後、千花に怒鳴った。

「それはこっちの台詞よ。あんたのやったことは犯罪じゃないの。誘拐よ、誘拐」

千花が腰に手を当てて声を大にして主張する。

「まあ、そういうことになるな」

シモンが鷹揚に頷く。

「あんたを警察……があるかは知らないけど、警備の人に突き出してやるんだから!」

「出来るものならやってみろ。言っておくが俺は城に顔が利くぞ。多少のことなら揉み消せる。それに、どこから見ても異国の者のたわごとを信じる人間がどこにいるんだ」

——この悪党!

ギリギリと歯ぎしりしたい思いで、千花はカイルを睨みつける。

「そんなことより、素直に俺の弟子になれば生活の保障はされるし、いつかは帰れるぞ」

「生活の保障なんて当たり前でしょ! そっちが喚びだしたんだから!」

「弟子にならない場合はおまえの生活の保障は一切ないからそのつもりでいろ」

「ちよつと!」

ふざけんな! どれだけ自分勝手なんだ。

憤った千花はカイルよりも立場的に偉いはずのシモンに助けを求める。

「じゃあ、シモンさんどうかしてください!」

「すまない、それはちよつと出来かねる」

「な、なんですか？」

「こいつは俺の弟子だが、実力は俺をとうに上回ってるんだ。だから、君を保護した場合、俺がこいつにどうにかされる可能性がある」
「おおい、こいつには師匠を敬う気持ちはないのか！」

「師匠を師匠とも思っていないカイルに思わず千花が頭を抱える。」

「でも、シモンさんから仕官できないなら弟子を取って言われたって」

「それは、第二王子のご命令だからだ。俺だけの命令ならば、こいつは聞かない」

「……」

命令を聞くのは、王族だけとかどんだ俺様なんだ。……けど、シモンさんもちよつと情けなくない？

「あ、じゃあ、その第二王子様とやらに、わたしを帰すように掛け合ってください」

「そ、それは、少々無理だと思うが……」

「ちえつ、やっぱり無理か。」

千花ががっかりしていると、カイルが更に言ってきた。

「俺の弟子になるならば、出来るだけ早く帰せるように尽力してやる。生活面も待遇を良くするぞ」

「……どんなにわたしが帰りたいって言っても、帰してくれないんだよね？」

「ああ、おまえがこれほどの魔力の持ち主でないならすぐに帰していたが、俺を上回るほどの魔力の持ち主だからな。これなら第二王子も文句は言うまい」

……その第二王子って人もまさか召喚してまで弟子を取ろうとするとは思わないと思うよ。

「うつゝ……」

千花は頭を抱えて唸る。

ああ、どうしよう。

ム力つくけど、ここはこいつの話に乗るしかないのか。乗らない

場合は、野垂れ死にコースっぱいしなあ……。こんな訳の分からないことで野垂れ死には嫌だ、うん。

千花は頷くと、カイルに聞く。

「……敬語は使わなくちゃ駄目？」

「まあ、なくてもかまわない。俺も師匠に使ってないしな。なんならカイルと呼び捨てにしてもいい」

「……ええ？」

俺様なのに、カイルと呼び捨てにするのはOKなのか？

千花がまじまじとカイルを見返すと、なぜか彼は頬を染めてそっぽを向いた。

「それでどうなんだ。俺の弟子になるのか、ならないのか？」

「うう、しょうがない、弟子になるよ。……本当にちゃんと帰る方法教えてくれるんでしょうね？」

「しかるべき時が来たらな。まあ、数年先のことだと思うが」

「数年先なんて困るよ！ それじゃ元の世界に戻った時にわたし死んだことになってるかもしれないじゃない」

あれ、行方不明者の死亡確定って何年だっけ。千花は叫びながらもそんな悠長なことを考えていた。

「それはおまえ次第だ。せいぜい頑張ることだな」

「言われなくても頑張るよ」

死亡確定だけは嫌だ。なんとしてもそれまでには家に帰らないと。千花は拳を握って決意を新たに頷くと、カイルに言った。

「じゃあ、嫌だけど、ここにお世話になることにする。すつごく嫌だけど」

しつかりと嫌だけどのところを千花が強調すると、カイルは顔をしかめた。

「おまえの部屋はここだ」

カイルに案内された二階にある部屋は、元の世界の千花の部屋よりも三倍は広かった。

「わあ、可愛い部屋ー」

その部屋の壁には爽やかなグリーン系の壁紙の上に同系色のボーダー壁紙、またその上に控えめに小花を散らした壁紙が貼られていた。

備え付けのアンティークな机と椅子。チェストにベッド。確かに待遇はいいようだ。

「なにか必要なものがあるなら女中のメリサに言うといい。すぐに揃えてやる」

「うん、そのメリサさんて人はどこにいるの？」

千花が聞くと、カイルは部屋にチェストの上に置いてあったベルを取った。

「用があるときはこのベルを鳴らせ。これはおまえの部屋専用のベルだからすぐにこの部屋に来る。試しに鳴らしてみろ」

「うん」

素直にベルを鳴らすと、程なくして四十代くらいの髪をひつつめた女性が部屋のドアをノックして現れた。

「お呼びでしょうか」

「ああメリサ、弟子を取ったから紹介する。ティカ・サトー、歳は……いくつだ」

「十六だよ」

「メリサでございます。以後、よろしくお願いいたします」

「あ、はい。よろしく願います」

メリサは千花に頭を下げると、千花も慌てて彼女に下げ返す。

「十六か、せいぜい十四、五歳だと思っていたが幼く見えるな」

カイルが千花の全身をまじまじと観察するが、千花にしてみれば、幼く見られがちな日本人の大体の年齢を当てる方が驚きだ。

「顔だけ見れば十二くらいだが、おまえ、体つきだけはいいいからないやに長々と見てると思ったら、セクハラかよ！

「……殴つてもいい？」

「殴つてから言うな。さっきの平手といい、凶暴だな、おまえ」
殴られた頭をさすりながらカイルが愚痴る。

「まあ、仲のよろしいことで。師弟と言うより、まるで恋人同士です
ね」

「……そう見えるか？」

「冗談でもやめてください」

まんざらでもなさそうなカイルがちょっと怖い。千花は慌ててメリサに認識を改めてもらった。

「まあ、残念です。カイル様はおもてになるのに恋人はいらっしゃらないので、私たち使用人はやきもきしているのですわ。ティカ様がその気になりましたら、いつでもこのメリサにお申しつけください。精一杯応援させていただきます」

カイル、もてるのか。確かに外見は超絶美形だけど、性格がアレすぎるだろう。

千花は世の中の不条理さを呪いながら、期待に満ちた目で見てくるメリサに全身全霊で否定した。

「……いや、そんな気はまったくありませんからっ！」

「……そうですか。本当に残念ですわ。……それはそうと、ティカ様お召し替えをなされませんか？ そのお洋服はこの気候には少し涼しすぎるかもしれないので」

「確かにちょっと寒いかも」

ぴつたりした半袖Tシャツにふくらはぎ上までのパンツにサンダルという格好なのだが、先程まで汗をかいていたせいもあり、かなり肌寒い。

「それに肌や体の線を少々露出させすぎですわ。カイル様には目の毒です」

「いや、むしろ目の保養だが」

……おまえは黙ってる！ と千花は有無を言わせない笑顔でカイルを黙らせると、メリサに向き直った。

「はい、着替えます。あの、汗をかいてたので、出来ればお風呂に入りたんですけど、いいですか？」

「はい、すぐにご用意できます。こちらへどうぞ」

メリサに案内された浴室はゆったり出来る浴槽やシャワーもあり、使い方は日本にあるものとそう変わらなかった。

うつわー、高そうなお風呂ー。まるでホテルみたい。……さすがにライオンの口からお湯は出てはいないけれど。

千花がいかにも高級そうな金の蛇口やシャワーヘッドを眩しげに見ていると、メリサに着替え一式とタオルを渡された。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、どうもありがとうございます」

千花がメリサを見送っていると、約一名、入浴に大変邪魔な者が残っていた。カイルだ。

「カイル、わたし今からお風呂に入るんだけど。とつと出ていくてくれない？」

なんとか笑顔で千花は言うが、その頬はひきつっていた。

「なんだ、せっかく背中を流してやろうかと思ってたのに」

カイルのその言葉に、千花はぞわつと鳥肌を立てる。

せっかく平和的に言ってやったのに、これは体に直接分からせないと駄目なようだ。

「出てけ——っ！」

千花はカイルをボコボコに殴ると、浴室のドアの鍵をしっかりと閉めてから、異世界での初お風呂を堪能した。

03 まさに絵に描いたような王子様

少し冷えてきていた体もすっかりほかほかになって千花は上機嫌で風呂から上がった。

タオルで体を拭くと、たちまち水分が吸収されていていつて千花は驚いた。

試しに洗った髪の毛を拭いてみると、こちらもほとんど乾いてしまった。おまけに髪や肌に必要な水分までは吸収しないらしい。

「すごい、ドライヤーいらないや」

異世界の高性能なタオルにすっかり感心しながら千花はメリサから受け取った着替えを広げてみた。

下着は千花の世界とそう変わらないようだがブラはないらしい。その代わりにキャミが長くなったようなものがあつた。……つまりこれを着るということらしい。ちよつと心細い感じだが、仕方なく千花は下着を身につける。

その上に桃色のドレスのような長いワンピースを着る。太腿までの長さのストッキングを履いた後、ふくらはぎまでの編み上げブーツを履く。

「うわあ、馬子にも衣装かもー」

脱衣所の鏡に全身を映して、千花は前や後ろを確認する。この格好だけで何割り増しか自分が可愛くなったような気がするから不思議だ。

普段あまり女の子らしい装いはしない千花だったが、それでも今の自分の格好にはうきうきした。

「まあ、ティカ様よくお似合いですわ」

ティカが風呂から出るのを待っていたらしいメリサが、千花の姿を見て褒めた。

「あ、どうも。メリサさん、お風呂ありがとうございました」

「いいえ、お入りになりたい時はいつでもお申し付けください。そ

れはそうと、ティカ様がお出になつたら、カイル様が部屋まで来るようにとおっしゃってましたわ」

「分かりました」

メリサに案内されてカイルの部屋に入った千花は、シモンがいるのを見て、そういえばいたんだっけと彼に失礼なことを思った。

「ああ、とてもよく似合っている。これならこのまま王宮に向かつて問題ないか」

「お、王宮ですか？」

いきなり大仰な話題になったので、千花はびつくりした。

「第二王子に俺が弟子を取ったことを報告しなければならぬからな」

こともなげに言うカイルに千花は反論する。

「で、でも、わたし、王子様に会うのに必要な礼儀作法なんて全然知らないよ！？ そんなんで大丈夫なの？」

それどころか、敬語自体できるかどうかも怪しいくらいだ。

「その点は全く気にしない人物だから大丈夫だ」

「……そうなの？」

「ああ」

第二王子様とやらはその身分によらず、随分気さくな人物らしい。そう心配することでもない和理解した千花は思わずほっと息をついた。

しかし、王子様に会うなんて大事なのに、簡単に会うと言うなんて、この二人は結構な重要人物なのかもしれない。

「それでは行くか」

カイルはちよつとそこまで、のような感じで言うと、三人は簡単に城の前まで移動した。

目の前にそびえる白い美麗な城に、千花が思わず口をあぐり開けて見とれていると、カイルが彼女の額を指先で小突いた。痛みはなかったが、いきなりだったので思わず千花は仰け反ってしまう。「なにすんのよっ」

「馬鹿みたいに口を開けて上を見るな」

「！ 馬鹿みたいで悪かったわね！」

確かに間抜け面だったろうと想像できるだけに、千花は真っ赤になって怒鳴った。

シモンが城の衛兵に目をやると、彼らは頭を下げ、城の入り口から退いた。

——つわあ、顔パスかあ。

その様子を少々驚いて千花は見ていた。

シモンはカイルにはかなわなくて正直情けないと思っていたが、案外偉い人なのかもしれない。

「……あの、シモンさんでもしかして結構偉い人なんですか？」

恐る恐る千花が上目遣いで聞くと、とんでもない返答がことなげに返ってきた。

「……ああ。一応、この国の魔術師団師団長をしている」

「そ、それって結構な重要人物ってことですか？」

「まあ、一応な。しかし、俺より強大な魔術師が身近にいるから代替わりさせようとしたんだが……、失敗だったようだな」

シモンは深い溜息を付くと、カイルを見た。

「……誰がそんな面倒な役目に付くか。それに俺は一人で行動している方が性に合っている」

カイルがうんざりとした様子でばつさりと切り捨てる。

「しかしだな……、稀代の魔術師であるキース・ルグランの再来と言われるおまえを放置しておくのは国家の損失だぞ。これは殿下も同じご意見だ」

「……ふん、無駄なことを」

千花には理解できない言葉もあったが、シモンは弟子であるカイルを後継者としていようだ。

そうこうしているうちに一つの立派な部屋の前で二人が立ち止まったので、千花も慌てて止まった。ひょっとして、ここが第二王子の部屋だろうか。

「エドアルド殿下に目通りを」

第二王子の名はどうやらエドアルドというらしい。

シモンが近衛と思わしき人物に声をかけると、その彼は「少々お待ちください」と言つて中に伺いに行った。

「今の人つて、近衛の人？」

王族の人を守っているならきつとそうだろうと思つて、千花は口にする。

「ああ、近衛騎士だ。おまえは初めて見るか」

カイルと小声で話していると、その近衛騎士が戻ってきた。

「殿下がお会いになるそうです。どうぞ中へお入りください」

促されて中に入ると、華美すぎない上品な部屋の中央に、二十代前半と思われる一人の人物が立っていた。

その人物は印象的な藍色の瞳をしていて、長い見事な金髪を緩く三つ編みにして前に垂らしている。美麗で、かつその上品な所作はまさに王子様というしかなかった。

「……まさか、本当に弟子を見つけてくるとはね」

王子はカイルを見て呆れたように溜息を付いた。

「ティカ、殿下に挨拶を」

シモンがそう言ってくるが、千花にはどう言っているのか分からなかった。……ので、自然と無難そうな挨拶になる。

「ち、いえ、ティカ・サトー、十六歳です。よろしくお願いします」
ペコリと千花が頭を下げると、エドアルドが微笑んだ。

「十六歳か、若く見えるね。それに変わった顔立ちだ。どこの国の者だい？」

エドアルドは本当に気さくな性格らしく、得体の知れない千花にも簡単に声をかけてくる。

「え、えーと、日本です」

「ニッポン？」

エドアルドが聞きなれない言葉を聞いたというように、首を傾げる。

「ニッポン、もしくはニホン。またはジャパン」

「ニホン？ ジャパン？ 聞いたことないな」

「それはそうだろうな、この娘は異世界の者だからな」

カイルが王子に対して不遜な口を利くのを千花は他人事ながらも、ついハラハラしながら聞いてしまった。

「カイル、おまえ……。まさか異世界召喚をやったのか」

エドアルドが驚愕に瞳を見開いた。

「異世界探索をしていたら、たまたま俺より魔力の高い娘を見つけたからな。俺の弟子になることを了承させだし、これで文句はないだろう」

「いや、その娘にも家族がいるだろう。すぐ帰してやった方がいいんじゃないか。なんなら、あの話はなかったことにしてもいい」

エドアルドが士官の話を立ち消えにするとまで言ったことに、千花は感動した。

うわあ、なんていい方なんだろう。わたしを家に帰せって言うてくれたよ。鬼畜なカイルとは大違い。

「今更だな。俺はこいつに魔術を教えるつもりでいるし、帰す気は全くない。ティカが帰ることがあるすれば、自力で異世界へ戻る時だけだ」

カイルは感激しているティカの気分を地に墜とすようなことを言った。どこまでも勝手な男である。

「しかし、それでは帰るのに何年もかかるぞ」

「……それはティカの努力次第だな。魔力に関してだけは全く問題ないから、それほどかからないかもしれないが」

カイルが肩を竦めると、エドアルドは千花自身に興味が沸いてきたようだった。

「へえ、そんなに魔力があるのなら、ぜひ見てみたいな。確か魔力を計る魔道具があっただろう」

「ああ」

カイルは水晶を手元に召喚させると、それを千花の両手に乗せた。

「えっ？ えっ？」

訳が分からず千花が慌てていると、カイルが説明した。

「魔力を計る魔道具だ。それに念を集中させる」

「念を集中させるって言われても……」

そんなことをやったことのない千花はうろたえてただ周りを見渡す。三人の男達は千花の動向を見守ったままだ。

「やり方が分からないなら、その水晶をじっと見つめているだけでいい」

ああ、それなら大丈夫だ、と千花はほっと息をつく、水晶に意識を集中させた。

その途端、水晶が虹色に輝きだして千花は思わずそれを取り落としそうになって慌てる。

「えええ、なにこれっ!？」

そしてとうとう虹色の輝きがエドアルドの部屋全体を眩しく照らしたかと思うと、いきなり千花の手元の水晶が跡形もなく消えた。

04 暴力はいけない

先程までエドアルドの部屋を眩しく照らしていた光は消え去り、元の静寂な室内に戻っていた。

「き、消えちゃった……」

手元の水晶がなぜか消滅してしまったことで、千花はうろたえる。

「……測定不能か」

カイルが少し考え込むように顎に手を当てる。

「いや、まさかそんな者がいるのか？ それにあんな光の色は初めて見た」

シモンが驚愕を露わにして千花を見る。それに倣うようにエドアルドも興味深そうに彼女を見た。

「これは、それだけ彼女の才能が桁違いだということでもいいのかい、カイル」

「……まあ、そうだな。俺もまさかここまでの魔力の持ち主だとは思わなかったが」

「ええ？ それ始めから分かってたんじゃないの？」

「大体の魔力は予測することは出来るが、正確な魔力の量が分かるわけではないからな」

「……なんかいい加減……」

ぼそつと千花が漏らした一言に、カイルが冷ややかな視線で「なにか言ったか」と返した。

「別にー。……それはそうと、魔術師としてはわたしの魔力は合格ってこと？」

「いや、合格どころか、今すぐにでも魔術師団に入団してもらいたいところだな」

なぜかカイルではなくシモンが目を輝かせて言う。

「はい？ でも、わたしカイルの弟子になるんじゃないんですか？」

「いや、これだけの才能を埋めておくのはもったいない。いずれは

史上初の女性魔術師師団長も夢ではないぞ」

「いや、あの……わたしは家に帰りたいんですけど。そんな役職に就いたら帰るに帰れないじゃないですか」

割と強引なシモンに千花は内心たじたじになる。

第一、そんな人の上につく役目なんて面倒だ。

「ここに永住したらいいじゃないか。そもそも何年も行方不明になっていた人間が元の世界でうまくやっていけるとはあまり思えないが」

「！ 酷いです！ 第一、シモンさんがカイルに弟子を取れって言ったから、こんな訳の分からない状況になったんじゃないですか——っ！」

先行き不安なのは理解していたが、さすがにこれはあんまりだ。

思っていたいなかったところでのシモンの暴言に憤り、千花は瞳に涙を溜めて怒鳴った。

握った両手の拳が怒りのあまりぶるぶると震える。

暴力はいけないと分かっているが、すごく殴りたい。

弟子が弟子なら師匠も師匠だ。

「ティカ、気持ちは分かるけれど落ち着いて」

エドアルドが千花を宥めるように言うが、あまり効果はなかったようだ。

「だって、だって、だって！ 異世界召喚なんてされたおかげでわたしの人生、滅茶苦茶じゃないですか——っ！ シモンさん、そんなこと言うならすぐに家に帰してくださいよ！」

言ってみれば、千花は被害者だ。

間接的ではあるがその加害者のシモンがよりによって、元の世界でうまくやっていけないとは、思っただけでも絶対に言っただけじゃない言葉だ。

「ティカ、うるさい黙れ」

カイルがかつたるそうに手を振ると、千花は途端にしゃべれなくなった。

「……………！」

千花がなにごとか叫ぼうとして口をパクパクさせる。
やがてなにを主張しようと無駄と悟った千花の瞳からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ティカ泣かないで」

エドアルドがティカの頬に流れる涙を指で拭った。

「第二王子、ティカに勝手に触れるな」

カイルがエドアルドから無理矢理千花を抱き抱えるようにして奪う。

「……………へえ」

エドアルドは瞳を見開いた後、面白そうに笑った。カイルは一瞬それを鬱陶しそうにして見たが、すぐにシモンに向き合ってしまった。
「師匠、ティカは俺の弟子だ。それを魔術師団に勝手に入団させることは俺が許さない」

「しかし、飛び抜けた才能があるのに士官させないとは宝の持ち腐れだぞ」

「くどい」

カイルは有無を言わせない口調で、シモンを黙らせる。

「カイルは余程ティカが気に入っていると見えるな。君のそれは独占欲かい？ 確かに彼女は毛色が変わっているが」

エドアルドがそう言うて上から下まで値踏みするように見たので、ティカは落ち着かなかった。

「そうだ、今日の晚餐はこちらで取っていくといい。ティカには今からその支度をしてもらおうか」

「……………晚餐は口実で、ティカに装わせることが目的だろう。晚餐だけならこの格好で問題ないはずだ」

エドアルドの提案に、カイルが不機嫌そうに眉に皺を寄せる。

「まあ、そうだが。わたしもティカがどんな女性なのか興味があるんだよ。……………そうそう、ティカの沈黙魔法はもう解いてくれるかな」

エドアルドは笑って言うと、侍女を呼びだした。

魔法が解除されたことで、ようやく話せるようになった千花はほっと息をつく。

「ちよっと、無闇に人に魔法なんてかけないでよね」

千花がカイルに文句を付けたら、彼は肩を竦めた。

「激昂する人間にはあれくらいがちょうどいい。おまえ、王子に『だつて』と何度も言っていたぞ」

そう言われてみれば、言ったような気がする。

千花はうつつまると、不敬だったかとエドアルドをちらりと窺った。

「わたしなら、全く気にしてないよ、大丈夫」

「……すみません」

エドアルドには幸い笑顔で返されたが、怒りのあまり身分の高い王子にまで八つ当たりしてしまった千花は己の未熟さに身が竦む思いだった。

「お呼びでございますか？」

茶がかった金髪に緑の瞳の落ち着いた感じの侍女が扉を叩いて現れる。

「ああ、セルマ。彼女はティカと言って、今度カイルの弟子になった娘なんだが、彼女に晩餐会の支度をしてほしいんだ。それもとびきりのやつをね」

エドアルドがそう言うと、セルマと呼ばれた侍女は驚いたように瞳を見開いた。

「まあ、カイル様の」

カイルのエドアルドへの口調といい、割と身分の高そうな侍女が見せる敬うような態度といい、カイルはひよっとしたら結構身分が高い人物なのかもしれないな、と千花はぼんやり思った。

「それではティカ様、こちらへ」

「は、はい」

セルマに別室の客間へ案内されて、千花はまず湯殿に連れて行か

れた。

一応王宮に来る前に風呂には入っていたのだが、問答無用で数名の侍女達に服を剥かれた。

「あああああなのっ」

羞恥も手伝って、千花が戸惑いの声を上げる。

「ご心配されなくても、最高のお支度をさせていただきますわ、テイカ様」

いや、そういうことじゃないんですけど……。

侍女達に髪や体を念入りに洗われ、千花は半ば諦めの境地にいた。「それにしても、滑らかできめの細かい肌ですわね。お体も細くていられるのに、出るところは出ておられて素晴らしいですわ」

「はあ……どうも」

侍女達の褒め言葉につい気の抜けたな返事をしてしまう千花だが、その間も侍女達は爪を磨いたりして忙しい。

全身をタオルで拭かれ、ようやく湯殿から出たと思ったら、今度は台に寝かされ、いい匂いのする香油を全身に擦り込まれた。

全身マッサージを受けて千花がウトウトしかけたところに、セルマが声をかけた。

「テイカ様、それではお支度をしますので、ご移動をお願いいたしますわ」

「は、はい」

いけない、いけない。

あまりの気持ちよさに危うく熟睡するところだったよ。

千花は慌てて台から起きあがると、湯上がり用の薄い衣装を着せられて、衣装部屋へと移動させられた。

衣装部屋では侍女の間で、千花には何色が似合うか少し議論になった後、結局爽やかな色合いの淡い緑のドレスが選ばれた。そのドレスは爽やかさとふんわりとした柔らかさが絶妙で、こういう物が全く分らない千花にもかなりの一品だと分かった。

下着や靴はすべて繊細なデザインのものに取り替えられ、侍女達

が千花にそれを着せていく。

あー……、お姫様ってこんな感じなのかな。支度のたびに毎回こんなことあるなんて大変そう。

自分はお姫様でなくてよかった、と安心しながら千花は目の前に置いてある全身を映す鏡をじっと見ていた。

背中の中程までの真っ直ぐな黒髪は丁寧に梳られ、艶やかだ。横の短めの髪を残して、サイドをドレスと同じ色の細いリボンで編み込んで飾り、髪型は完成のようだ。

仕上げに化粧を施された途端、幼い自分の顔が一変に大人っぽくなったので、千花は驚いた。

「まあ、なんてお化粧が映える方なんでしょう。とても美しいですわ」

「これなら、殿下もきつと満足されますわ」

侍女達が褒めるのも満更お世辞ではないようだ。千花は呆然としてその支度の出来映えを見ていた。

鏡の中の千花は、どこから見ても美しい異国の姫君だったのだ。

05 そんな大事なことを気軽に言われても

……うわ、化けた……。

姫君そのものの自分に驚きながら、侍女達の技術に千花は素直に感心していた。

「綺麗にしてください、ありがとうございます」

ぺこりと侍女達に千花が頭を下げると、彼女達は驚いたようだ。

「ま、まあ、カイル様のお弟子のティカ様がたくし達に頭を下げられることなんてありませんわ。それに、エドアルド殿下のご命令です」

「それでも、ありがとうございます」

千花がもう一度頭を下げると、戸惑っていた侍女達がやがて破顔した。

「ティカ様、ご丁寧にありがとうございます。またぜひともあなた様のお支度を担当させて頂きたいですわ」

「あ、はい。もし次がありましたら、よろしくお願いします」

今回の支度はエドアルドの思いつきで、まあさすがに次はないだろうが。

侍女達に手を取られて、千花はドレスの裾を踏まないように慎重に歩き出す。

客間から出ると、いきなり知らない男性から声をかけられた。

「へえ、君がカイルの弟子か。どこの姫君かと思った」

歳は、千花よりも少し年上くらい。十七、八くらいだろうか。エドアルドと同じ色彩で顔も似通っている。

「まあ、レイナルド殿下。ティカ様をご覧になられにいらしたのですか？」

……殿下ということは、この人も王子様なんだろうか？ エドアルド殿下に似ているし。

熱心に見つめてくるレイナルドに戸惑いながら、千花は思う。

「まあね。あのカイルもさすがにとつとつ士官せざるを得ないと思つてたけど、これは予想外だったな。……とても綺麗だけど、君はひよつとして、カイルの恋人？」

「と、とんでもない！」

あんな鬼畜魔術師の恋人と誤解されるなんてショックだ。

千花が慌てて首を振って否定する。すると、レイナルドはなぜかほつとしたように息をついた。

「あ、違うんだ。よかった」

……なにがよかったんだろう？

千花が首を捻っていると、レイナルドが千花の傍に寄ってきた。侍女達は遠慮しているのか声をかけてこない。

「僕はレイナルド、この国の第三王子だ。君の名はなんて言つの？」

千花の予想通り、目の前の青年は王子だったようだ。千花は城に来る前に教えてもらった略式の礼を取るべく、ドレスを両手で摘んで答えた。

「ティカ・サトーです、殿下」

「ティカか、可愛い名前だね」

「あ、ありがとうございます」

身分の高い王子にかなり気さくに話しかけられて、若干千花は腰が引けた状態になる。……それにさっきからなにやら熱っぽい視線を受けているようで、落ち着かない。

「殿下、ティカ様はエドアルド殿下に晩餐のご招待を受けておられるのです」

「そうなんだ。じゃあ、僕も一緒に出ようかな。一人くらい増えても別に構わないだろう？」

「はい。エドアルド殿下にお伝えして、そのように手配させて頂きますわ」

セルマが微笑んで応対する。どうやらレイナルドが晩餐に参加するのは、決定事項のようだった。

「お邪魔するよ、アルド兄さん」

「なんだ、レイド。ティカと一緒に来たのか」

ティカ達を引き連れて、レイナルドが先にエドアルドの部屋に入ると、意外そうにエドアルドが眉を上げた。

「カイルが弟子を取ったっていうから興味があつてね。……そしたらとても綺麗な娘じゃないか」

レイナルドに促されてティカがエドアルドの部屋に入ると、彼は驚いたように瞠目した。

「これは……、見えたな。ティカ、とても綺麗だ」

「……驚いたな。どこの姫君かと思った」

シモンも千花の変わりように驚いたようで、まじまじと観察してくる。

二人に賞賛されたことで、千花はさつきシモンに憤っていたのも忘れ、少々舞い上がってしまう。

「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに千花は頬を両手で包むと、赤い顔を俯かせた。

「……童顔も化粧一つでこれだけ変わるのか」

カイルが舞い上がる千花の気分を一气につき落とすようなことを言った。

「童顔で悪かったわねっ」

思わず千花はカイルをキツと睨む。

二人のように褒めるとは言わないが、少し黙っていてほしかった。

「童顔？ ティカはとても美人だけど？」

不思議そうにレイナルドがカイルに目をやる。

「第三王子は化粧に誤魔化されているのかもしれないが、ティカの見た目は十二歳くらいだぞ」

「……そうなんだ？」

いくぶんがっかりしたようにレイナルドがティカを見る。彼はこ

れがティカの普段の顔だと思いこんでいたらしい。仕方なく彼女は頷いた。

「わたしの本当の年齢は十六ですけど。わたしの国の人は他の国の人から見て、総じて若く見られるみたいですね」

「それでも、ティカ様のお肌やお体は素晴らしかったですわ。十二歳ではこうは参りません。ティカ様のお顔も、いずれ今のように入っぱく花開く時が参りますわ」

「へえ、そうなんだ」

セルマのセクハラまがいの言葉に、男達が大げさなくらい反応する。じろじろと皆に体を観察され、ティカは思わず羞恥から叫び出しそうになった。

「確かに体つきはいいね」

エドアルドが世の中の乙女王子様像を壊すようなことを言う。

「うん、これなら多少童顔でもいいか」

レイナルドが頷きながらなにごとか納得している。

「ああ、そういえば、手足は細いのには胸はあったな」

最初にあった時の千花の格好を思い出しているらしいシモンが言った。どこのセクハラ親父だと思いつながら、千花はシモンを睨みつける。

「……ティカの体をじろじろ見るな」

カイルがかなり不機嫌そうに言ったが、千花はここに来る前に、彼も千花の体をしっかりと観察していたことをもちろん忘れてはいなかった。

「カイルだって、屋敷でじろじろ見てたじゃない」

「俺はいいんだ」

「よくないでしょ、そういうのってセクハラって言うんだからね」千花がむっとカイルを見上げながら言うと、彼は眉間に皺を寄せた。……どうやら不満らしい。

「カイル、いくらティカが魅力的でも、弟子に手を出さないでね」レイナルドが釘を差すと、エドアルドもなぜか楽しそうに言った。

「そう考えると、訓練の時とか危険だね。ティカには師団舎まで来てもらって訓練した方がよさそうだな」

「それはよいお考えですね、殿下」

未だ千花の入団を諦めていないらしいシモンが嬉しそうにそれを受けて言った。

「おい……」

話が妙な方向に向かって、カイルの機嫌もどんどん悪くなっている。

「じゃあ、ティカには訓練の際には城まで来てもらおうか。……それでいいね、カイル」

「……仕方ない。俺ももちろん同行する」

有無を言わず決定するエドアルドの言葉に、本当に嫌そうにカイルが頷いた。

「ついでに他の者にも指導してくれると嬉しいな。無理にとは言わないけれど」

「……無理もなにも、始めからそのつもりでいるんだろうが」

カイルが苦虫を噛みつぶしたような顔で呻くように言う。

俺様な彼がやりこめられるのは千花にはちよつと小気味よかった。

……エドアルドは人当たりが良さそうに見えるが、ひよつとしたら結構な狸なのかも知れない。

「皆様、お食事の準備が整いましたわ。レイナルド様もお越しくださいませ」

話が一端落ち着いたところで、セルマが別室の客間に皆を案内する。

「ティカ、座って」

レイナルドが率先して千花のために椅子を引いた。

「あ、はい。ありがとうございます」

王子に椅子を引いてもらって大丈夫なんだろうかと一瞬千花は不安になったが、彼に甘えて、結局早々に着席した。

「レイドは随分とティカがお気に入りだね」

エドアルドが千花の隣に着席したレイナルドに楽しそうに言う。

「うん、まあ。カイルが弟子を取ったっていうから興味本位で見に行っただけ、ティカ綺麗だし、仕草とか可愛いし」

そこまで褒められると、千花はさすがに真っ赤にならざるを得ない。

「そ、そんなこと……」

「あ、赤くなった。可愛いなあ」

にこにこ嬉しそうにレイナルドが笑う。少し離れた席にいるカイルはそれに反比例してものすごく不機嫌そうだ。

「ティカ、僕、君に一目惚れしたみたいなんだ。魔術師を目指すのもいいけど、もし君さえよかったら僕の妃にならない？」

レイナルドがものすごく大事なことをちよつとそこまで買い物に行ってくる的に気軽に言ってくる。

「……はい？」

思わず千花の目が点になったが、それは誰にも責められないだろう。

06 わたしは珍獣じゃない

「第三王子、なにを言っている。ティカは俺の弟子だぞ。それを無視して勝手に話を進めるな」

カイルが不愉快そうに言ったことで、千花は一瞬真っ白になった意識を取り戻した。問題のレイナルドは、カイルに対して「ちょっと黙っててくれるかな」などと言っている。

「申し訳ありません。それは無理です」

千花は慌ててレイナルドに答えたが、予想しない返事が返ってきた。

「どうして？ 君は僕が嫌い？」

「どうしてって……、殿下とはほんの少し前にお会いしたばかりじゃないですか。好きも嫌いもありません。それにこんな得体の知れない女を妃になんておかしいです」

自分を卑下したくはないが、この馬の骨とも知れない女を妃にするなんてどう考えてもおかしい。

それをこうも簡単に言うのは、もしかしたらこの王子にはすでに何人か妃がいるのかもしれない。

「得体は知れなくはないだろう？ 当代一の魔術師のカイルの弟子だし」

千花がカイルの弟子になった経緯を知らないレイナルドは当然のように言ってくる。

「……わたしは異世界の日本という国の出身です。それに庶民ですし、殿下に釣りあうとは思えません」

「……異世界？」

レイナルドが千花の言葉に驚いたように聞き返す。

「はい、わたしは異世界の人間です。ただ、わたしには魔力が並外れてあつたらしくて、カイルにこの世界に召喚されたんです」

「ティカが異世界人……」

呆然としたようにレイナルドがつぶやく。

千花はこれで諦めてくれるかなと心の中でほっとする。

いきなり王子妃になってくれなんて、いくらなんでも身に余りすぎる。

「それはすごいね！　カイルよくやったよ！」

「ええっ？」

ほっとしたのも束の間、レイナルドが両手を握ってきたので千花はびっくりする。

すごいとはかく、よくやったとは何事！？

「見たことのない顔立ちだから、他の大陸出身かと思ったら、まさか異世界から来たなんて驚いた。異世界の人間なんて、初めて見たよ」

それはそうだろう。

そんな機会がやたらあつたら困る。

「……そんなパンダかなにかを見るような目で見ないでください」
「パンダ？」

レイナルドに問い返されて、ああ、この世界にはいないのかと千花は理解する。

「わたしの世界にいる珍獣です」

言いながら、わたしはあんなに可愛くはないけどね、と千花は内心で苦笑した。

「珍獣なんてとんでもない。確かに君の存在は稀少だけど、こんなに綺麗なのに」

「ですから、それは化粧のおかげです。素顔を見たらきつとがっかりなされますよ」

「ティカ、そう卑下することもないだろう。君の顔は歳の割に幼いけれど、とても可愛いよ」

「第二王子、せっかくティカが断っているのに余計なことを言うな」
フォローするように千花を褒めたエドアルドに対して不遜にカイルが言う。

「しかしね、ティカは自己評価が低すぎだよ。彼女はそのままでも充分可愛いし、庶民というが、それなりに教養もあるようだしね」

「あ、ありがとうございます」

エドアルドの褒め言葉に千花が赤くなるのをレイナルドが面白くなさそうに見た。

「アルド兄さん、まさかティカに気があるわけじゃないよね？ 随分彼女に好意的みたいだけど」

「さあ、どうだろうね。だけど、別に嫌いになる要素はないだろう？ 装ったティカはとても美しいし、そのままの彼女もとても興味深い女性だよ」

「……ふうん、否定はしないわけだ？」

レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨む。

自分のせいでなんだか険悪な雰囲気になりそうだったので、千花は慌てて口を開いた。

「あ、あのっ、エドアルド殿下、冗談はおやめください。今すぐ否定して——」

「ティカ、わたしも君に興味がある。いろいろとね」

エドアルドはそう言ったが、千花は彼がそう言うのは恋愛感情以外の理由からとは思えなかった。

それなのに、レイナルドをわざと煽るようなことを言うなんて、なにを考えているんだろうか。身分上失礼だとは思いながらも、千花は少しむっとしてしまう。

「……それは、わたしが異世界から来たからですか？ ああ、並外れて魔力が大きいことも関係ありますか？ もしかしたら、そのことでわたしに利用価値がありますか？」

「おいおい、ティカ。殿下に対して失礼だぞ」

それまで傍観していたシモンが慌てたように言ったが、千花は黙ってエドアルドをじっと見ていた。

「……これは手厳しいね」

エドアルドは驚いたように瞳を見開くと、次には苦笑した。

「本当に君は興味深い」

エドアルドが一瞬だけ熱い視線を送ってきて千花は少しうろたえる。それを見逃さなかったレイナルドがエドアルドに宣言した。

「いくらアルド兄さんでも、ティカは渡さないよ。兄さんに妃候補はいくらでもいるだろう？」

「あのっ、レイナルド殿下、誤解です。エドアルド殿下はわたしのことはなんとも思っておられませんから」

「ティカ、わたしは君のことを興味深いと言っているだろう？ それがなぜなんとも思っていないことになるんだい？」

慌てて取り繕うとする千花に、エドアルドは楽しげに言う。

「エ、エドアルド殿下、で、ですから、おふざけはやめてください」これはさっきの反抗的な態度への反撃だろうか。

もはや面白がっていると思えないエドアルドに、千花は狼狽えまくる。

「……王子達、いい加減に晚餐に入りたいんだが。食事を取りながらでも会話はできるだろう」

不機嫌そうにカイルが会話に割り込むと、エドアルドがくすりと笑った。

「ああ、そうだね。せっかくの食事が冷める」

とりあえず自分を取り巻く妙な雰囲気は少しだけ和らいだので、千花はほっとする。

直球なレイナルドはともかくとして、エドアルドの思わせぶりな態度は心臓に悪すぎる。

「ティカ、この食事は大丈夫そうかい？」

エドアルドにそう言われて、千花は大皿に盛られた料理を見る。どうやらここでの食事は大皿から自分の皿に取る形式のようだ。

「はい、大丈夫そうです」

料理もそんなに元の世界と変わりはないさそうだ。食事のマナーもよく分からない千花は少しだけほっとする。

「ティカ、取ってあげるよ」

レイナルドがかいがいしく千花の世話を焼く。

「あ、ありがとうございます」

レイナルドは気を利かせたのか全部の大皿から料理を取ってくれたので、千花は食べきれるか不安だったが、味も元の世界のものとそう変わりはなく、おいしく食べられた。異世界でも料理がそんなに変わらないなんて不思議なものだ。

「ティカ、もつと食べる？」

「もう充分です。というか、お腹いっぱいです。ごちそうさまでした」

「もう？ 小食だなあ」

そう言うレイナルドは見ていて気持ちよいくらい食べている。

他の男性陣も結構食べていて、確かにこの中では小食になるかも、と千花は食後のお茶を飲みながら苦笑した。

「それはそうと、ティカ。妃の件、考えとして。僕は君がその気になるまで待つから」

一応断ったはずだが、レイナルドには千花を諦める気は全くないようだ。

千花はレイナルドを見上げると、先程の自分の考えを彼にぶつけてみた。

「……殿下には、他にそういう方いらっしゃるんですか？」

「そういう方って、妃のこと？ いないよ。僕が妃にしたいと思っただのは君だけだ」

あまりにも簡単に言うから、てっきり他にも妃がいるのかと思ったら、レイナルドは結構身持ちが堅いらしい。

「そうなんですか？ わたしはてっきり何人も妃がいらっしゃるのかと思ってました」

「酷いな、僕はそんな無節操な男じゃないよ。妃は一人だけだと決めるし」

「す、すみません。軽率でした」

いかにも心外なことを言われたとばかりに憤慨するレイナルドに

対して千花が小さくなる。

けれど、その一人だけに選ばれてしまった千花は、事の大きさに気づいて慌てて言った。

「で、でも、わたしはいずれ家に帰るんです。ですから殿下のプロポーズはお受けできません。召喚魔法を覚えなければならぬので、何年もかかるかもしれませんけど――」

「駄目だよ。君は帰さない」

千花の言葉を遮ってレイナルドが真剣な顔で言うてくる。千花はその様子になんとなく不安を覚えて彼を呼んだ。

「……殿下？」

「帰るなんて駄目だ。カイル、ティカに召喚魔法を教えるな」

思いもかけず強権を振りかざすレイナルドに、千花は震えた。

もし、彼に本当にこのまま帰れないようにされてしまったらどうしよう――。

「レイド、気持ちは分かるけど、それはティカには酷だよ」

エドアルドが諭したことで、レイナルドがはつとしたように千花を見た。千花は瞳に涙を溜めながら小さく震えていた。

「……レイナルド殿下、わたしは帰りたいのに酷いです」

「ティカ、ごめん。君を傷つけるつもりはないんだ。僕は君が好きで、だから……っ」

レイナルドの腕が千花を抱きしめようと動くが、それはなぜか途中で止まった。

「第三王子、食事の席でティカになにをする気だ。俺の弟子を勝手にどうこうするのは、いくら王子でも許さない」

どうやらカイルがレイナルドの動きを止めたようだ。

「分かった。今はなにもしないから、カイル、拘束魔法を今すぐ解け」

レイナルドが顔をしかめて命ずると、カイルはすぐに魔法を解いた。

気さくだけれど、レイナルドのこういうところはいかにも王子然としていて千花は戸惑ってしまう。

そのレイナルドは物事を見極めるようにカイルをじっと見つめてから言った。

「……カイル、君も弟子を心配するにとしては態度がおかしいな。それは君もティカのことが好きだからなんじゃないか」

07 外見は可憐、中身は真っ黒

「……邪推するな、王子。ティカの強大な魔力には興味あるが、それ以外の感情は俺にはない」

「そうです！ そんなことありえませんか！」

鬱陶しそうに否定するカイルの言葉に千花は頷くと、拳を握って力説する。

「カイル、行く当てのないわたしに、弟子にならない場合は生活の保障は一切ないなんて言うんですよ？ 好きな娘にそんなこと言う人なんていますか？ いないですよ？」

ここぞとばかりに千花は王子二人に同意を求める。

「なんだって？ ティカにそんなことを言ったのか、カイル」

レイナルドが怒りと呆れの中間のような顔になって、カイルを問いつめる。

「それは……」

カイルは気まずそうに視線を彷徨わせた。

あー、俺様のカイルのこんなうろたえる姿が見れるなんて最高だわ！

千花は嬉しさのあまり、事の顛末を王子達にしっかりと伝えておくことにした。

「ええ、はつきり言いました！ その時のシモンさんも酷いんですよ。カイルに弟子をとれって言ったのはシモンさんなのに、どうにかしてくださいって頼んだら、カイルにどうにかされるのが怖くてわたしを保護できないって言ったんですよ。信じられないですよ！」

矛先がカイルから急に自分に変わったシモンがぎょつとしたように千花を見る。

「ティ、ティカ……」

「……シモン、君はカイルの師匠だろう。どうやら初めから諦めて

いたようだが、なんとか彼の手綱を取ることもできたんじゃないか？ 相談してくれば、わたしにも責任の一端はあるし、こちらでティカを保護したのに」

エドアルドが情けないとばかりに溜息をつく。叱責を受けている当のシモンは冷や汗をかいている。

ふふふ、ざまみろ。二人とも、わたしの苦悩を少しでも思い知れ。元の世界に何年も戻れないことになって、すっかりやさぐれていた千花は、心の中で暗い笑みを漏らしていた。

だが、その心情とは逆に、千花の瞳には大粒の涙が溜まり、その姿は哀れではあったが可憐で、王子達の同情を一心に集めていた。

「弟子の件を了承してなければ、今頃わたし、路頭に迷ってたかもこのままじゃ野垂れ死ぬかとも思って嫌々ながら弟子の件を了承したんですよ。そんな非道なことをするカイルがわたしのことを好きなのけないじゃないですか」

「そ、それはそうかも……。好きな相手にそんなことはしないよな」

「そうです！ ありえないですが、もし仮にそうだとしても、こんな顔だけ鬼畜魔術師なんて絶対にお断りです」

「おい、ティカ……」

千花の暴言にカイルが周りの空気をビキビキと凍らせているが、知ったことじゃない。

初めて会ったときはその超絶美形ぶりにすっかり見とれてしまったが、今となってはそれは人生最大の汚点だ。

「二人とも否定はしないところを見ると、事実なんだな。……ティカ、つらい思いをさせて悪かったね」

エドアルドが溜息をつく、千花に頭を下げてくる。

「えっ、そんな、エドアルド殿下、そんなことされないでくださいっ」

千花はエドアルドの行動に、びっくりして思わずうろたえた。

「しかし、仕官できないなら魔力の高い弟子を取れと最初に言った

のはわたしだ。シモンはそれをカイルに伝えたにすぎない。……もちろん、その経過には問題はあったけれどもね」

エドアルドは一見庇っているようだが、はっきりシモンを責めていた。シモンが更に小さくなる。

それでも、自分の責任はきちんと認めて身分が高い彼が庶民の千花に頭を下げて謝罪までしてくる姿に、千花は感動した。

さっき彼に反抗的な態度を取ってしまったのは悪かったかもしれない。

「エドアルド殿下、頭をお上げください。今回のことは殿下には予測されないことだったのでしょうか？　わたしは殿下に怒ることなんてできません」

「しかし、それではわたしが納得しないよ。……なんだったら君を王宮で保護して、ああ、もちろん待遇も出来るだけのことをするが、どうする？」

「それはいいね、アルド兄さん！」

嬉々としてレイナルドがエドアルドの案に賛成する。

「え……、でも悪いです」

王宮での生活なんて堅苦しいだろうし、それにうまく溶けこむ自信もない。

狼狽える千花に、エドアルドは諭すように言う。

「……ティカ、君にはこの世界のことを早急に知ってもらう必要がある。それには、ここにいた方が手つとり早いと思うよ。教師も揃っているしね」

「でも……、せっかくカイルの屋敷の人を紹介してもらったのに。

あ、それと自転車！　たまには乗らないと壊れちゃうかも」

乗らないことで滅多に壊れはしないとは思うが、たまには整備くらしいしないと。唯一元の世界から一緒に来たものだ。あれが壊れたら、ちよつとどころか、かなり寂しい。

「……自転車？」

二人の王子が不思議そうに聞いてくる。

「わたしが召喚された時に乗っていた乗り物です。出来たら、それで街も見えて回れたかったんですが」

「へえ、それどんなの？」

レイナルドが興味深そうに言うと、カイルが屋敷に置いてあった自転車を召喚してきた。

「へえ、これが自転車か」

「かなり精巧な作りだね。どんな構造か是非調べてみたいものだが」
「壊さないでください！」

エドアルドの言葉にぎょっとして千花は思わず叫ぶ。

「壊さないよ、大丈夫。構造を調べるだけだ」

王子二人がどうやって乗るのか聞いてきたので、千花は簡単に説明する。

「……そうか。しかし、先程来ていた服ならともかく、これにドレスで乗るのは無理じゃないかな」

「え、わたし、ドレス着るんですか？」

「君はわたしの客人扱いにする。普段着るのももちろんドレスだ。今君が着ているようなね」

「えええ、そこまでの待遇にさせていただかなくても結構ですっ」

まさかそんなお姫様待遇なんて思っていなかった千花は、思わず飛び上がって驚いてしまう。

「駄目だよ、君は異世界から来ているというだけでも結構な重要人物なんだよ。……そうだな、週末だけでもカイルの屋敷に行けるようにしようか。君の警護にはカイルがいるから、街に下りても大丈夫だろう」

「あ、ありがとうございます」

とりあえず、先程言った希望は聞いてもらえた千花はほっとする。城ではお姫様待遇というのがかなり気になったけれど。

「余計なことだ。ティカは俺の屋敷で面倒を見る」

「カイル、これはわたしからの命令だ。週末にティカを君の屋敷にやるのも、こちらとしてはかなりの譲歩なんだよ。言いたいことは

山ほどあるだろうが、文句を言わずに素直に聞いてほしいね」

穏やかだけれど有無を言わせないエドアルドの口調に、カイルが口を噤む。

「……分かった」

やがて、不承不承というようにカイルが頷いた。

さすがに不遜なカイルでも、王子の命令には逆らえないらしい。

だったら、もう少し口調にも気を使ってほしいと他人のことながら千花は気になってしまう。

「そしたら、君の部屋を用意しなければいけないね。……セルマ、すぐ手配出来るかな」

「はい、先程使用したご婦人用の客間が空いておりますので、すぐにティカ様にいらしていただいても大丈夫でございます」

「そうか。では、ティカにはそこを使ってもらう。……ティカもそれでいいね？」

エドアルドに一応確認されたが、すでにこれは決定事項のようだ。
「はい」

千花が頷くと、レイナルドが嬉しそうに声をかけてくる。

「ティカ、これで毎日君に会えるね」

「はあ……」

千花は突然の事態に少し呆然としてしまっ、思わず気のない返事をしてしまった。

「週末は城にはいないかな」

「お忍びで行くから問題ないよ」

この王子、ひょっとして街まで付いてくる気だろうか。

千花は少し驚いてレイナルドをまじまじと見てしまう。

「警護が面倒だから、第三王子は来るな」

カイルが冷たく言うが、レイナルドに堪えた様子はない。

「自分の身は一応自分で守る気にいるけど。それにしても、カイルは当代之の魔術師と言われているのに、ずいぶん自信がないんだな」

ああああ、そんな喧嘩を売るようなことを！

案の定むつとするカイルと、それを挑戦的に見つめるレイナルドの間で火花が散った気がして、千花ははらはらする。

「レイド、王子の君がお忍びでそんなに街に下りるのは問題だよ。程々にしないと」

「……分かったよ」

エドアルドに宥められて、レイナルドは渋々頷いた。

しかし、これで城とカイルの屋敷での生活を余儀なくされた千花はそつと溜息を付く。

……無理矢理城に滞在させることを決めさせたけど、エドアルド殿下も強硬にはカイルにわたしを家に帰せとは言わないんだな。

「ティカ、どうした？ 不安かい？」

溜息を付いたのをエドアルドがめざとく見ていたらしく、千花に聞いてくる。

「いえ、わたしを家に帰してくれれば、問題は解決するのになと思っただけです」

「ティカ」

そう言った途端にレイナルドが悲痛そうに見てきたので、ティカは内心うろたえる。

そんな捨てられた子犬のような目で見ないでほしい。

「俺はおまえを帰す気はないぞ」

カイルがこう言うってくるのは想定内だった。けれど、エドアルドが次に言った言葉は薄々感じてはいたが衝撃的で、千花は瞠目する。「……まあ、唯一異世界召喚が出来るカイルがこう言っている以上無理だと思うね。それに君に恨まれるのを覚悟で言うが、わたしもまた君を帰したくないと思っっているんだよ」

08 墓なんて建てられたらどうしよう

「アルド兄さん、やっぱりそうなんだ？ でもティカだけは譲れないよ」

レイナルドがむっとしてエドアルドを睨んだ。

「譲るも、譲らないも、選ぶのはティカだろう？」

エドアルドのおふざけは未だ続行中らしい。

千花は頭が痛くなってきた気がして、こめかみを押さえる。

「あの、お言葉ですが、わたしは誰も選びませんよ。わたしは家に帰るんです」

「ティカ……」

きつぱりと千花が宣言すると、レイナルドは情けない顔になる。

「それから、エドアルド殿下、そうやってからかうのはおやめください。余りすぎますと、ご兄弟の仲が悪くなっても知りませんよ」

「それは困るね」

千花の忠言にも堪えた風はなく、エドアルドは肩をすくめた。

「でも、君の存在は稀少でおまけに魅力的だし、帰したくないと思ってもちつとも不思議ではないだろう？」

「おい、第二王子、ティカを口説くのはやめろ」

カイルが間に入ってくるけど、口説いてるというのはちょっと違うと思うなあ、と千花は考える。

「……言っておきますが、わたしに異世界の知識を期待しても無駄ですよ。一応九年の義務教育は終了しましたが、専門的な知識を持っているわけでもないですし」

「この国にも五年の教育の義務はあるけど、九年は長いね」

「そうですね？ みんなその上の学校に行く人がほとんどですが。わたしも高校に通って一年目でしたが、このままこの世界に滞在すると、退学することになりそうですね。出来れば大学まで出たかったです。義務教育までの中卒じゃ就職にも相当不利ですし」

まあ、元の世界に帰った後で、大検を受ければいいのだろうが、それでも戻ったら戻ったで前途多難そうだ。

「それに、今は大学を出ても就職が大変らしいですし、本当にこの状況は困りますよ」

千花が思わず溜息を付いていると、シモンが我が意を得たりとばかりに嬉しそうに言ってきた。

「だから、魔術師団に入ればいいじゃないか。そうすれば、少なくとも生活に困ることはないぞ」

「絶、対、に、おことわりです」

千花はわざと強調して言ってる。まだ、この人は諦めてないのかと、千花は冷たい目でシモンを見る。

「僕の妃になれば、そんな心配することないのに」

レイナルドが期待を込めて見つめてくるが、そういうんじゃないんだよなあ、と千花は心の中で溜息を付く。

「……そういう問題じゃないんです。わたしが生きる場所はその世界なんです。それにわたしの国では、この歳で結婚するには親の許可が必要ですから。……第一、結婚するなら二十代半ばくらいでがわたしとしては理想なんですが」

「女でそれでは行き遅れだぞ」

呆れたようにカイルが言ってくる。

そうか、この国では結婚適齢期はもつと早いのかも知れない。

「そうなの？ わたしの国では普通に結婚しない人も増えてるけど。経済的な理由もあるし、他人と生活する必要がある人いない人もいるみたい」

「……そうなんだ。随分とティカの国は変わってるね。これは、妃の件は長期戦でいかないと無理そうだなあ」

カイルへの説明を聞いていたレイナルドが溜息を付く。

「まあ、高校のこととも問題なんですが、一番の問題は、あまり長くこの世界に滞在することになると、行方不明者として、元の世界で死んだことになってしまうことですね。まあ、戻りさえすれば、そ

れも取り消されはするでしょうけれど、下手したら、葬式とか挙げられたり、まだうちには墓はないので、そのためにわざわざ墓を建立されたりするでしょうね。帰った時に、墓誌にわたしの名前が刻まれたりしてたらものすごく微妙ですよ」

千花がこれからの厳しい先行きを想像して、難しい顔で言う。

「……墓誌？」

一同が不思議そうに千花に聞いてくる。

「日本は国土が狭いので、墓地の土地代も馬鹿にならないんです。だから、以前は個人で墓を建てたりしてたんですけど、今は家族単位で立てる人が多いんです。だから今は墓標とは別に、墓誌に亡くなった人の氏名やら没年月日を彫ったりするんです」

「へえー……、そうなんだ。王家では個人で墓標を立てるけどね」
千花の言葉を興味深そうに聞いていたレイナルドが言う。

「……そもそも一般庶民と王家の間では身分が違いすぎるのだから、比べるのが間違いだ。王家では遺体安置用の施設もあるだろうし。」

「つかぬことを聞きますが、レイナルド殿下、死んでないのに、墓標にご自分の名前が刻まれていたらどんな気分がしますか？」

「え……、それは、嫌な気分かな。勝手に殺すなって憤るかもしれない」

「そうですよね。……わたしも今まさにそんな気分です」

千花がそう言うと、一同は一斉に微妙な顔になった。

もしかしたら、自分がそうされた時のことを想像したのかもしれない。

「とにかく、わたしは早急に帰るつもりです。出来たら、三年くらいで。仕方ないので、もちろん死にもぐるいで魔術を教わる気ですが」

「ティカも結構意固地だなあ。ここにいたら、生活の心配もないのに」

レイナルドが帰るなど言外に言って、千花を見る。

「それはそうですが、向こうにはわたしがいなくなったら心配する親とか友人がいるんです。ここにくる前にも、買い物に行ってくるって言って、出ていったきりになってるし。きっと今頃うちの家族、心配してますよ。そんな人達を残して、のほほんと生活するなんてわたしには出来ませんよ」

「まじめだよねえ」

どう説得しても、家に帰ると主張する千花にエドアルドが苦笑する。

「そういえば、ティカは向こうで大学に行きたいと行っていたが、普通に通っていたら何年学校に通うことになるんだい」

「えーと、高校三年、大学四年で、全部で十六年ですね。その上の大学院とかもありますが、さすがにそこまでは行くつもりはありません」

「それにしても、ティカの国の教育体系はすごいね。もう少しっつこんで聞きたいくらいだ」

「……わたしは専門的なことは分からないと、申し上げたはずですが。わたしに聞かれても役に立ちそうなことはありませんよ」

「いや、それは話を聞いてからこちらで判断するよ。ティカがなんとも思っていないことが、こちらにはとんでもない情報と言ったこともありえるしね」

「っ、疲れた……」

あれからエドアルドに、教育のことやら、日本の政治のことやら、世界情勢などをかなりつっこまれて聞かれ、千花はすっかりしどろもどろになって、結局最後には「わたしはごく一般的な女子高生なので分かりません!」と言って部屋から飛び出してしまった。

セルマが慌てて千花の後を追って、彼女の部屋まで案内してくれた。

もう疲れたので寝ます、とセルマに言うと、彼女は納得したように頷き、千花の化粧を落としてから、いかにも上等そうな絹の寝間着を着せた。

千花は初めて見る天蓋付きのふかふかのベッドの上で、しばらく飛び跳ねてはしゃいでいたが、やがてそれにも飽きて、シーツにくるまった。

「明日、ティカ様付きの侍女を紹介いたしますね」

セルマは地位が高そうと思ったら、侍女長だった。なので結構忙しいらしく、新しく二名の侍女がティカに付くことになったらしい。そんなに人数はいらない、と千花は断ったが、もうエドアルド殿下が決めたことですからと、あっさりと断られてしまった。

あー、これもお姫様待遇かあ。

こんな小娘一人に、そんなにいらなと思うんだけだな。

そうこうするうちに、セルマは部屋を退出して、千花は一人ぽつんと残された。

あー、無断外泊かあ。怒られるかな、これ。

ケータイも持たずにこの世界に来たことはまずかったかなと一瞬思ったが、どう考えても電波が繋がるとは思えない。

いつ帰れるのかな、わたし。

千花は、ふとそう思うと、自然と涙が溢れてきた。

いろいろありすぎてそんなに泣く暇はなかったが、一人になると、やはり家族や友人のことが思い起こされて、千花は涙を流した。

帰りたい、帰りたいよ――。

千花を召喚して帰さないカイル、魔術師団へ入団するように薦めるシモン、カイルに召喚魔法を教えるなというレイナルド、元の世界に帰したくないというエドアルド、みんな酷いと思う。

保護してもらったことは感謝はしているが、彼らに対してドス黒

い思いがないと言えはやはり嘘になる。

千花はその感情を追い出すように頭を振ると、シーツを引き被ってかなり長い時間泣いていた。

09 異世界二日目

異世界二日目の朝。

……体がだるい。それになんだか熱っぽい気がする。

昨晚遅くまで泣きはらしていた千花は、寝返りを打ちながら思う。
「ティカ様、おはようございます」

「よくお眠りになりましたか？」

千花がだるくてベッドに横になったまましていると、寝室に新しい侍女と思われる二人の女性がノックして入ってきた。

日本人よりも濃い黒髪黒目を持つ女性と、栗色の髪に濃い青色の瞳を持つ女性。二人とも見たところ二十歳そこそこらしかった。

「あ……、おはようございます」

千花は慌てて起きようとして、くらりと目眩を起こし、再びベッドに沈んでしまった。

「……ティカ様？」

二人が慌てたように千花の傍に駆け寄った。

「まあっ、ティカ様、お熱がありますわ」

栗色の髪の侍女が千花の額に手を置き、驚いたように言った。

「お疲れが出られたのでしょうか。……ティカ様、食欲はございますか？」

黒髪の侍女が聞いてきた言葉に、千花は首を横に振った。それだけで頭がクラクラする。

「……あまりないです」

とにかくだるくて、食欲は感じない。

「医師をすぐに寄越しますわ。エイミ、ハロルド様をお呼びして」

「ええ、ディアナ」

どうやら黒髪の侍女がエイミ、栗色の髪の侍女がディアナという

らしい。

しばらくして五十代くらいの医師と思わしき人物が訪ねてきた。

「ティカ様、お加減はどんな感じですか」

「……とにかくだるいです。あと少し頭が痛いかも」

「ふむ」

ハロルドと侍女達が言っていた人物は少し考える素振りを見せると、千花の口を開けさせて喉を見た。それから彼は体温計に似たものを出してきた。

「お熱を計って頂いてもよろしいですか」

……異世界でも体温計つてあるのか。

千花はぼうつとしながら、それを受け取った。

「……脇の下に挟めばいいんですか？」

「はい、そうです」

どうやら、使い方も元の世界と一緒にようだ。異世界なのにちよつと面白いなど、具合は悪かったが千花は少し笑いたくなる。

千花が熱を計っているその間に、ハロルドは彼女の手首になにやら巻いて測定しているようだ。

そろそろいいでしょうと言われて千花はハロルドに体温計を返す。「風邪のようですね。昨日から王宮に來られたことで、疲れも出たのでしょうか。少し熱が高いようですから安静になさってください」

「はい、ありがとうございます」

千花はベッドに横になりながらハロルドに礼を言う。

それから侍女達にいろいろ指示した後、ハロルドは帰っていった。

「……ティカ様、食欲はないとのことですが、スープは飲めますか？ お薬も飲まないといけませんし」

「あ、はい」

エイミに起こしてもらって、ティカはぼうつとしながらもこぼさないように注意しつつ、コーンスープに似たものを口に運ぶ。……これならなんとか口に入れられそうだ。

震える手でスプーンを持ちながらスープをすくい、なんとか全部

飲み終わると、粉薬を一包み渡された。

「熱冷ましですわ。後でカイル様にも来て頂きますので、かなり症状は良くなられると思います」

白湯で熱冷ましを飲んだ千花はなんでカイル？ と首を傾げた。

「あの、カイル、来るんですか？ 魔術を教えに？」

「まあ、ティカ様の具合が悪いのに、そんな訳はありませんわ。

カイル様にはティカ様に治癒魔法を掛けていただくのです。……それと、ティカ様、わたくし達に敬語は不要です。どうか普段通りに振る舞われてください」

それから、ディアナとエイミが紹介が遅れましたが、とそれぞれ挨拶をしてくる。

エドアルドの客人で、高名な魔術師のカイルの弟子であるティカは、王宮でもかなりの重要人物であるので、一介の侍女である彼女達に敬語など使われると、逆に困るそうだ。

千花は少し迷ったが、エドアルドの客人という立場もあるし、ここは彼女たちの希望通りに振る舞った方が良さそうだと判断した。

「それではティカ様、よくお休みになれてくださいませね。もし、具合が悪いようでしたら、そこにある呼び鈴でわたくしどもをお呼びください。すぐに参りますから」

「うん」

千花は呼び鈴を確認すると頷いた。

「それではおやすみなさいませ、ティカ様」

「うん、おやすみなさい」

千花が再びベッドに横になると侍女達は退室していった。

ああ、こんな時に早速風邪引くなんてついてないなあ。

それにカイルに魔術を早急に習わなきゃいけないのに。

千花は自分の情けなさに溜息を付くと、徐々に襲ってきた眠気に身を任せた。たぶん、薬の中に眠くなる成分でも入っていたのだろ

う。

次に千花が目覚めた時には、ベッドの傍にカイルが立っていた。

「……カイル？」

「治療魔法を掛けたが、気分はどうだ」

言われてみれば、だるさがだいぶ無くなったようだ。

「うん、だいぶ良くなったみたい」

今度は自力で千花はベッドから身を起こす。すると、なぜかカイルが少し動揺した。

「おまえは何か羽織れ。その格好では体の線が丸分りだ」

「そうは言っても……」

周りを見渡すが、羽織るようなものはない。千花は呼び鈴で侍女を呼び出した。

「まあ、気が付きませんで申し訳ありません」

エイミが慌てて千花に繊細な刺繍のされている上等そうな肩掛けを羽織らせた。

「それで、カイル様、ティカ様の具合は良くなりましたのでしょうか？」

「ああ、心配ない。疲れもあるだろうから、三日は療養した方がいいが」

カイルの言葉に千花は驚いて目を見開く。

「まあ、それでは殿下にティカ様の体調が快方に向かわれたことをお知らせしてまいりますわ」

エイミが心底安心したように言って、千花の寝室を出ていった。

「三日も寝てなくちゃいけないの？ 今日一日休めば大丈夫だよ」

早く魔術を覚えて元の世界に一刻も早く帰らなければならぬ千花は気が焦っていた。

「……無理はするな。おまえのこの症状は、たぶん異世界を渡った

衝撃のせいでもあるんだろう」

「……そうなの？」

「ああ。異世界召喚は対象物に負担を掛ける場合もあるからな」

「それが分かかって、召喚するなんて酷いよ」

カイルが鬼畜魔術師だとは分かっていたが、そんな説明もされていなかった千花は憤る。

「ああ、そうだな」

その千花の怒りにカイルはかなりあつさりとした応えを返した。

「……それだけ？」

悪いとか、すまなかったとか謝罪はないの？

召喚して千花が魔法を覚えるまで帰す気はないと宣言しているカイルに半ば諦めてはいたが、このときの千花は具合が悪いせいもあって、カイルの態度にかなりいらしてしまった。

「そうだなって、それだけ？　せめてすまないぐらい言ったらどうなの。カイル、酷すぎるよ」

瞳に大粒の涙を溜めて千花が訴える。

「……そうだな」

それでもカイルからの謝罪はない。

千花は具合が悪いのやら、この先の不安やらを全て彼への憤りに変えてカイルを詰った。

「わたしが今こんな目に遭ってるのは、全部カイルのせいなのに。カイルなんて大嫌いっ」

「……そうか」

一瞬、彼が寂しそうな顔になったと思ったのは千花の気のせいだったか。だが、千花はそれをあまり気にせずにカイルに言った。

——出てきたそれは懇願。

「わたしを帰して。帰してよ」

千花は泣きながらカイルに訴える。

「すまない。それは出来ない」

俺様なカイルが初めて謝ったが、元の世界に帰してくれなければ、結局意味はない。

千花はぼろぼろと涙をこぼしながらカイルを責めた。

「酷い、酷いよ。カイル、酷い」

「ティカ、あまり気が高ぶるとまた具合が悪くなる」

誰のせいなの、と千花は叫びたかったが、カイルにそつと額を指で押された。

すると、急激に眠気が襲ってくる。どうやらカイルが魔法で何かしたらしい。

くたりと力が抜けた千花の体をカイルが支えた。

千花の頬に涙が伝う。瞋になにか柔らかいものが押し当てられたが、千花には確認するすべもなく、深い眠りに落ちていった。

10 わたしを挟んで火花を散らすのはやめてほしい

「カイル、やっぱりティカのことが好きなんじゃないか」

カイルは意識のない千花を寝台に横たえたと声のした方に振り返った。

寝室の入り口にはエドアルドとレイナルドが立っていた。

「意識のない女性の眦に口づけるなんて、普通弟子にはしないな」

エドアルドが言うと、カイルは少し眉を顰めた。

「……それがどうした」

「開き直りか。けれど、ティカは渡さないよ。僕の妃にするんだ」

「ティカは俺の弟子だ。第三王子の妃にはさせない」

「それは、おまえがティカのこと好きだからだろう？ カイル」

睨み合う二人の脇をすり抜けて、エドアルドがティカの頬に伝う涙を拭った。

「かわいそうに、ティカ。かなり気に病んでいたんだね」

「ティカに触れるな」

カイルの不遜な態度にもエドアルドは特に気にした様子もなく、涙の跡の残る千花を見つめていた。

「まあ、皆様、ご病気の方の寝室で騒がれるのはおやめくださいませ。隣室にお茶をご用意いたしましたので、そちらにお越しく下さい」

セルマが寝室に入ってきて諫めたことで、とりあえず険悪なその場は収まった。

「……俺は帰る。ティカは三日は療養させろ」

そう言うと、カイルは移動魔法でその場から消えた。

「なんだよ、これから追及しようとしてたのに逃げるなよ」

「……レイド、ティカの素顔を見たのに態度が変わらないな」

エドアルドが意外そうに眉を上げて言うと、レイナルドは頷いた。「うん、確かに顔立ちが幼いけれど、やっぱり十二歳には見えない

よ。それに、カイルに帰して欲しいと懇願した時のティカは今まで見た以上に艶っぽかったし。僕の彼女への気持ちは変わらないよ」

「確かに、あの時の彼女には思わずぞくりとさせられたな。セルマの言うとおり、いずれ彼女は美しく花開く時がくるのだろう。数年後には求婚者がひしめいているかもしれないな」

「そんなことにはさせないよ。彼女は僕の妃にするんだから。……アルド兄さんにも手を出させないよ」

エドアルドは挑戦的なレイナルドの言葉には答えず、話題を変えた。

「……しかし、ティカはカイルの言うとおり三日は療養させるとしても、しばらくはあまり過密な予定を立てない方がいいな」

エドアルドは顎に手を当てて考えるように言うと、話題を変えられたレイナルドも不承不承頷いた。

「そうだね、あまり無理はさせない方がいい。なんといつても、ティカには慣れない環境なんだから」

「まずは礼儀作法と魔術を習うことくらいか。それでもティカには大変だろうけれども彼女に頑張ってもらうしかないな」

エドアルドが小さく息をついて言うと、レイナルドは彼女の身を案じながらも同意した。

それから三日後。

千花の部屋の隣の客室で、朝食会が開かれていた。

侍女によって千花は再びお姫様そのものの格好をさせられている。

「ティカ、もう体の方は大丈夫かい」

「はい、もうすっかり。ご心配をおかけして申し訳ありません」

千花はエドアルドとレイナルドに頭を下げた。

「かなり疲労が溜まっていたんだろうから、君は謝らなくてもいいんだよ。君の体調のことまで気が回らなくて申し訳なかったね」

エドアルドに頭を下げられて、千花は慌てた。

「そんな、エドアルド殿下、わたしに頭を下げられないでください。そんなことされたら困ります」

「そうか、ではとりあえずやめておこう」

冗談めかして言われて、千花も思わずくすりと笑った。

「あ、あとお二人ともお花ありがとうございました。なにもする事がなかったので、とても嬉しかったです」

三日も療養することになって暇を持て余した千花は読書でもするかと本を広げたが、言語疎通の指輪は文字までは面倒を見てくれなかったようだ。

当然なにが書いてあるか分からない千花は、所狭しと花瓶に生けられた花々を眺めて過ごした。

それに、毎日王子二人が訪ねてきてくれてかなり助けられた。

こんなことになった原因のカイルはあれから姿を見せなかったが、ひょっとして大嫌いと言ったせいなのかもしれないな、と千花はふつと思った。

そのカイルも一応悪いと思ったのか、彼から大きな花束が連日届けられていた。

「ティカは花が好きなのかい？」

「え、まあ、人並みには好きです」

エドアルドに聞かれて、千花は頷く。

「そうか。なら、庭園に君を連れていこうか。ここの庭園は手入れが行き届いているから、君も楽しめると思うよ」

「そうなんですか？ 是非見たいです！」

そんな娯楽があるなら是非見たい。

千花はエドアルドに喜色満面の笑顔で言った。

「ああ。じゃあ、この後行こうか」

「はい」

思ってもいなかった展開に、千花はにこにこして頷いた。

「でも、驚いたよ。君がいきなり高熱を出して寝込んだんだから。」

良くなって本当に良かったよ」

レイナルドが急に話題を変えると、千花は彼に手を取られる。

「あ、あの……っ」

千花が彼の熱っぽい視線に戸惑っていると、エドアルドが助け船を出してくれた。

「レイド、ティカが困っているだろう。その手を離せ」

「……アルド兄さんがそう言うのは、ティカに気があるからだろう？ ティカに触れさせたくないからだ」

「……確かに、わたしはティカに惹かれているし、彼女に触れさせたくはないな」

……はい！？

予想もしなかったエドアルドの言葉に千花は驚いて、思わずエドアルドの顔を見た。

「ティカ、いきなりで驚くかもしれないが、わたしは君を妃にしたいと思っている」

こ、これは、殿下のからかいの延長だろうか？ うん、そうに違いない。

千花は自分で納得する答えを見つけると、心の中で大きく頷いた。
「エドアルド殿下、わたしをからわれるのはおやめください。言われていい冗談と、そうでないものがあります。殿下のこのご冗談はたちが悪いです」

「……まいったね。わたしは求婚のつもりで言ったのに、冗談にされてしまうとは」

きゅうこん、求婚！？

千花は心底驚いてエドアルドの顔をまじまじと見つめた。彼の顔は真剣そのものだ。

千花が彼の視線に思わずひるんでいると、レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨んで言った。

「ティカに求婚したのは僕が先だ。アルド兄さんにティカは渡さないよ」

二人の王子の間で火花が散った気がして、千花はあたふたする。

どどどうしよう、こんなときはどうしたら！

うまく働かない頭で千花は、先程エドアルドが言った庭園のことを思い出した。

「あ、あのつ、わたし、庭園に行きたいです！ それも今すぐ！」

なんとか二人の王子の暴走を止められた千花は安堵の息を付いていた。

二人に案内された庭園は確かによく手入れされていてとても綺麗だ。緩やかな風が花びらを舞い上がらせて、幻想的でさえある。

……しかし、チューリップとムスカリが咲いているその近くで、もう少し花期が先と思われるハーブと薔薇の花が咲いていて、季節感がまるでない。

……ここの植物体系はどうなってるんだと千花は首を捻りつつ、それでも美しい花々を堪能した。

「あ、桜！」

まさか異世界で桜を見られるとは思わず、千花は歓声を上げる。

「ティカは桜が好きなのかい？ それなら、少し離れた場所に立派な桜並木がある。よければそのうち案内するが」

「そうなんですか？ ぜひお願いします！」

エドアルドの提案に、千花は一も二もなく飛びついた。

「もちろん、僕も付いていくよ。アルド兄さんばかりに良い思いをさせたくないし」

「レイド、おまえは呼んでないぞ。……まあ、聞かれた以上仕方な

いか」

エドアルドが本当に仕方なさそうに苦笑する。

「まあ、エドアルド様、レイナルド様、おはようございます」

ふいに柔らかな声がして三人はそちらに振り返った。

そこには波打つ淡い金の髪と水色の瞳のとても綺麗な貴婦人がいた。

「おはようございます、義姉上」

王子二人が義姉上と呼ぶところを見ると、この人物は未だ千花が会ったことのない王太子の妃のようだ。

「——黒髪に焦げ茶の瞳。とても綺麗な方ですけど、そちらにいらっしゃるの、もしかしてカイルのお弟子ではないですか？」

そう言われて初めて千花は目の前の人物がカイルによく似ていることに気が付いた。

もしかしてこの人は——。

興味深そうに自分をまじまじと見つめてくる人物がカイルの関係者ということを感じ取り、千花はしばし呆然としていた。

11 王太子、まさかの登場

「ええ、そうですよ義姉上。彼女はティカ・サトー。十六歳です。いろいろありまして、彼女はわたしの客人としました」

呆然としているティカに変わって、エドアルドが如才なく返した。「まあ、エドアルド様の客人なら妙な貴族に手を出されはしないでしようから、安心ですね。……それにしても、こんなに美しい方を弟子になんて、カイル大丈夫かしら？　きちんと魔術を教えられるのかしら？」

「その点は我々が目を光らせていますので大丈夫ですよ、義姉上」
レイナルドが笑顔で美しい貴婦人に言う。

「……まあ、そうですね？　それはそれで、なにか寂しい気もするのですけれど。カイルは今ままであまりそういうことに興味がないようでしたから。……それはそうと、ティカ様でしたかしら」

「あ、はい」

突然名を呼ばれて千花は緊張する。

それが伝わったのか、貴婦人はくすくす笑った。

「まあ、わたくしにそんなに緊張なさらなくても大丈夫ですわ。……わたくしはカイルの実姉のコーデリアと申しますの。今の身分は王太子様であるルイスガルド様の妃なのですけれど」

王太子の妃というのは王子達の前後の会話から分かってはいたが、カイルの実姉だったとは、千花は素直に驚いた。

王太子妃ということは、結構いいところの出だね、と千花はちらり考える。

カイルの王子達に対する不遜な態度は、彼の魔術の実力以外にもそういうところからも出ているのかもしれない。

「まあ……、よく似ておいでだったので、もしかしたらと思ってはいたのですが、本当にそうだとは思いませんでした」

千花はなんとかそう返すと、目の前の美しい王太子妃を観察した。

……確かに色合いや顔立ちは似ているが、性格はカイルと違ってとてもやさそうだ。

「ティカ様、もしよろしかったら、この後、わたくしのお茶会に参りませんか？」

コーデリアがどこまでも無邪気に千花を誘ってくる。

「え……、けれどわたしが伺ってお邪魔ではないでしょうか。わたし礼儀作法も駄目ですし、王太子妃様に非礼を働かないとは言い切れません」

「まあ、そんなことお気になさらないで。わたくしはまったく気にしませんから。……それに、わたくし、あなたがカイルの弟子になったいきさつについて詳しく知りたいのですわ」

熱心に薦められるが、まともに敬語も扱えない千花としては少し荷が重い。

「あ、あの……」

どうやって断ろうかと千花が思案していると、見かねたらしい王子二人が助け船を出してくれた。

「義姉上、もしよろしかったら、我々も参加してよろしいでしょうか。ティカは病み上がりなので少々不安なのですよ」

「ティカはこの国のことに不慣れなのです。彼女もだいぶ不安のようですし」

エドアルドとレイナルドがそう言ったことで、コーデリアは瞳を見開いた。

「……まあ、そんな時にお誘いしてしまつて申し訳なかったですわ。それにしてもティカ様、エドアルド様とレイナルド様にとっても大事になさられているのですね」

「そ、そんなことは……」

「ええ、それはもう。僕は彼女を妃に考えていますから」

「わたしも同じくです」

千花が否定しようとする側から、王子二人が問題発言をしてくる。それに対して、コーデリアは頬を紅潮させると両手で覆った。

「まあまああつ。ティカ様、凄いですわ。エドアルド様とレイナルド様のお心を同時に掴まれるなんて！」

アクアマリンのような瞳をきらきらと輝かせると、コーデリアがずい、と身を乗り出してくる。

「え、でも、お二人とも化粧に誤魔化されているだけかと。わたしの素顔はかなり幼いですし」

まさか見た目十二歳の顔の女に惚れる男はいないだろうと、この時の千花は本気で思っていた。

「わたし達二人とも、君の素顔は知っているし、対外的にも化粧でこれだけ美しく装えるんだからなんの問題もないだろう」

「うん、だから安心してティカは僕を選んでくれていいよ」

「レイド、どさくさに紛れてティカを口説くな」

エドアルドがむっとして顔をしかめると、コーデリアが一瞬瞠目して、次の瞬間にはくすくすと楽しそうに笑った。

「まあ、エドアルド様のそんなお顔初めて拝見しましたわ。余程、ティカ様に心を奪われていらっしゃるんですね」

「……そ、そんなこと……」

こうなると、千花は真っ赤になって俯くしかない。

第一、王子二人が自分のことを妃にしたいというのも未だ信じられないのだ。

「ふふ、ティカ様、とてもお可愛らしいですね。なんとなく、殿下方が夢中になれるのが分かりますわ」

コーデリアがティカの手を取って微笑む。

……いや、普通夢中になるならこういう方だよなあ。とても綺麗だし、性格も良さそうだし。……王太子妃というのが一番の障害だけれども。

千花は両手を柔らかな手に包まれて考える。

この王子二人の美意識というか、好意を持つ基準というのが千花にはさっぱり分からない。

「——コーデリア、ここにいたのか」

少し低い男性の声がしたかと思ったら、王太子妃は王子二人を更に男性的にした感じの人物にいきなり抱きしめられていた。それだけでは終わらず、熱い口づけまで付いてくる。

「……ルイス、殿下方の御前ですわ」

コーデリアが頬を染めて男性に抗議する。

「かまわん。どうせ二人とも慣れているだろう」

どうやら彼が王太子らしい。

かなり予想外の登場の仕方だったので、千花は思わずぽかんとしてしまった。

対する王子二人は、仕方ないなどとも言つように苦笑している。

「起きたら、寝台におまえの姿が見えないので探したぞ。コーデリア、おまえは勝手に行動するな」

「まあ、侍女や近衛の者には伝えておいたはずですわ。ルイス、大袈裟すぎです」

ええと、それは察するに、お二人は朝までいちゃいちゃとベッドに一緒にいて、目覚めた時には妃の姿が見えなかった王太子が心配してお妃様を探しに来たつてことだね。ちょ、ちよつと刺激の強すぎる話かも。

千花は頬を染めながら思わず呟いた。

「らぶらぶなんですねえ……」

「……らぶらぶ？」

皆に一斉に注目されて、千花はそれにたじろぎながらも説明する。

「ええと、わたしの国の言葉で、夫婦や恋人同士が仲睦まじい様子を表した言葉です」

千花が言葉を発したことで、ようやく存在を認識したらしい王太子が彼女に向けて言葉を発する。

「……どうやら異国の者らしいが、何者だ？」

「彼女はカイルの弟子で、わたしの客人です」

エドアルドが千花がなにか言う前に受け答えしてくれたので助か

った。きつと王太子の前ではしどろもどろになっていただろうから。
「……カイルの弟子？　そうか、それでは士官の件は立ち消えか」
「なんでもカイル以上の魔力の持ち主らしいですよ。魔力を計る魔道具では測定不可能でした」

「それは純粹にすごいと思うけど、ガルド兄さん、僕はティカを妃にしたいんだ。できれば彼女を魔術師にしたいくない」

「レイド」

エドアルドがレイナルドをたしなめるように名を呼んだ。

「……しかし、それだけの魔力の持ち主なら魔術師を目指すのが一番だろう。カイルをも上回る魔力の持ち主の才能をみすみす見逃すような真似は国家の損失だ」

先程までの暴走っぷりが嘘のように、王太子は厳しい口調で言った。

「ルイスガルド、ティカ様はエドアルド様からも求婚を受けておられるのですわ。あまり国家のことを持ち出すのはティカ様がおかしいそうですわ」

「そうか、それならば魔術師として修行をしつつ、二人の妃候補とするのもいいかもしれないな」

コーデリアが口を挟んだことで、ルイスガルドは考えをあっさり改めたらしい。

けれど、千花には二人の妃候補になるなんて気は毛頭なかった。

「あ、あのっ。お言葉ですが、わたしはエドアルド殿下とレイナルド殿下の妃候補になるつもりはありません」
「なぜだ」

千花の言葉が意外だったらしく、ルイスガルドが目を瞠る。

「わたしはカイルに召喚されてこの世界に来ました。……ですから、召喚魔法を覚えたらわたしは家に帰るんです」

ルイスガルドとコーデリアは千花の言葉に心底驚いたらしく、千花を凝視した後、お互いの顔を見合わせた。

12 お姉様と呼んでいいですか

「……異世界から来ただと？」

信じられないことを聞いたかのようにルイスガルドはティカに尋ねた。

「はい。わたしは異世界の日本という国の人間です」

ティカが頷いて答えると、コーデリアは衝撃を受けたかのようによろよろと後ろに退いた。それをルイスガルドがしっかりと支えた。「カイル……、そんなことまでしてお弟子を取ろうとするなんて、なんて罪なことをするの。ティカ様本当に申し訳ないですわ」

悲痛な顔でコーデリアに謝罪されて、千花は慌てた。

「そ、そんなこと……っ」

カイルのやったことは確かに酷いことだが、こんな綺麗な人に心底すまなそうに謝られたら、千花はどうしていいか分からない。

「カイルを早急に呼べ。あと、シモンもだ。だとしたら、父王にも話を通しておかないとまずい」

「……やはり、そうしないと駄目ですか。できればしばらくは彼女をそつとおきたかったのですが」

エドアルドがそう言うが、王宮に滞在することになった時点で既にかなり振り回されているよね、と千花は思った。

「ああ。かなり急なことだが、仕方あるまい。すぐに謁見の手配をしろ」

ルイスガルドに命じられて、彼らに付いていた近衛騎士達が手配を行う。

「……あの、もしかしてわたし、王様にお会いすることになったんでしょうか？」

千花が不安そうにエドアルドとレイナルドを交互に見ると、エドアルドは頷いた。

「ああ、君には申し訳ないがそうしてもらっしかない」

「そ、そんな……」

あまりの急展開に千花は目眩がした。

ただの庶民が雲の上の人である王様に謁見するだなんて、千花には無謀としか思えなかった。

「ティカ、父王は穏やかな方だからそんなに心配することないよ」
レイナルドがつろたえる千花の肩に手を置いて安心させるように言う。

「で、でも、わたし、礼儀作法が分かりません。王様に失礼なこと
してしまいそうで怖いです」

礼すら略式のものしか教わっていないのだ。そんな千花の不安は仕方のないものだと言えた。

「ティカ、レイドの言うとおり父王はそんなに厳しい方ではないから大丈夫だよ。それより、いきなりこんなことになってしまっ
て悪かったね」

エドアルドにすまなそうに謝られて、千花は慌てた。

「いえ、エドアルド殿下が謝られることはありません。ただ、わ
たしが不安なだけで……」

自分の思いもよらないところで大事になってしまっ
て、千花はただうろたえるしかない。

千花が不安から瞳に涙を溜めて小さく震えていると、コーデリアにふわりと抱きしめられた。

「ティカ様、大丈夫ですわ。殿下方のおっしゃられるように、陛下はとてもお優しい方ですから、ティカ様が心配されるようなことは
ありません」

柔らかでいい匂いのするコーデリアに抱きしめられて、千花は幾分気分が落ち着いてきた。

「は、はい。うろたえてしまっ
て申し訳ありません、王太子妃様」
千花がそう言ったことで、コーデリアは彼女から体を離して微笑んだ。

「わたくしのことはコーデリアと呼んでください」

「……コーデリア様？」

「ええ。そして出来ましたら、ティカ様にはわたくしのお友達になって頂けると嬉しいのですけれど」

コーデリアに優しく微笑まれて、千花はうつとりしかけるが、次にははっと気づいて慌てて言った。

「わ、わたしでよろしかったら、喜んで！」

いけない、いけない。思わず百合に走っちゃいそうだったよ。ルイスガルドが知れば叱責が飛びそうなことを千花は思う。

しばらくすると、シモンとカイルがその場に現れた。

その途端にルイスガルドがカイルに詰問する。

「カイル、異世界の娘を召喚して弟子にするとはなにごとだ。そこまでして城に士官したくないか」

「ああ、したくない。それにティカは俺をも上回るほどの魔力の持ち主だ。そんな逸材を弟子にしてなにが悪い」

王子二人だけでなく、王太子にまで同じ口調で返すカイルに、千花はこんな時にもかかわらず思わず感心してしまった。カイルの不遜さはどうやら筋金入りのようだ。

「カイル、それではティカ様があまりにもおかawaiiそうですね。いきなり違う世界に放り込まれたティカ様のお気持ちも考えて差し上げませんと」

コーデリアに諭されたカイルがそこでふっと千花を見た。

そのカイルの視線を受けて、そういえば三日ぶりの再会だなあ、と千花は考える。

「……体はもう大丈夫なのか？」

「は？」

カイルから気遣うような言葉が出てきたので、耳の調子が悪いのかと思つて千花は聞き返してしまった。

「いや、だから、体の調子はどうなんだ」

「え、もう元気だよ？」

千花がきょとんとしてそう言うと、カイルとほっと息を付いた。

……もしかして、心配してくれてたんだらうか？

そんな考えが千花の頭の隅をちらりとよぎるが、いやいや、きっとこれはわたし自身を心配したわけではなく、弟子になにかあっては困るからだよね。その証拠に三日も音沙汰なしだったんだし、と千花は思い直した。

「カイル、このことは父王に報告しなければならぬ。その娘を元の世界に帰すかどうかはそのご判断にゆだねることになるぞ」

厳しい口調でルイスガルドがカイルに言うと、一瞬彼は瞳を見開いた。

「……そうか」

カイルは少し間をおいてそう言うと、そのまま黙り込んだ。さすがに俺様なカイルでも王命には従うしかないのだろう。

「カイル、あなた……」

驚いたように瞠目してコーデリアはカイルに声をかける。それに對して、カイルは首を横に振って言った。

「コーデリア、なにも言うな」

「わたし、帰れるんですか!？」

元の世界に帰すというルイスガルドの言葉に反応した千花は嬉々として尋ねた。

「ティカ……」

それをレイナルドが眉を下げて見てくる。

「まだ分からね。カイルをも上回る強大な魔力の持ち主を父王が見逃すかは、はなはだ疑問だしな」

「……そうですか」

どうやら過度の期待は禁物らしい。それを察した千花は肩を落とした。

「殿下、謁見の準備が整いましたとのことでございます」

「そうか、分かった」

近衛騎士の報告にルイスガルドは頷くと、シモンに謁見の間まで移動するように命じた。

大人数で謁見の間の扉の前まで移動すると、千花は中に入るよう促された。

一段高くなったところに、四十代ほどの気品のある男性と女性が並んで豪華な椅子に座っている。どうやら王と王妃らしい。

ルイスガルドに挨拶をしろと言われたので、千花は戸惑いながらもドレスを摘んで略式の礼をする。

「ティカ・サトーと申します」

「ティカか。わたしはカウスランドと言う。隣にいるのは妃のユリアーナだ。よろしく頼む」

藍色の瞳を和ませて、大国の王であるカウスランドは気さくに言った。

随分と気安いその様子に、ティカは思わずほっと息をつく。

「あ、はい、よろしく願います」

ぺこりと千花が頭を下げると、それに対して目の前の二人は優しく微笑んだ。

「さて、おおよその話は聞いたが、エドアルド、そのティカは異世界の娘で、カイルをも上回る魔力の持ち主であるが故にカイルに召喚されたことに間違いはないか」

「はい、そうです。魔力測定の時わたしも立ち会いましたが、虹色の光が部屋に満ちて、最後には魔法器具自体が消滅しました」

「ふむ。シモン、そういうことはよくあるのか？」

「いいえ、カイルですらありませんでした。それにあの魔力の色自体、わたしも初めて見るものでした。彼女は今後我々が見たこともない大魔法を生み出す可能性があります。わたし自身としては、ティカには士官させて、やがて初の女性魔術師師団長になってもらうことができたいのですが」

シモンのいささか興奮したような言葉を聞いて、まだこの人は諦

めてないのかと鬱陶しそうに千花は彼を見た。

「……そうか。しかし、そんな強大な力を持つのなら、こんな理不尽な召喚を受けた彼女はいずれ我々の驚異にならないだろうか」

「父王、それはティカがわたし達に復讐をするということですか？」

エドアルドが慎重に確認を取ると、国王は頷いた。

「ありていに言えばそうだ」

「父王、ティカはそんなことをする娘じゃないです！」

レイナルドがいかにも心外そうに叫んだ。

「わたしもそう思います、父王」

エドアルドが真摯な瞳をして言う。

「……おまえ達は、このティカに求婚をしているそうだな」

「はい」

「はい、そうです」

「確かに美しい娘だが、なぜだ」

「なぜと言われても……、なにせ一目惚れなもので。でもティカは可愛いですよ」

国王の質問に困惑したようにレイナルドが答える。

「わたしは最初ティカに対して異世界出身の、魔力がとてつもなく大きな娘である珍しさから興味を持っていました。わたしがティカに興味を持っていると伝えた時、彼女はそれを指摘して、自分に利用価値があるのかと挑戦的に言ってきましたよ」

「エドアルド殿下」

彼に不敬な態度を取ってしまったことを国王にばらされて、千花は思わず頬を覆う。

「ティカ、別にこれは君を責めているわけじゃない」

エドアルドが心配げに見てくる千花に安心させるように微笑むと、彼は国王に再び向き合って言った。

「わたしにあそこまで切り込んで言う女性は初めてで、とても新鮮でした。その時わたしは今まで出会ったどんな女性にも感じたことのない感情を彼女に抱きました。ティカを妃にしたいと思ったのは

その時ですね」

「ふむ、それではティカ、そなたに問う。そなたをこんな目に遭わせた我々に復讐したいと思うか？」

呆然と自分に対する二人の想いを聞いていたティカは、国王に声をかけられてはつと我に返ると慌てて首を横に振った。

「復讐なんて、そんなこと考えたことはありません。エドアルド殿下やレイナルド殿下にはとてもよくして頂いてます。こうして保護までして頂いてるのですし、そのことは凄くありがたいと思っています。ただ正直なところを言いますと、カイルのことはとても恨んでいます」

千花が正直に告げると、カイルの顔が一瞬苦しげに歪んだ。

13 帰還か残留か

「ティカ様……」

カイルの実姉であるコーデリアが少し哀しげに千花の名を小さく呼ぶ。

彼女の前で、弟であるカイルをこうもはっきり恨んでいると言っ
てしまったのはまずかったかもしれない、と千花は思ったが、事
実は事実。

「そうか、カイルを恨んでいるか。ティカは正直だな」

「はい」

思わず苦笑してくる国王に千花はまじめな顔で頷いた。

「父王、それでティカの処遇はどうなるんですか？」

国王の決定を待ちきれないかのようにレイナルドが身を乗り出し
て尋ねる。

「そうだな……、ティカ、そなたもし帰れないとしたら、魔術師に
なること以外でどうしたい」

——ああ、やっぱり帰れないんだ。

国王の言葉でそれを確信して、千花は肩を落とした。正直泣きた
かったが、どうにかこらえる。

「そうですね……、帰れないのなら、せめて家族にわたしが無事で
いることを伝えたいです」

「……そうか。カイル、ティカの家族に書簡を届けることは可能か
？」

「——はい。それは可能です」

「……！？」

自宅に書簡を届けることが可能というのも気になったが、それよ
りもカイルが国王に丁寧な言葉で返したことが衝撃で、千花は
思わずまじまじとカイルの顔を見てしまった。

「まあ、書簡を届けるのはよいですね。彼女のご家族も安心なさる

でしょう。カイルぜひお願いします」

今まで事態を見守っていた王妃がほっとしたように笑顔になって言う。

「はい、かしこまりました」

なんだ、普通にこういう言葉使えるんじゃない。だったら殿下方にも少しは気を遣ってほしい。

そう思いながら千花がカイルを見てみると、ふと彼と目が合ったけれどそれは一瞬のことで、すぐにカイルは国王に視線を戻した。「さて、ティカ。だいたい予想はついていると思う。申し訳ないが、そなたにはこの国にとどまってもらうこととする」

「……はい」

覚悟はしていたものの、実際に国王の口から聞くとかなりこたえる。これで事実上、すぐに家に帰ることが不可能になってしまった。涙が頬をこぼれ落ちていって、千花は慌てて俯く。

「ティカ様」

コーデリアが心配げにティカに寄ってきて、そっとハンカチを差し出した。

「……ありがとうございます」

ありがたくコーデリアからハンカチを借りて、千花は溢れてくる涙を拭く。

「ティカ、泣かないで」

レイナルドが傍に寄って気遣わしげに言ってくるが、こういう場合は逆効果だ。千花は益々涙が止まらなくなって困ってしまった。

「ティカ……」

エドアルドも千花の傍に寄ってきたが、なんと声をかけようか困惑しているようだった。

「ティカ、我々はそなたに酷なことをしている。どうかこの国のためにカイルに師事して、いずれは強大な魔術師になってほしい」

「……お言葉ですが、わたしは何年かかっても家に帰ります」

「異世界召喚を扱えるようになれば、さすがに帰るなど強制するこ

とは出来ないが、わたしはそなたにあちらよりこの世界を選んでもらうことを望む。よって、そのための努力は惜しまないつもりだ。それは、ここにいるほとんどの者も同じ思いだろう」

国王の言葉に、千花が顔を上げて見渡せば、それに同意するように皆が頷いた。

「……わたしはそなたが我々に復讐したいと答えれば、すぐにも元の世界に帰させるつもりでいた」

……そうだったのか、と千花は思わず呆然とする。

言われてみれば、確かにそう答えればよかったのだが、お世話になった人達に嘘でもそんなことは言えなかった。

「素直で、優しい娘。どうか我々を許してほしい」

「……わたしは優しくなんてありません。この世界に召喚されたことが分かった時、カイルを平手打ちしました。その後もボコボコに殴りました。カイルにも凶暴と言われましたし」

「カイルをボコボコか。ティカは気が強いのだな」

千花の言葉が思いもかけないことだったらしく、国王は苦笑する。見ると隣の王妃もおかしそうにくすくす笑っている。

「——それでも、充分そなたは優しい娘であるよ。だから、どうか今はここにとどまってほしいと思う。ティカ、本当にすまない」

まさか一国の王に頭を下げて謝罪されるとは思わず、千花は慌てる。

「そ、そんな、どうかわたしに頭など下げられないください。陛下に謝罪などされたらわたしが困ります」

「わたしの決定でそなたのこれからが決まってしまったのだ。これくらいはさせてほしい。……ところで今はエドアルドの客人扱いと聞いていたが」

「はい、そうです」

千花は国王の確認に頷いた。

「そなたはこの国の重要人物だ。これからはわたしの客人として扱う。エドアルド、それでよいな？」

「はい、わたしに異存はありません」

思いも寄らない展開に、えええ！？　と思わず叫びそうになった千花は、慌てて自分の口を両手で覆った。

「そ、そんな今ですら身に余っていますのに。……あ、そうすると週末にカイルの屋敷に戻るといふのはどうなるのでしょうか」

うるたえつつも千花がエドアルドを見ると、彼は頷いた。

「父王、できましたら千花は週末にカイルの屋敷にやってほしいのですが。たまには彼女にも息抜きが必要でしょうし」

「うむ、それはカイルがいるなら護衛も必要ないだろうし、構わない。ティカをあまり王宮に縛り付けても気の毒であるしな」

……とりあえず、週末に庶民生活を満喫することは確保できたらいい。千花は思わずほっとする。

「それでは、これで謁見は終了とする。そなたをこんな状況に追い込んだわたしが言うのもなんだが、ティカ、これからいろいろとつらいことがあるかもしれないが、どうか乗り越えてほしい」

「ティカ、あなたがすばらしい魔術師となる日を待ちわびていますよ。頑張ってくださいね」

「は、はい」

国王と王妃にそれぞれねぎらいの言葉をかけられて、千花は慌てて頷いた。

それから国王と王妃が退室して謁見は終了となった。

途端に極度の緊張から解放されたこともあって、千花はその場にくずおれそうになり、エドアルドがそれをとっさに支えた。

「大丈夫かい、ティカ。駄目ならわたしが君を部屋まで抱えていくが」

「ええっ、だ、大丈夫ですから！」

「しかし、君は病み上がりだし無理はしない方がいい」

いえ、そういう問題じゃなくて、単に恥ずかしいからです！　と言ったら自意識過剰だろうかとか千花はうーんと悩む。

「それなら僕がティカを部屋まで運ぶよ。ね、ティカいいだろう？」

エドアルドに対抗するように、レイナルドが聞いてくる。

千花が頭を抱えたい思っている、カイルから思わぬ助けが入った。

「そんな面倒なことをする必要はない。ティカは移動魔法で部屋へ送る」

「！ あ、うん、ぜひお願い！」

カイルには恨みつらみはあるが、この時は本当に助かった。部屋までお姫様抱っこなんて恥ずかしすぎる。

千花が半ば必死に頼むと、カイルはまじめな顔で頷いた。対する王子達はとも残念そうだ。

「では移動させるぞ」

「うん」

「ティカ様、お待ちください」

移動する段になって、コーデリアが慌てたように声をかけてきた。なんだろうと千花が振り返ると、彼女から出てきたのは意外な言葉だった。

「ティカ様、今回のカイルの所業は酷いものです。それは充分分かっていきます。ですがティカ様、お願いですからカイルを嫌わないでやってください。カイルは……」

「コーデリア、余計なことを言うな」

真摯に訴えてくるコーデリアの言葉をカイルが無理矢理遮る。

「……すみません、コーデリア様。それは無理です」

それはどうしても受け入れられない願い。

千花はコーデリアに頭を下げた。

「……召喚が事故だったら、まだ許すことも出来ます。でも、これは明らかに故意です。だからこそわたしはカイルを許せない」

その言葉に、カイルがつらそうに顔を背ける。

俺様のカイルでも人に嫌われるとつらいのかと千花は言いながら考える。……けれど、彼の場合は自業自得だ。

「わたしの人生はカイルのせいで滅茶苦茶にされたんです。わたし

は彼の弟子になることを了承しましたが、それは脅されたから仕方なくそうしたまでです。そうでなかったら、わたしは今頃路頭に迷っていたでしょうから」

コーデリアが思ってもいないことを言われたかのように息をのむ。そしておずおずと千花に確認してきた。

「カイルがあなたを脅したのですか？」

「はい。弟子にならない場合は生活の保障は一切ないと」

そこでコーデリアは瞠目し、カイルを見た。

「カイル、本当なのですか？ テイカ様にそんなことを……」

「事実だ。俺はテイカを脅して弟子にした」

カイルが簡単にその事実を認めたので、コーデリアは絶句する。

「……ですから、わたしはカイルをこれからも憎みます。それくらいの権利はあると思いますから。申し訳ありません、コーデリア様」
「テイカ様……」

いつの間にか傍に寄ってきたルイスガルドに抱き寄せられながら、コーデリアが呆然とつぶやく。

それに対して、千花は彼女に頭を下げる。

そうしているうちに、カイルは移動魔法を施行して、千花を部屋へと運んだ。

14 庶民生活だけは死守

部屋に戻った千花に告げられたのは、これから礼儀作法の授業が待っているということだった。

わたしは授業の時間までディアナに濃いめのミルクティーを入れてもらって、応接セットの長椅子に座って休憩した。

本当は寢室に駆け込んで泣きたかったけど、ディアナ達にも心配かけるだろうし、なんとかそれは思いとどまった。

千花が深いため息をついていると、エドアルドとレイナルドの来訪が告げられる。

千花が入室してもらうように言うと、ほどなくして二人は現れた。二人に応接セットに座ってもらうと、千花は立ち上がって頭を下げる。

「お二人とも先程は取り乱してしまって申し訳ありませんでした」

「そんなこと誰も気にしてないから大丈夫だよ」

「あの状況で取り乱すと言う方が酷だろう。……ティカ、大丈夫かい？」

二人が首を横に振って、千花を心配そうに見る。

「大丈夫、って言ったら嘘になりますね。やっぱり家に帰れないのはショックです」

千花は出来るだけ明るく言おうとしたが、結局泣き笑いのようになっってしまった。

「ティカ……」

「でも、帰れないのはもう決定してしまったし、今は自分に出来ることをやるだけです。家に帰るという目的のためにも魔術を早く習得したいし」

「……わたし達になにか出来ることはあるかい？」

エドアルドが真摯な瞳で千花を見つめて言う。

「いえ、これといって思い浮かばないんですが……、あ、わたし、

この世界の言葉を習いたいです。話すのは言語疎通の指輪でどうに
なってますが、さすがに文字までは理解できないので」

「そうか。ならば、早速教師の手配をしよう。……だが、君が大変
になってしまうけれどいいのかい？」

「はい、わたしなら大丈夫です。それに、数年はこの世界に滞在す
るんですから、言葉が分からないと不便でしょう？ このままじゃ
本も読めませんし」

「確かにそれは不便だよね」

レイナルドが頷きながら同意する。

「ティカはこの後、礼儀作法を習うのだったね」

「はい、それから午後に魔術を習うことになってます」

エドアルドの言葉を肯定しながら千花は付け足した。

「では、その前に語学を入れようか。これは出来るだけ早く習得し
たほうがいいからね」

「はい、ありがとうございます」

千花はエドアルドに頭を下げて微笑んだ。

「……ところで、明日カイルの屋敷に行くんだったね」

「あ、そうですね。そういえば、こちらは一週間が六日なんですね
「ティカの世界は違うのかい？」

「わたしの世界では七日でした。一年が365日で四年に一度36
6日になるんです」

「なにか複雑だなあ。ここは通して一年が360日なのに」

レイナルドが興味深そうに言う。まあ、閏年の存在は確かにちょ
っと複雑だ。

「そういえば、先程ティカはカイルをボコボコにしたと言っていた
が、いったいどんな状況だったんだい」

「ああそれ、僕も是非知りたいな。あのカイルがボコボコにされる
ところがまず思い浮かばない」

ふと思い出したようにエドアルドが言った言葉に、レイナルドが
興味津々といった態で身を乗り出した。

なんだか自分の凶暴さを暴露するようで千花は少し嫌だったが、こんなに期待されては仕方がない。千花は仕方なく話し出した。

「……ええと、お城に来る前の話なんですが、わたし召喚された時、この国の常識ではちよつとはしたない格好してたみたいなんです。それでこの服に着替える時に汗かいてたので、お風呂に入らせてもらおうとしたんです。それで、カイルの屋敷の女中の人に着替え一式渡されて、いざお風呂に入ろうとしたら、そこにカイルが残ってた」

千花がいったんそこで話を切ると、王子二人は呆れたような顔をした。

「それは非常識だな」

「カイル、なにを考えてるんだ」

二人が口々にカイルの非常識さを非難するが、肝心な話はこれからだ。

「それで、わたしがカイルに出ていってくれって頼んだら、カイルなんて言ったと思います？ 『なんだ、せっかく背中を流してやるうかと思ってたのに』 って言っただですよ！ わたし寒気がして、思わずカイルをボコボコにして追い出しましたよ。その前も人の体じろじろ見て『目の保養』とか言うし！」

「それはありえないだろう、カイル」

あまりのことに啞然としてレイナルドが言う。

「……まあ、さすがに背中を流す云々は冗談だと思うが、女性に言うようなことじゃないな」

エドアルドも呆れたように溜息をついた。

「まあね。冗談なのは確かかもしれない。やろうと思えばカイルは風呂でもなんでも覗き放題なんだし」

「は？」

頷きながらのレイナルドの言葉に、千花の目が点になる。

「カイルは移動魔法が使えるだろう？ だからどこへでも移動できるし」

「あ」

そうか、そのことをすっかり忘れてた、と千花は口元を覆う。移動魔法が扱えるということは、いくら浴室の鍵をかけても無駄ということだ。

「……やっぱりティカをカイルの屋敷にやるのは危ないかな。寝室に忍ばれて拘束魔法とか使われたらまずいし」

「……レイナルド殿下、なにか変なことを想像してませんか？」

寝室で拘束とか、まるで変態ではないか。

千花が口の端をひくつかせて言うと、レイナルドがしまったと言うような顔をした。

「い、いや僕はティカの身の安全を考えてだね……」

「まあ、わたしもそういうことはない、と思いたいけどね。しかし、君をカイルの屋敷にやるのは早まったかもしれないと思ってるよ」

冷静なエドアルドまでそんなことを言うので千花は慌てた。

このままでは週末の楽しい庶民生活がなくなってしまうかもしれない。

「いくらカイルでも、そんなことありえませんか。わたしも見た目十二歳ですし！」

「いや、君は素顔でももう少し上に見えるよ。体つきもいいし」

エドアルドはフォローしているつもりなのだろうが、余計なセクハラ発言までついてきた。

「第一体を眺めて目の保養と言うのは、そういう対象で見るとしかならないし」

「そういう対象って、どういう対象ですか！？」

浮かんでくる恐ろしい想像に、思わずうろたえながら千花が叫ぶように聞く。すると、レイナルドが非常に言いにくそうに言った。

「……いや、異性として見ている、というか……」

「ないです不是吗！ そんなことは絶対にありえませんかー！」

無理矢理召喚されたあげく、そんな対象に見られるなんてごめん

だ。

それに、そんな疑いのために、数少ない庶民生活の日を潰されるのもごめんだった。

千花が椅子から立ち上がって叫ぶと、二人はその勢いに押されたように黙りこんだ。

「あ……うん、まあ、ちょっと考えすぎだったかもしれないな」

「……まあ、カイルにも理性はあるだろうしね」

二人は肩で息をしている千花を毒気が抜かれたように見上げながらそう言った。

とりあえず、週末の庶民生活を死守した千花は、王子二人を見送ると礼儀作法の授業を受けた。

まずはお互いの名を名乗ることから始まったが、立ち方からしてよくないと女性教師から厳しい指摘を受けた。ちなみに教師の名はゼネットだそうだ。

「背筋をまっすぐ伸ばしてください。駄目です、右肩が下がっています！」

千花が身動きする度に厳しい叱責が飛ぶ。

まさか立ち方一つでこんなに何か言われるとは思わなかった千花は、お姫様が実はいかに大変か分かったような気がした。

「はい、そのまままっすぐ歩いてください。……ティカ様、また右肩が下がっています！」

どうにか直線上を歩く練習まではこぎ着けたが、またこれがまっすぐ歩けなくてゼネットからお目玉を頂戴することとなった。

「……それでは次までに今お教えしたことをしっかり復習なさってください。それがお出来になりましたら、礼の授業に入ります」

叱られ通しの一刻（約二時間）の礼儀作法の授業は終わった。

千花は少々ぐったりしながら軽い昼食を終え、今度は語学の授業

になった。

現れたのは魔法使いのような長い白髭を生やしたおじいさんだった。千花が聞いたらやはり魔術師でグレッグと名乗った。

「ティカ様は全く文字が分からないそうなのでこれを持ってきました」

そう言っ出て出されたのは可愛い絵本。

全く分からなければ、やっぱり小さい子向けの教え方になるよね、と千花は心の中で苦笑する。

「むかしむかし、あるとうにつくしいおひめさまがねむっていました」

グレッグが先に一文を読み上げる。

「いいですか、これが『むかし』、これが『とう』、これが『うつくしい』です」

単語を指し示しながら、グレッグが説明する。

千花はその文字を紙に書き移しながら、言語疎通の指輪を外し、グレッグと合わせて発音した。

「はい、そうです。大変よろしいですよ」

グレッグは先程の礼儀作法の教師のゼネットとは違って優しく教えてくれる。

今度は優しい先生でよかったと千花はほっとした。

途中で談笑を挟みながら千花はグレッグに文字を教わり、最後に勉強に使った絵本を彼からもらった。

「ティカ様、それで今日勉強したところの復習をお願いします。その本はまだ使いますからまた持ってきてください」

「はい」

グレッグの優しい笑みに、千花も微笑み返して和やかな時間は終わった。

それにしても、さっきの授業と同じ時間のはずなのに、楽しい時はすぐに過ぎるものだなあと千花はしみじみ思った。

「んー……、これであとは魔術の授業かあ」

礼儀作法の教師のゼネットとカイルではどちらが厳しいだろう。

…… やっぱり鬼畜なカイルの方がより厳しいそうな感じがする。

千花は深い溜息をつく、カイルが呼びにくるまで部屋で休憩及び待機をしていた。

15 お風呂でどのくらい息止めていられるかなあ

程なくして、カイルが千花の部屋を訪れてきた。

「魔術師団の師団舎まで行くぞ」

「うん」

訓練はエドアルドとレイナルドが以前の会話で決めた通り、そこで行うことになっていた。

「ティカ」

移動魔法で魔術師団の師団舎に行くと、そこにはなぜかエドアルドとレイナルドがいた。

「お二人とも、なぜここに」

「いや、君のことが気になってね」

「なにせ、ティカの初訓練だし」

いくら魔力があっても、こっちはただの初心者なのだ。正直そんなに期待されても困るんだけどなあ、と千花は王子二人にちらりと目をやる。

「おお、ティカ来たか！」

抱きついてきそうな勢いで、シモンが駆け寄ってくる。もちろん千花はしっかりそれを避けておいた。

「師匠、ティカに抱きつこうとするな」

「孫弟子に抱きついてなにが悪い」

「やっぱりそうだったんですか？ 避けてよかった」

不本意な抱擁を受ける羽目にならなくて、千花がほっと胸をなで下ろした。

「師団長、こんな時まで若い娘にやたらと抱きつこうとする癖はやめてください」

……実は女癖が悪かったのか。これからはなるべくシモンの近くに寄らないようにしようと千花は拳を握って決意した。

二十代前半くらいの魔術師がその後もシモンに説教している。そ

れなりに地位のある人なんだろうか。

「ああ、分かった分かった。アレクセイ、おまえ口うるさすぎるぞ」
「師団長がごく一般的な師団長であれば口出しはしませんが」

弟子も弟子ならどうやら師匠もいろいろと問題ありらしい。カイルのアレな性格は、間違いなくこの人のせいでもあるのだらうと千花は確信した。見ると、王子二人もシモンのこの性癖を知っていたらしく、苦笑している。

「……それでは、演習場を借りてティカの訓練するが問題ないな？」

「ああ、存分に使ってくれ。ただ、壊されたりすると困るが」

「確か演習場には防御結界が張ってあっただらう。それでは駄目なのか」

「万が一と言うこともある。ティカの魔力の大きさなら尚更な」

「……分かった。俺がその結界を更に強化させる。それでいいか」
「ああ」

シモンが頷いたことで、カイルは詠唱を始めた。……どうやら演習場の結界を強化しているらしい。

「……これで、多少の衝撃は吸収できる。それでは使わせてもらうぞ。ティカ、来い」

カイルの俺様口調にちよつとむつとしつつも、魔術の訓練はしなければならなので、千花は仕方なくカイルの傍に寄った。

「まず、初等魔法から教える。明かりを灯す魔法だ。まず明かりを灯す手を掲げる」

カイルが短く呪文を唱えると、その手のひらに明るい球体がふわふわと浮いていた。

「あれ、言語疎通の指輪じゃ呪文の意味分らないんだね」

「ああ、魔術の呪文は、指輪の範囲外だ」

異世界の言葉は分かるのに、この世界の呪文の意味が分からないとは、この指輪謎過ぎる。

とりあえず千花は、手のひらを上に向けてまた繰り返されたカイ

ルの言葉を復唱した。

すると手のひらから光の球体が浮かび上がり千花は思わず歓声を上げた。

「わあ、すごい。出来た出来た！ あ、反対側も出来るかな」

そう言つて片方の手も掲げた途端、呪文も唱えていないのに光の球体が浮かび上がった。

「簡単な魔法とはいえ、無詠唱で出すとは。初めてでこれはすごい」
先程シモンに説教していたアレクセイが驚いたように言った。

「ね、これ消すの、どうやるの？」

千花がそう言った途端、両手に灯っていた明かりが突然消えた。

「……これに関しては、ティカには呪文いらないんじゃないか？

それにしてもすごいな。強大な魔力は伊達じゃないってことか」

少し呆れたようにシモンが言った。……そんなに今のは常識に外れていたんだろうか、と千花は首を傾げる。

「……一応消す時の呪文を教えてもいいが、ティカ、覚えるか？」

「う、うん、お願い」

千花は慌てて頷いて、カイルに明かりを消す呪文を教えてもらった。

……それにしても、カイルのことだからどんな鬼畜な教え方になるんだろうと思つていたが、案外丁寧だ。

千花はちよつと拍子抜けして少しぼうつとしていたら、カイルに額を小突かれた。

「ぼうつとするな。この魔法自体は大したものじゃないが、少しの油断が大きな事故を引き起こしたりするんだ。その点は心しておけ」

「うん、ごめん。分かったよ」

カイルの言葉はいちいちもつともで、確かにこんな時にぼうつとしていたのはまずかった。

千花は小突かれた額を押さえながら、カイルに謝る。

「……ならいい。それでは、これからおまえに水魔法を教える。あ
の木偶人形に向けて今から言う呪文を唱えろ」

カイルがここから少し距離のある木偶人形を指さして言う。

カイルの今度の呪文は、先程の明かりを灯すものよりも少し長めだったので、千花は自分でもこれは怪しいかなと思いつつ、呪文を唱えた。

「馬鹿、違う……」

カイルがなにか言う間もなく、バケツをひっくり返したような大量の水が千花に降り注いで、彼女は悲鳴を上げた。

「ティカ！」

「ティカ、大丈夫かい？」

今まで見守っていた王子二人が、見事に濡れネズミになった千花へと慌てて駆け寄る。

「は、はい、大丈夫です。すみません、失敗しちゃいました」

ぼたぼたと水を滴らせながら、千花が苦笑して謝る。すると、なぜか王子だけでなく、周りにいた男達が千花を見て絶句していた。

どうしたんだろう、と千花が首を傾げるが、はた、と今の状況を顧みて慌てた。

「あ！ ごめんなさい。水浸しにしちゃって」

「いや、それは大丈夫なんですが……」

アレクセイが千花から視線を逸らすようにして言う。

「おまえはなにをやっている。呪文が分からなければ聞き直せばいいだろう」

カイルの言うことはもっともだったので、千花は俯いて「ごめんなさい」と謝った。

カイルは舌打ちを一つすると、大きなタオルを召喚して千花に渡した。

「すぐに拭け。体の線が浮き上がっているぞ」

カイルにそう言われて、自分の姿を見下ろした千花は慌ててタオルで体を隠した。

「やっぱり、ティカは結構胸があるな」

まじまじと千花の体を見つめてセクハラ発言をするシモンを千花

はキツと睨みつけると、あんたも水浸しになれと心の中で叫ぶ。
するとシモンも大量の水を被る羽目になった。

「おい、ティカツ」

これが千花の仕業と察したシモンが水浸しの情けない格好で叫ぶ。
「自業自得です」

つん、と千花が横を向くと、周りの男達が苦笑した。

「シモンは言わなくてもいいことを言うからね。黙っていれば分からないのに」

「まあ、シモンがつい言いたくなる気持ちも分かるけど」

王子二人が聞き捨てならないことを言ったので、千花の顔がひきつる。

「……お二人も水被りたいですか？」

「！ いやいやいや」

「それは勘弁してほしいね」

王子二人が慌てたように首を横に振って言う。

「ティカ、訓練はこれで終わりにする」

「ええっ、まだ半刻（約一時間）もたつてないよ？」

突然訓練の終了を言い渡された千花は驚いてカイルの顔を見返す。
「こんなにずぶ濡れになったら、また風邪がぶり返すぞ。とつと自分の部屋に戻って風呂に入れ」

そう言くと、有無を言わずカイルは移動魔法で千花を部屋へと送った。

部屋に控えていたディアナが、突然現れたずぶ濡れの千花に驚いて、慌てて湯殿に連れていく。

——あれはわたしのことを心配してくれたんだよね。

温かい湯に浸かりながら、千花は自分の体のことを気遣うようなことを言った先程のカイルを思い起こす。

ひょっとして、わたしが思うほどカイルは鬼畜でもないのかもしれない。

れない。

そこまで思つて、千花は慌てて首を横に振る。

いやいや、わたしはカイルのせいで家に帰れなくなつたんだよ？
これが鬼畜でなくてなんだっていうの！？

千花はそう思い直すと、ぶくぶくと風呂の湯に頭まで浸かった。

「テイ、ティカ様！？」

ディアナが千花の突然の奇行に驚いて叫び声を上げたが、千花は息が続かなくなるまで風呂に沈み続けていた。

16 進展を望まれても困ります

翌朝。千花はカイルの屋敷に行く支度をして、カイルやレイナルドと共に移動するその時を待っていた。ちなみにエドアルドもその見送りに来ていた。

ちなみに今日の千花は最初に城に来たときの服を着ている。もちろん化粧もなしだ。

「城下も久しぶりか、楽しみだなあ」

そう言うレイナルドはお忍びも慣れたものらしく、庶民のような服装をしている。ただ、その服の仕立てや材質はかなり上質のものと分かるものだったけれど。

「ティカが大事そうに持つてるのは家族に送る書簡？」

レイナルドが尋ねてきたので、千花は頷いた。

千花は昨日の夜のうちに、自宅へ送る手紙をああでもないこうでもないと思いつつ書いていた。父親、母親、弟、それぞれに書くかと迷ったが、ややこしくなりそうなのでやめておいた。

なんとか便せんに書き上げたものを封書に納めて、蠟で封をしてそれは完成した。

「はい、そうです。これで、なんとか家族にわたしの無事を知らせることができてほっとしてますよ」

千花は手紙を胸に抱えてにこにこしながら言った。

「……なんだったら、今届けるがいいか」

「あ、うん！ お願い」

思ったよりも早くそれが実現しそうだったので、カイルの意見に千花は一も二もなく賛成した。

カイルが呪文を唱え始めると、やがて目の前の空間に千花が召喚された地点が見えてきた。遠くにコンビニの看板が見える。

「へえ、これがティカの世界か。家屋がひしめいてるね」

「まあ、住宅街ですから。他の地区もだいたいこんなものだと思いますよ」

そう言いながら、千花は数日離れていただけなのに、懐かしさから思わず涙ぐんでしまった。

「ティカ……」

王子二人が気遣わしそうに千花を見やる。

千花は無理矢理目を擦ると、カイルに言った。

「ね、わたしの家までたどり着けるんでしょ？」

「ああ、おまえが案内してくればな」

「分かった。もうちょっとまっすぐ行って二つ目の曲がり角を左に曲がって」

「ああ」

カイルが頷くと、目の前の映像も変化していく。

「そこを更にまっすぐ……あ、止まって。そこが私の家だから。…

…手紙、どこに置こうかな。やっぱり無難にポストかなあ」

「……ポスト？」

「届いた手紙を投函するところ。うん、やっぱりポストにするかな。家の中に置くと怪しすぎるし」

千花は頷くと、門の表札の下にあるポストに手紙を投函するようにカイルに頼んだ。

すると、千花の手紙はふわりと浮きあがって、ポストの投函口に吸い込まれていった。

「……」

千花はその様子をしばらくじっと見つめていたが、やがて視線をカイルに向けて「ありがとう」と言った。

「……王命だからな。おまえが礼を言うことでもない」

「できたら、これから時々手紙届けてくれるかな？」

千花が真摯な瞳でカイルを見つめて言うと、カイルは頷いて承諾した。

「……地点も分かったことだし、問題はない。俺の元に書簡を持っ

てくれれば届けてやる」

「うん、ありがとう……」

元はといえば、カイルのせいで家に戻れなくなったのだから、礼など言う必要は全くないのだが、千花は自分の無事を伝えることができただけでも嬉しかった。

浮かんでくる涙を拭いながら、千花はカイルに頭を下げる。

「やめろ、おまえは頭など下げな」

カイルが心底嫌そうに言ったので、千花はちよつとむつとしつつも頭を上げる。

「なによ、人がせつかく……」

「俺はおまえに罵倒されこそすれ、礼など言われる筋合いはない。だから、それはやめろ」

「う、うん……」

ひよつとして、「大嫌い」とか「恨んでる」とか「憎む」って言ったの、カイルは相当気にしてるのかもしれない。

確かにカイルに対して黒い感情はあるけれど、ここはお礼を言うのが筋だと千花は感じたのだ。だからもう一度言った。

「うん、でもありがと。時々手紙送れるなら、とりあえず死んだことにはされなそうだし。うちの家族もこれで少しは安心すると思う。あ、でも、手紙送れるならなんで帰ってこないんだって怒るかなあ」
これは帰ったら、相当怒られるだろう。もしかしたら父親あたりに殴られるかもしれない。

千花はその時のことを思っただけ溜息をつく、「ありがと、もういいよ」と言っただけ、カイルに召喚魔法をやめてもらった。

「それじゃ、エドアルド殿下、カイルの屋敷に行ってきます」
ぺこりと千花が挨拶すると、エドアルドは微笑んだ。

「ああ、行っておいで。わたしがいけないのが残念だよ」

「アルド兄さんの分まで僕が楽しんでくるから大丈夫だよ」

「なにが大丈夫なのかよく分からないが、レイド、ティカの護衛は頼むぞ」

エドアルドが苦笑しながら、レイナルドの肩を叩く。

「ああ、まかせて」

「王子の護衛などいらん。ティカは俺が守る」

「でも、万が一ってこともあるだろう？　僕は剣に関してはちょっと自信あるし」

誇らしげにそう言うところを見ると、かなりの腕前のようなだ。

「そうなんですか。今度殿下が剣を振るっているところを見たいです。日本では剣を所持していると銃刀法違反になるので、剣自体見たことないですし」

「……銃？」

「ティカの世界の殺傷能力の高い飛び道具だ」

分からない単語に反応したレイナルドに、カイルが説明する。千花の世界に対してある程度の知識はあるらしい。

「それでは移動するぞ」

カイルがそう言って短く呪文を唱えると、久しぶりに彼の屋敷に移動した。

移動先は屋敷の入り口を入ってすぐのところだったが、それを察知したかのように、すぐさま五十代くらいの執事と思われる人物が現れた。

「お帰りなさいませ、カイル様。そちらにおられるのは、もしやレイナルド殿下でございますか」

彼がこう言うところを見ると、この屋敷にレイナルドが訪ねたのは初めてではないらしい。

「ああ。でもお忍びなんだ。あまり大げさにしないでほしい」
レイナルドが肩をすくめると、心得たように彼は頷いた。

「はい、そちらにいらっしゃるのは、カイル様のお弟子のティカ様ですね。初めてお目にかかります。執事を務めていますナサニエルと申します。以後、よろしくお願い申しあげます」

ナサニエルは片手を胸に掲げて礼をした。慌てて千花も頭を下げ

て挨拶する。

「ティカです。お世話になります」

「これは、ご丁寧ありがとうございます」

ナサニエルは人好きのしそうな笑顔を浮かべると、三人を応接室に案内した。

「まあ、ティカ様、お久しぶりでございます！」

お茶を出しに来たメリサが満面の笑顔で言う。

「せっかくいろいろとティカ様にお仕えできるかと思ってましたのに、残念でしたわ。でも、お城に滞在なさるんですもの、仕方ないですね」

「すみません」

本当に残念そうなメリサに、仕方のなかったこととはいえ、ちょっと悪かったかなーと思って千花は謝る。

「いいえ、カイル様との進展が遅くなるのが少々残念ですが」

こともなげにメリサが言ったので、千花は思わず飲みかけのミルクティーを噴き出しそうになってしまった。

「それはないですから」

「そうそう、それはないから」

千花が慌てて言った言葉に、うんうんと頷いてレイナルドが同意する。

カイルの恋人云々については、最初に断ったはずだが、まだ諦めてなかったのか。

もしかしたら、千花がここに連れられてきた経緯をメリサは知らないのかもしれない。

知れば、千花がカイルを好きになることはあり得ないと分かるだろう。

「……そろそろ街に出なくていいのか」

「あ、うん。そうだね」

カイルの言葉に千花は通された応接セットから立ち上がった。

チリンチリン。

千花は自転車のベルを鳴らす。

あれから屋敷の使用人に納屋に置いてあった自転車を取ってきてもらって、千花はさっそくサドルにまたがった。

この自転車が召喚時一緒に来てくれてよかった。元の世界のものに触れていられるだけで、少しは寂しさも紛れるかもしれない。

『みんなへ

お父さん、お母さん、啓太、突然いなくなってごめんなさい。

わたしは今とても遠いところにいます。

たぶんすぐには帰って来られません。もしかしたら戻るのは数年後になるかもしれません。

けれど、わたしは絶対に帰ってきます。

心配をかけていると思うけど、わたしは元気にやっているのどうか安心してください。

それでは、体に気をつけて、元気でやってくださいね。また手紙書きます。

千花』

異世界に召喚されて六日目。

城と屋敷の二重生活はまだ慣れないけれど、そのうちなんとかなるだろう。

そしていつか強大な魔術師になって、異世界召喚魔法を操り、元の世界に帰るんだ。

千花は高い空よりも更に遠くを見つめると、ふっと微笑んで、そ

れから自転車のペダルを踏み込んだ。

17 チャリに相乗り、ちょっとホラー

千花は久しぶりの感覚に感動して、悠々と自転車を走らせていたが、しばらくしてはた、と徒歩のはずのレイナルドの存在に気が付いた。

「結構早いんだなあ、それ。追いつくのが大変だよ」

今まで走っていたらしく、息を弾ませてレイナルドが千花に向かって言った。対する千花は自転車から降りると彼に頭を下げた。

「ゆつくりと走ったつもりなんですけど……、すみません、気が回らなくて」

「いや、ティカは充分気を使ってくれたじゃないか。ちゃんと立ち止まってくれたし」

それでも、走らざるを得ないレイナルドが大変だったことは事実だ。

千花がレイナルドを後ろに乗せて走ればいいのか、友達を乗せたときでもふらついて危なかったことを考えれば、絶対にそれはやめておいた方が無難だろう。

千花がそう言ったら、レイナルドは心外そうに眉を上げた。

「ティカの後ろに乗せてもらうなんて、僕の矜持にかかわるよ。だったら、僕がそれに乗って、ティカを後ろに乗せるよ」

「えええっ！」

レイナルドの思ってもいない言葉に千花は驚いて、思わず持っていた自転車のハンドルを離して大声を上げてしまった。

「……あ、すみません、殿下」

「いや、別に気にしてないよ。ティカが驚くのもっともだし」

レイナルドが自転車のハンドルを支えながら苦笑する。対する千花は両手で口を押さえておたおたするばかりだ。

「それと、街に出る時くらい殿下はやめてほしいな。僕のことはレイドって呼んでほしい」

「……レ、レイド様……？」

「様はいらない。ただのレイドでいい。城でもそう呼んでほしいけど」

「お城でそう呼ぶわけにはいきませんよ。じゃあ、お城ではレイド様でいいですか？ 街では呼び捨てにしちゃいますけど」

「うん、そうして。それと、街にいるときは丁寧な言葉は禁止ね。お忍びなんだから」

「……分かりました」

結構押しの強いレイナルドに、千花は溜息をついて頷いた。

「ティカ、ほら敬語になってるよ」

「あ、うん。ごめんなさい」

「それじゃ、ちよつとこれに乗れるか試してみるよ」

異世界の人間のレイナルドが自転車にそう簡単に乗れるかどうか千花は心配だったが、彼は運動神経がよさそうだから案外すぐに乗れるかもしれない。

「あ……、レイドが乗るなら、サドルの位置上げた方がいいかも。そのままだとわたしに合わせてあるから乗りづらいと思うし」

脚の長いレイナルドでは膝を曲げる形になってしまつてさぞ乗りづらいことになってしまつたろう。

「へえ、それどうやるの？」

レイナルドに聞かれて、千花はサドルの位置の調節の仕方を教えた。……すると脚の長いレイナルドではかなり高い位置にサドルが来ることになってしまった。まあ、乗れなくはないだろう。

「まあ、一応乗ってみるよ。ティカが乗ってるの見て、だいたい乗り方は分かったから」

あんな短い時間で乗り方を理解したと言われた千花は驚いて、レイナルドの顔を見た。多少調子のよいところはあるが、彼は結構出来る人物なのかもしれない。

彼の言葉通り、最初はバランスを取るのが難しかったらしくよたよたしていたが、やがて何の問題もなく乗りこなしてしまつたので、

千花はレイナルドの順応力に呆然としてしまった。

「すごい……。初めてでここまで乗りこなすなんて」

「ありがとう。でも、僕は運動能力には自信あるんだ。さ、後ろに乗ってみてよ」

「うん」

レイナルドに促されて、千花は後ろの荷台に横乗りした。

「ティカ、それじゃ危ないよ。しっかり掴まって」

「う、うん」

千花はしばらくためらっていたが、やがて意を決して、レイナルドの腰に腕を回した。

「ティカ、第三王子にくつつくな」

今まで傍観していたカイルが不機嫌も露わに、眉を顰めた。

「だって、こうしないと危ないんだから、しょうがないだろう？」

「……ああ、でも至福かも」

「は？」

図らずもレイナルドの背中に抱きつく形になった千花は首を傾げる。

「いや、こつちのこと。……それじゃ、ちょっと二人で乗れるか練習してみようか」

「はい、……じゃなかった、うん」

二人を乗せた自転車は、しばらく危なげによろしていたが、やがてコツを掴んだレイナルドはそのうち千花を乗せてすいすいと自転車を走らせた。

「レイド、すごい、すごい！」

千花はやや興奮して、目の前の彼を褒めちぎった。

「ありがとう。君に褒めてもらえるなんて嬉しいよ。それにしてもこれ結構楽しいね。慣れれば移動も楽だし」

「そうでしょう？ 召喚された時に自転車乗っててよかったあ」

自転車のことを褒められて、千花はうきうきして頷いた。もちろん、前を向いているレイナルドには見えないが。

「……ティカが移動魔法を覚えれば、それに乗る必要はないがな」
そう言いながら、地面を滑って移動しているカイルはかなり異様だ。

「ええー、このちょっとした不便さがいいんじゃない。いい運動にもなるし」

元の世界にも車などのいろいろな移動手段があつて、そちらの方が断然手軽なのは分かっているが、千花はこの自転車が気に入っていた。

「それに、訓練始めたばかりなんだし、移動魔法なんていつ教えてもらえるか分からないじゃない」

「……まあ、確かに予定では相当先だが。それでも俺が移動させることも出来るのに、なんでこんな面倒なことをしてるんだ」

「決まってるじゃない。わたしがそうしたいからだよ」

千花が断言すると、カイルは黙り込んだ。

やがてカイルは溜息をつく。「仕方ない」とつぶやいた。

ルディアの街を男女二人を乗せた自転車が走り、それに合わせて魔術師の男が地面を移動する。

その異様な光景に、人々の視線が集中した。

……かなり、いや相当目立っている。

千花が恥ずかしさから顔を伏せる。

「レイド、すぐく目立ってるみたいなんだけど」

「そうだね。じゃあ、そろそろ自転車から降りて散策しようか」

「うん」

レイナルドの賛同を得られたので千花はほっとした。

「だいたい、ここまで目立ってしまったのは、カイルのせいでもあるんだぞ。なにも併走することはないだろう」

確かにカイルの行動は、これが魔法だと分かっているわけではなくともホラーだ。

「仕方あるまい。確かに隠れることは出来るが、それだと二人が逢

い引きをしているように見えてしまう」

……逢い引きにしては、自転車相乗りは目立ちすぎると思っただけ。

千花は思わず顔をひきつらせながら、カイルを見つめた。

この男がなにを考えているのか、千花にはまったく理解不可能だ。「別に逢い引きに見えてもいいじゃないか。僕なら大歓迎だ」

「……レイドとはもう相乗りしない」

「なんで！」

千花がぼそつと言った言葉がすっかり聞こえていたらしく、レイナルドが反応する。

「わたしにはそんな意図はまったくないから。これ以上大げさにするなら一人で乗るよ。レイドは、カイルの魔法で移動すればいいし」「こんな楽しいこと、諦めないといけないのか……」

「……第三王子、なにか言ったか」

カイルがなぜか口元をひきつらせて言った。

「カイル、町中で王子はやめろ。……そうだな、ティカ、それじゃたまにならいいだろう？ ティカを自転車に乗せて走るのはとても楽しかったし」

「……まあ、たまになら」

そこまで言うなら無理にその楽しみを奪うこともないだろう。千花は渋々頷いた。

「ティカ、レイドに流されてるぞ」

「ええ？」

どうやら、カイルもレイナルドのことをここではレイドと呼ぶことにしたらしい。

だが、意味不明なことを言われて、千花は首を傾げた。

自転車のスタンドを立てて、近くの店の傍に止めたレイナルドは、千花の手を取った。

「ありがとう、ティカ。これからも一緒に自転車に乗ろうね」

「う、うん……」

につこりと心底嬉しそうな笑顔を浮かべられると、千花はもう頷くしかない。無駄に美麗な顔立ちなものだから威力は倍増だ。なるほど、これがカイルが言っていた流されるってことかと、千花はなんとなくだが理解した。

18 買い物は時間がかかる

「あれ、カイルなにやってるの？」

カイルが自転車に向けてなにか呪文を唱えたので、千花は首を傾げた。

「拘束魔法と防御魔法をかけた。珍しいものだからな。盗まれたり、壊されたりしたら困るだろう」

そう言われて千花は少し驚いてカイルをまじまじと見てしまう。

「……なんだ」

カイルが少し居心地が悪そうに聞いてきたので、千花は慌てて首を横に振った。

「うっん、ちよつと意外だなと思って。……でもありがとう」

にこ、と千花が微笑むと、カイルはなぜか少し後ろに退いた。

「べ、別におまえのためを思ってたわけじゃない。第二王子もその構造を調べると言っていたし……」

「うん、分かってるよ。それでもありがとう」

もう一度千花は礼を言くと、カイルに頭を下げた。

「……」

黙り込んだカイルを千花は少し不思議に思ったが、今は街を見て回ることに集中することにした。見ると、近くにはアクセサリーの店がある。

「あ！ あれ、かわいい！」

千花が入ったところはどうかやら天然石を扱っている店らしく、いかにも女の子が好きそうな色合いのかわいらしいアクセサリーが綺麗にディスプレイされていた。

「女の子だなあ」

千花が目を輝かせてアクセサリーを見ているのを目にして、レイナルドが微笑ましそうに笑った。

店内は女性客がほとんどで、並外れた美貌の男性二人を引き連れ

た千花はかなり注目を浴びていたのだが、本人は物色するのに夢中で気がつかない。

「どっちにしよう、迷っちゃう……」

千花は店内をくまなく見てまわって、天然石二つと水晶を丸く磨いたものを連ねた同じデザインの腕輪を先程から二つ見比べていた。要するに色違いで悩んでいるのだ。

「いつまで悩んでいるんだ。小遣いなら充分渡してあるだろう。迷うくらいなら両方買え」

「でもあまり無駄遣いしたくないし。うーん。……よし決めた、こっちにする！」

淡い青色系統のものと、淡い黄緑色系統の腕輪をさんざん見比べた結果、千花は黄緑色を選んだ。決めれば行動は早いもので、千花はさつさとアクセサリーを手にして支払いに向かった。

「ご購入ありがとうございます。お嬢さん、あまり見ない顔立ちですが、もしかして異国の方ですか？」

二十代半ば程と思われる感じの良い男性店員にそう聞かれて、千花は素直にはい、と答えた。

「ルディアに来たのは初めてなんです。それにしてもこのお店素敵ですね！ 値段も手頃だし、とてもかわいいし、すごく気に入りました！」

かわいいアクセサリーを手に入れたことで、上機嫌で千花が言うと、目の前の青年はにっこりと笑った。

「それは店主冥利につきますね。とても嬉しいです。ありがとうございます」

若いので店員と判断したが、どうやら店主だったらしい。

支払いを終えて包装をするという段になって青年が千花に聞いてきた。

「腕輪、今つけて行かれますか？」

「はい」

「では手をお出してください」

青年に言われた通りに千花は腕を差し出すと青年が触れた指先からバチンツと静電気にも似た衝撃が来た。

「きゃっ!？」

千花がびっくりして叫び声をあげたので、付き添いのカイルとレイナルドはすぐに彼女の傍に寄って来た。

「ティカ？」

「どうした」

「いえ……、今、摩擦による軽い電撃がはじけまして。お嬢さん、驚かせてしまつてすみません。痛くなかつたですか？」

購入した腕輪を巻き付けられながら聞かれて、千花は頷いた。

「あ……、大丈夫です。わたしこそすみません」

大げさに叫び声をあげてしまったことに少々恥ずかしさを覚えながら千花も謝った。

「いえいえ。あ、これはお嬢さんがルディアに來られた記念の品です。よかつたらもらつてやつてください」

そう言つて青年が出してきたそれは、大きさはそれほどではないが、中に金の線がいくつも入つた水晶を鎖で通したペンダントだった。

「この世界ではどうか分からないが、金の線が入つた水晶つて結構いいものなんじゃないだろうか、と千花はそれを受け取るのをためらつてしまつた。

「今のお詫びもありますし、どうか受け取ってください」

「いいんですか？ 何か悪いみたいですけど……、でも本当にありがとうございます」

あまりにも青年が熱心に言うので、千花はついに根負けした。

「良かった。では、これも付けていってくださいと嬉しいですね」

「あ、はい。お願いします」

千花の言葉に、店主の青年はほつとしたように微笑むと、千花に後ろに向かせて首の後ろで金具を止めた。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ、いいんですよ。もしかなくてもあなたはカイルの弟子でしょう？　その就任祝いの品と思ってくだされれば結構です」

「え」

思っていなかった店主の言葉に、千花はカイルと目の前の青年を見比べた。

「知り合いだったんですか？」

「まあな、魔術師仲間だ」

魔術師だったのか。言われてみなければ分からなかった。

千花は俺様なカイルにも一応仲間と呼ぶ人がいることにちょっと驚いた。

「はい、わたしはアルフレッドと言います。以後お見知り置きを。」

カイルはとても良いお弟子を見つけられたようですね。とてもうらやましいですよ」

「いや、いい弟子かどうかは分かりませんが……」

日本人の習性で、千花はつい謙遜してしまう。

けれど、この世界に連れてこられた過程からかなり反抗的な態度も取ってきたので、その点に関して言えば、けっして良い弟子とは言えないだろう。

「いえ、良いお弟子ですよ。魔力もかなり高いようですし」

アルフレッドと名乗った青年にそう言われて、千花は瞳を見開く。「なんで分かるんですか？」

「今、あなたはとっさに張ったわたしの魔防壁を無意識に破壊しましたよ。……いや、末恐ろしい才能ですね」

てつきり静電気と思っていたが、今のは魔防壁といわれるものを破壊した衝撃だったのか。

それで、こんなちよつと高そうなプレゼントをもらってしまつては申し訳ない。千花はアルフレッドを不安そうに見上げてそう言うのと、彼は少し困ったように笑った。

「いや、言つたでしょう。カイルの弟子就任祝いだと。どうか遠慮なく受け取ってください」

「ティカ、アルフレッドがこう言ってるんだ。気にせず受け取れ」
カイルまでそう言ってきたので、千花はありがたく受け取ることにした。

「それなら、ありがたくいただきます。アルフレッドさん、これからもたびたびここに寄らせてもらいますね」

千花はアルフレッドに頭を下げると、彼はにこにこしながら頭を下げ返した。

「はい、ありがとうございます、ティカさん。常連の方が増えて嬉しいですよ。……あと、ここにはアクセサリーの他にも魔法道具もあるんです。興味があつたら見ていってくださいね」

「はい」

にこにこ人好きのする笑顔で言われて、千花もつられてにっこりする。

「……ティカ、それは別の機会にしろ。他も見らんだろう？」

「あ……」

カイルの言葉でまだここが一件目の店だということに気がついて、千花は慌てた。それに、かなり時間もたっているようだ。

「すみません、アルフレッドさん。それはまた来たときにします。ペンダント、本当にありがとうございます」

千花がぺこりと頭を下げると、アルフレッドはにっこりと笑った。「いいえ、次にはぜひ見ていってくださいね。わたしも楽しみにしていますよ」

「それにしても随分と時間を取ったな。もう昼だ」

「……う、ごめんね。付き合わせちゃって」

幾分辟易とした様子のカイルに、千花は小さくなる。

実際、無駄に時間を取らしてしまったのは事実だ。

「……別にいい。一件目で早速やつに会うとは思わなかったが」

やつとは先程のアルフレッドのことだろうか。

「感じのいい人だったね」

「……まあ、それは認めるが」

カイルのそれが渋々、といった感じだったので千花は思わず笑ってしまふ。

少しだけしかカイルのことは知らないが、とてもすごい魔術師らしいのに、こと人間関係となるととても不器用だ。

千花が弟子になることに際して言った「生活の保障はない」という脅し文句も、ひょっとして本当はそこまでするつもりもなかったのかもしれない、とそこまで思って、千花ははた、と我に返って頭を横に振った。

いやいや、ほだされてはいけない。こいつは鬼畜魔術師。鬼畜魔術師。

心の中でそう何度も唱えてぶんぶんと頭を振る千花をカイルが哀れなものを見る目で見た。

「おまえ……、頭は大丈夫か？」

その一言で、やはり認識を改めるのはやめようと、千花は新たに決意するのだった。

19 何様だよ！ あ、俺様が

「あれ、そういえばレイドは？」

ついさつきまでアクセサリーのことで頭がいっぱいだった千花は、やつと一人足りないことに気がついた。

「ああ、レイドなら今ここに向かってるから大丈夫だ」

「あ、そうなの？」

なぜかカイルには他人の動向が分かるらしい。だが、それがどういうことなのかは千花は深く考えなかった。

自転車がここにある以上、彼はここに戻って来ると分かっていたからだ。

「ティカ」

カイルが言った通り、レイナルドが程なくして現れた。

「あ、レイド、ごめんね。わたし選ぶのに手間取っちゃって退屈だったよね？」

「いや、そんなことないよ。楽しそうな君を見て僕も楽しかったし」

「え、そ、そう？」

「うん」

そこまではつきり言われると、ちょっと照れる。千花は熱くなる頬を隠すように押さえた。

レイドはそんな千花に少し笑うと、彼女の前に小さな袋を出してきた。

「ティカ、これあげる」

「え、なに？」

レイナルドから袋を受け取って、ティカはなにげなくそれを開けた。

「これ……」

袋に入っていたのは淡い青の腕輪。先程千花が買おうか悩んでいた片方だった。

「えええ、そんな悪いよレイド」

本当はこの腕輪の存在も心の奥底で気にはなっていたので、レイナルドの気持ちはとても嬉しかったのだが。

「もう買っちゃったし、そんなに高いものでもないから、遠慮しないで受け取ってよ」

言い方は柔らかかったが、レイナルドは結構強引だ。だが、明らかに女性用のものをレイナルドが持っていては仕方がないだろう。

「う、うん、レイドありがと。気を遣わせちゃったみたいでごめんね？」

「僕がしたくてやってることなんだから、君は気にしないでいいんだよ。……ああ、今付けちゃおうか。その腕輪と一緒に付けてもいい感じだよ」

千花はレイナルドに腕輪の付けてある左手を取られると、彼が購入した腕輪を巻いてもらった。

「あ、本当。素敵だね」

千花が腕を掲げてうっとり魅入ると、レイナルドは満足そうに頷いた。

「だろう？ テイカによく似合ってるよ。とてもかわいい」

「あ、ありがと」

彼のストレートな褒め言葉は典型的日本人の千花には未だ慣れなくて、彼女は頬を染めた。……日本では女の子同士で持ち物を褒めあうことはままあったが、男性にこれをやられるのはまた別である。「レイド、本当にありがとね。大切にする」

「うん、君がそう言ってくれると嬉しいな。よけいなお世話かなと思っただけど、思い切って贈ってよかった」

千花が少し恥ずかしそうに微笑んでお礼を言うと、レイナルドが満足そうにつこりと笑った。

そんな和やかな二人の雰囲気壊すようにカイルが口を挟んだ。

「……おい、もうすぐ昼だが、どうするんだ」

不機嫌を隠そうともせずにカイルが聞いてきたので、千花はちょ

つとむつとしてしまった。

「……なんでそんなに機嫌悪いの？ 護衛してもらっておいでなんだけど、カイル態度悪いよ」

千花がそう言うと、カイルは瞳を見開いて少しばかりうるたえた。
「……それは、おまえがレイドの贈り物にそんなに嬉しそうにするから……」

「……ええ？」

千花は信じられないことを聞いた気がして、思わず聞き返した。
最近耳の調子がおかしいのだろうか？ それとも言語疎通の指輪の調子がおかしいとか？

「い、いや、なんでもない。それより、おまえはこれから物を貰うときは師匠である俺を通せ」

その俺様全開のカイルの言葉に、千花は思わず飛び上がりそうになる。

第一、普段は住んでいる場所が違うのだ。カイルの言うことは、実際不可能に近かった。

「えええ、カイルなに言ってるの？ そんなの無理に決まってるじゃない。……ああ、師匠の自分を差し置いて贈り物を貰ったから拗ねてるわけ？」

「……なぜそうなるんだ。男に装飾品を貰っても嬉しくない」
心外なことを言われたとばかりに、むつと眉を寄せてカイルが反論する。

それも違うとなれば、カイルの言い分はよけいに謎だ。

「……じゃあ、なんなの？」

千花が首を捻りながらカイルに尋ねた途端にカイルは黙り込んだ。
本当にいったいななんだ、と千花はちよつと不機嫌になる。
思い返してみれば、過去に王子達へ弟子のティカにああ言うな、こつするなという言っていたような気がする。

これはどう考えても度が過ぎているだろう。

「いくら師匠だからって、わたしそこまで束縛されたくない。第一、

カイルにそこまで言う権限はないでしょ。これが恋人とかなら分かるけど」

千花が恋人と言ったところで、カイルが幾分うるたえた。

「お、俺は束縛なんてしていないぞ」

「贈り物貰うのに、いちいちカイル通すのが束縛でなくてなんなの？　これが全然知らない人からとか、危険物とかならまだ分かるよ？　でも、レイドからのごく普通の贈り物じゃない」

千花がいくらかうんざりしながら言うと、レイナルドもうんうんと頷いた。

「それはそうだよなあ。ティカの言うことはもつともだよ。いくら魔術の師匠でもこんな普通の贈り物にあれこれ口を出す権限はないな。……カイル、あまり言い過ぎるとうるさがられるだけだよ」

そこでカイルは少々むっとしたようにレイナルドを見たが、やがて不承不承ながらも「分かった」と頷いた。

「……まあ、わたしもちよつと言い過ぎたよ、ごめんね。それよりお昼にしようか。わたしおなかすいちゃった」

少し場の空気が悪くなってしまったので、千花は反省しつつ、二人に明るく提案してみた。

「ああ、それなら中央広場に屋台がいろいろ出てるよ。そこで昼食にしよう」

それに反論などあろうはずもなく、千花は一も二もなく頷いた。

それから千花達は徒歩で中央広場まで行った。

週末なのもあるせいか、屋台がかなり出ていて賑やかだ。

「わあ、おいしそう」

あちこちから食欲をそそるいい匂いがしていて、千花から自然に笑みがこぼれる。

「僕のおすすめはこのハニャーニャかな」

ここの屋台に詳しいらしいレイナルドがそう言ったので、千花は素直にそれに決めた。

ハニヤーニヤは小麦粉を練ったものを丸く伸ばして焼いたものに、焼いた肉や野菜などを挟んだ軽食だ。千花はそれとお茶を買って昼食にすることにした。

「そんなので足りるの？ テイカは本当に小食だなあ」

レイナルドはそう言って、ハニヤーニヤの他に肉の串焼きと、薄くスライスして味付けしたジャガイモの上にチーズをのせて焼き上げたものを広場に据え付けてあるテーブルの上に置いた。

カイルはハニヤーニヤに、肉と野菜の煮込みを購入したようだ。

そのカイルも、千花の食事内容を見て少し眉をひそめた。

「ひよっとして、食事制限でもしてるのか？」

どうやら食事が少ないため、ダイエットをしていると思われたらしい。

「ううん、お昼はだいたいこんなものだよ。朝しっかり食べたし、これで充分だと思うけど」

千花が慌てて言ったが、二人は他にもいろいろ買ってきて食べる食べると勧めてきた。

「そんなに食べられないよ……。それに、こんなに食べたら太っちゃう」

「おまえは充分細いだろう。……出るところは出ているが」

「うん、テイカはもうちょっと太った方がいいかもね。その方が抱き心地よさそうだし」

「二人とも……、それセクハラだからね？」

二人のよけいな発言に千花が口元をひきつらせながら言うと、聞き慣れない言葉にレイナルドが首を傾げた。

「そういえば前も言ってたけど、セクハラってどういう意味？」

……だから、それを聞くのもセクハラだというのに。お願いだから、前後の言葉で察してほしい。

千花は頭が痛くなった気がしてこめかみを押さえた。

「……つまり、性的いやがらせという意味だな」

レイナルドよりはあちら側の言葉を理解できるカイルが解説した。
「え、別にそんな意図で言ったわけじゃないよ？」

ようやく千花の言いたいことを理解したらしいレイナルドが焦ったように千花に弁解する。

「言った方がそういつつもりじゃなくても、言われた方がそう受け取ればそうなの！」

むうつと千花が少し睨むと、レイナルドはしまったというように片手で口元を覆った。

「ごめん、気をつける」

「うん、そうして。……カイルもね」

「……ああ」

本当に分かったのかどうなのか、カイルはやる気のない返事をした。

「だが、やはりおまえは少し太った方がいいぞ。体力もそんなになさそうだしな」

「そうだね、慣れない環境でまた風邪でもひかれたら困るし、少しは体力を付けないと」

「う、うん……」

それを言われると、ついこの間寝込んだ身としてはちょっと苦しい。

二人の言い分に千花は渋々頷いた。

そして、結局は二人に言い負かされて、千花は昼食を無理矢理食べさせられる羽目になったのである。

20 なぜか舞姫に気に入られ

「もう無理……、動けない……」

カイルとレイナルドの二人から無理矢理昼食を食べさせられた千花は、テーブルの上でへたばっていた。

「あれだけの量でそれなのか。情けないぞ」

カイルが無情にも千花に言う。ちなみに千花はほとんど食べきれずに残してしまう羽目になり、それを男性二人でしっかりと片づけていた。

「あのねー、今までの食事が少なかったんだからしょうがないでしょ。それをいきなりあんな量無理だって……」

千花は頭を上げてカイルに抗議する。

「まあ、確かに僕達もやりすぎたかなあ、ごめんね。……ティカ、大丈夫？」

「う、あんまり……」

ちよつと汚い話で悪いけど、油断すると胃の中のものが逆流しそう。

千花は再びテーブルに突っ伏すと、男性二人は溜息をついた。するとカイルが手のひらに小さな包みを召喚してきて、千花に渡した。

「胃薬だ。速攻性だからすぐ良くなると思う」

千花は珍しいことがあるものだと思いながら、ありがたく胃薬を受け取って買ってきてあったお茶で流し込んだ。

本当は水の方がいいのだが、この際贅沢は言っていられない。

「……わたしはしばらくここににいるから、二人は他見てきてよ」

ここに引き留めるのも悪いのでそう言ったら、あっさり二人に却下された。

「なにを言っている。俺はおまえの護衛としてここにいるんだぞ」

「僕もそうだよ。……ちよつと今舞が始まるみたいだからここで観

ていこうよ」

「うん……、あ、本当に良くなってきたみたい。カイル、ありがと」
「ああ」

千花がカイルに礼を言っただけで、大広場の真ん中で魅惑的な舞姫が可憐な様子で立っているところが見えた。その脇にはリユートを抱えた男性。どうやら彼は彼女の相棒らしい。

やがてリユートがせつなくきならされると、舞姫は大きく波打っている金色がかった長い茶髪を体の周りにまとわせながら、可憐に踊り始めた。

『これは、とある場所で起こった物語』

やがて男性がリユートを弾きながら歌を歌い始めると、そのあまりの美声に皆釘付けになる。

『——愛している。だがおまえは敵の娘。この想いを告げるわけにはいかない。それでは、そのために死んでいった者に申し訳がたないから』

その男性の美声にも負けず、美貌の舞姫がとんと跳躍を一つして、くるりと回ると金がかかった茶髪が陽にきらきらと輝き、その全身を照らし出した。

『だが、おまえを見る度に溢れる恋情、そしておまえの周囲への嫉妬。愛する心とは裏腹につらく当たってしまったても、おまえはただ哀しそうな顔をするだけ。その度にわたしが引き裂かれそうな思いをしていることをおまえは知らないだろう』

舞姫は控えめに男に近寄る。決してその目には留まらないように。男もまた、舞姫の方を見ない。

『いつそ、おまえをわたしから引き離したらこの感情からも解放されるだろうか』

哀しげな瞳で静かに舞姫は踊る。その姿は可憐だったが、まるでなにかを諦めたようだった。やがて舞姫は歌い手の男から遠く離れ、ゆったりと可憐に舞った。

『遠い地でおまえが他の男とうまくやっていることなど知らなければ

ばよかった。それを聞いて、なにかが崩れさった。他の男におまえを取られるくらいならいつそ、あの男からおまえを奪い……」

せつなげで穏やかだった音楽が一気に激しくなり、破壊を知らせるような音が辺りに鳴り響く。舞姫の表情が一瞬怯えたような表情になると、その身を地に伏せた。これは嘆きと哀しみを表現しているのだと千花は悟った。

『結局わたしはこの恋の前には無力だった。わたしを愛さなくてもいい。おまえは憎め。それだけがおまえにとつてのわたしの存在価値だから』

一瞬だけ、舞姫の手が男の手に触れそうになる。けれど、それはすぐに戻されて、胸元を押さえる。まるで、憎しみと恋情との間で苦しんでいるかのように。

『これでおまえは永遠にわたしもの』

その一節で舞姫はその場にくずおれる。

そしてその余韻を残すように演奏は終わった。

やがて舞姫と歌い手は立ち上がり、講演終了を告げる挨拶をする。その途端、割れるような拍手が鳴り響き、お金や花などがたくさん投げられた。

千花ももちろんその演奏と舞のすばらしさに一生懸命拍手した。

「トウルティエールの恋物語か。これは百年ほど前に実際にあった話で、かなり人気のある演目だよ」

「へえー、本当にあつたことなんだ」

レイナルドの説明に千花は素直に感心して頷いていた。

このころにはだいぶ胃の調子も良くなっていて、千花はカイルの出てきた胃薬の効き目に内心驚いていた。

「それにしても、とても素敵だった！」

千花も二人の迫真の歌と舞に感動してなにか彼らに渡したいと思つて辺りを見回すと、丁度よく花屋の出店を見つけた。

千花はピンクを基調としたかわいらしい花束を購入すると、こういうことをするのは初めてだが、舞姫に思い切って花束を手渡した。「とても素晴らしかったです!」

「まあ、ありがとうございます。……あなたは異国の方?」

美貌の舞姫が千花を興味津々という感じで見てくる。

「は、はい」

遠くから見たときは可憐な美人だったが、近くで見ると迫力美人だ。あの可憐さは演技で出していたのかもしれない。それにしても、この人もどこか異国の人だろうか。象牙色の肌と髪と同じ金茶の瞳がどこことなく異国的な印象を与えている。

「ラヴィニア、おまえ、また悪い癖が……」

花束や、投げ銭を受け取った淡い赤茶色の髪のリュート弾きの男がいくらか辟易したように舞姫に言う。

「シルヴァン、悪い癖とはなによー。可愛い娘だから興味があるだけで、これはちょっとした趣味じゃない」

先程の可憐な演技が嘘のように、ラヴィニアは腰に手を当ててふんぞり返って言う。

「あ、あの……?」

意味が分からず、首を捻るばかりの千花にラヴィニアが言った。

「ねえねえ、あなた、舞姫の格好してみたくない? もちろん記念に映像魔法にも残しておくけど」

「え、えええっ!?!」

「あ、それはいいね。僕はぜひ見たいな。ティカ着てみせてよ」

「……まあ、特に反対することはないな」

驚きのあまり飛び上がる千花とは裏腹に、男共は満更でもなさそうだ。

「そそそ、そんなわたしなんて童顔ですし、そんな格好似合うと思えませんか」

「ティカは化粧映える顔じゃないか。なにを心配する必要があるんだい」

「う……、それは」

化粧自体は確かに問題はない。

しかし、腕や胸元も露わで両脚に深くスリットが入っている衣装が問題なのであつて。

「あ、そうなの？ 化粧映えするなら全然問題ないわね。あなた、ちよつとこちらの天幕にいらっしゃい」

ラヴィニアは両手を叩いて喜ぶと、女性とは思えない強い力で、ぐいぐい千花をひっぱっていく。

ただ素敵な歌と舞のお礼に花束を渡しに行つただけなのになぜこ
うなるんだ。

千花の疑問と不安をよそに、カイルとレイナルドは事の成り行き
を楽しそうに眺めているだけだ。

この薄情者——！

かくして、ラヴィニアの天幕に連れて行かれた千花は、先程の不
安通り、腕や体の線も露わで、両脚に深くスリットの入った白い舞
姫の服を着させられている。そして、足には編みあげサンダル。腕
や首、額には舞姫用の紫水晶の銀のアクセサリーまで付けられてい
る。

メリサあたりが見たら、すぐ着替えてくださいと言いそうな格好
だ。

「ティカちゃん、細いのねー。出るとこは出てるけど……。でもも
うちよつと脚とかに肉ついた方が色気はでるわよ」

「いや、そんなものはいりませんから！ 第一、これ胸元開きすぎ
てません？」

胸の谷間も露わで、他の露出も相まって恥ずかしすぎる。

「このくらい、普通普通。ティカちゃんに胸があつて良かったわー。
下手な人が着るとがばがばになるから」

あはははと楽しそうにラヴィニアは笑うが、千花は胸元がばがば

な舞姫の衣装を着ている自分を想像してしまい、顔をひきつらせた。「さて、後は化粧よねー。ティカちゃん、お肌綺麗だからおしろいはいらんないとして、目に縁取りしてから色入れて、頬紅と口紅もきちんといれなきゃ」

満面の笑みを浮かべてそう言うラヴィニアに、千花はもうどうにでもしてくれという心境だった。

どう考えてもやめてくれと言っても聞いてくれそうな感じではない。

「あらあー、ティカちゃん、本当に化粧映えるのねえ。これは稀少な原石かもしれないわー」

そんなこんなで化粧をされて、千花は鏡の前に立たされていた。城でのお姫様とは違う、少し妖艶なイメージだ。

「んふふー、どう？ 素敵に仕上がったでしょう？」

「は、はい」

確かに童顔の自分とは思えない大人っぽさだ。

千花がちよっと恥ずかしそうに微笑むと、ラヴィニアに「本当、かわいいわあ」と抱き寄せられた。

「あ、でもちよつと待って、その髪はとても綺麗だけど、上げてうなじを出した方がいいかもしれないわねえ」

ラヴィニア鏡の中の千花をまじまじと見つめて言うと、前髪と両サイドの短めの髪は残したまま両横の髪を綺麗に編み込み、ポニーテールにした。

「飾りはどうしようかしら。衣装は白だからどんな色でも合うけど……。でも他の装飾品が銀と紫水晶だから、やっぱりあれかな」

ラヴィニアは一人で納得すると、いくつも輪が重なった銀のリボンをピンで留めた。

千花が身動きすると、リボンの先についた紫水晶のついた銀の飾りがシャラシャラと音を立てる。

「さて、できあがりー！ どう、ティカちゃん、感想は？」

その支度の出来映えに呆然としていた千花は、それではっとなっ

て慌てて言った。

「え、えーと、まるで自分じゃないみたいです。こんなに綺麗にしていただいて、ありがとうございます」

お城でも侍女達は自分をお姫様のようにとても綺麗にしてくれるけど、これはまた違った方向での美しさでとても新鮮だ。

「どついたしまして。ティカちゃんが光る原石だからここまでできたのよ。ティカちゃん、近い将来絶対すごい美人になるわよ」

「そ、そんなこと……」

千花はラヴィニアの褒め言葉に恥ずかしそうに俯いた。

セルマにもそのようなことを言われた気もするが、千花には到底信じられない。

実際は千花は結構な美少女なのだが、本人はいたって普通の女子高生だと思っているため、ラヴィニアのそれはお世辞にしか聞こえない。

……でも、化粧映える顔で良かった。

千花がそのことについてほっと息をついているとラヴィニアが当然のこのように言った。

「じゃあ、みんなにお披露目にいきましようか」

「ええつ、本当に見せるんですか!？」

びつくりして千花がラヴィニアの顔を窺った。

「当たり前じゃない。こんなすばらしい出来映え自慢しなくてどうするの!」

バーン! と勢いよく背中を叩かれて前につんのめりそうになりながら、千花は少しばかりの羞恥と不安に襲われていた。

21 不器用な彼

「ど、どうかな……？」

天幕の外で待っていたカイルとレイナルドの前におずおずと千花が立つと、二人は瞳を見開いた。

「驚いた。すごく綺麗だ。とても似合ってるよ」

身を乗り出すようにして満面の笑顔でレイナルドが千花に言った。そのあまりの熱心さに千花は思わず真っ赤になる。

「あ、ありがとう」

「……まあ、見られないこともないな」

横を向いてカイルが素っ気なく言う。

レイドほど熱心でなくてもいいけど、お世辞でもいいから少しは似合うとか褒めてくれてもいいのに、と浮かれていた気分には水を差されて、千花は少々むっとしてしまう。

「まあ、その彼は素直じゃないのね。ティカちゃんがとても綺麗になって照れてるのかしら？」

ラヴィニアがからかうようにカイルに言つと、むっとしたようにカイルが言い返した。

「照れてなど——」

「あら、じゃあその頬が赤いのはわたしの気のせいかしら？ 天の邪鬼も程々にしないとティカちゃんに嫌われるわよ」

ラヴィニアのその言葉にはつとしたようにカイルが千花を見た。

千花はその視線を避けるようにふいつと横を向く。

「いいんです。彼は元々こういう人ですから」

それにどのみち、カイルのことは大嫌いだから今更嫌うもない、と千花は思ったが、なんとなくおもしろくない。

ラヴィニアはカイルと千花をおもしろそうに眺めていたが、やがて思い出したように、手をぽんと打った。

「そうだ、映像魔法にティカちゃんの姿を収めなくちゃいけないの

よね。……シルヴァン、頼むわよ」

「ああ」

ラヴィニアの相棒は頷くと映像を収める魔法器具を持ち出して構えた。

「ティカちゃん、ちょっとその場でくるっと回ってみて。ほら、こんなふうに」

ラヴィニアが片足をつま先立ちにして、くるりと回転して見本を示す。

「……こうですか？」

千花もその手本通りにその場で回転してみた。その途端、千花の華奢な脚が露わになり、レイナルドとカイルの目を奪う。

「……本当に眼福だなあ」

「……」

言われたまま行動したが、男二人がなぜかちよつとにやけているように見えて、千花は慌てて深く切れ込んだスリット部分を隠した。「ちよつと変なところ見ないでよ。恥ずかしいでしょ」

「あはは、ちよつと色気があつてとても良かったわよ……。……シルヴァン、今のうまく撮れた？」

ラヴィニアが楽しそうに笑うと、今の映像をうまく収められたか相棒に確認を取る。

「ああ、ばつちりだ。ところで枚数は三枚でいいか？」

「ああ、できれば四枚にしてほしいんだけど。……ティカのこの姿を見せないと怒られそうな人がいるんだ」

レイナルドが言っているのは、たぶんエドアルドのことだろう。

「えっ、そんな、わたしの分だけで充分ですよ！」

こんなちよつと恥ずかしい格好、見るのは自分だけでいい。

千花はそう思ったが、周囲の反応は違っていた。

「僕はほしいよ。ティカの舞姫姿なんて、この先見られるかどうか分からないんだから。たぶん、兄さんもそう言うと思うけど」

「……力、カイルはいらないよね？」

わずかの期待をこめて千花はカイルを見る。

「弟子の記念映像だ。……せっかくだから貰っておく」

「さつき、嫌そうに『見られないこともない』って言ってたくせに。嫌々貰わなくていいから！」

予想外のカイルの返答に千花がむっとした。

「別に嫌そうには言っていないぞ。ちゃんと褒めたじゃないか」

「褒めてない！」

あれで褒めているつもりだったのだろうか。おかしすぎるぞ、カイル。

千花がカイルに詰め寄って抗議すると、なぜか彼は視線を逸らした。

「こういうときは嘘でも『似合う』くらい言ってくれてもいいじゃない！ どうせわたしなんて脚に肉は付いてないし、舞姫の衣装を着るような色気はないですよ！」

「なぜそんな話になる。というか、おまえはあまり傍に近寄るな」

詰め寄ったことで、カイルが彼女を見ると、胸の谷間をもろに見下ろすことになってしまいう形になっていたのだが、興奮した千花はもちろん気づかない。

むしろカイルに近寄るなと言われたことで、そのあまりの言われように千花は盛大にキレた。

「分かったわよ、カイルなんて大嫌い！」

肩を怒らせて千花が天幕に戻ろうとすると、事の次第をぽかんとして見ていたラヴィニアが慌てて彼女の腕を掴んだ。

「まあまあ。ティカちゃんは胸もあるし、さつきも充分色気あったわよ？ それよりも、わたしと一緒に映像に収まりましょうよ。というか、それがわたしが一番の目的なんだけどー」

少しおどけるように片目を瞑って言うラヴィニアからこの場をうまく収めようとする気遣いを感じて、千花はいきなり激昂してしまった自分を恥じた。

「すみません、ラヴィニアさん。ありがとうございます」

それにしても、こんなことで怒っちゃうなんて、修行が足りないなあと千花は溜息をついていると、ふと思い出したようにラヴィニアが言った。

「そういえばさっきの彼、ティカちゃんのことを弟子って言うってたけど、あの人どう見ても魔術師よね？　ということはティカちゃん魔術師見習いの？」

「はい、なりたてですけど」

千花はそれに頷くと、彼女に不満を少々ぶちまけた。

「だけど、こう言っちゃなんですけど、肝心の師匠の口が悪すぎて前途多難です。魔術の訓練の時は今のところ問題ないんですけど」

「うーん、少ししか接してないからそれほど分かる訳じゃないけど、たぶん彼はかなり不器用な人なんだと思うわよ？　だからティカちゃんはまだあまり気にしない方がいいと思うわ。でもまあ、恋人にしているし、魔術師の彼よりも地位もありそうだし」

「こ、恋……っ！？」

ラヴィニアが言っているのはおそらくレイナルドのことだろう。

それにしても彼女の観察眼は恐ろしい。二人が結構な地位であることを見抜いてしまうとは。

「あ、あの、ラヴィニアさん、そのことは……」

「うん？　地位が高そうってこと？　周りには言わないわよ。そんなこと言ったら野暮じゃない」

あはは、とラヴィニアが笑ったので千花はほっとする。

「まあ、こんな職についてるとね、王侯貴族にお会いする機会も稀にあるから。人間観察と舞にはわたし自信あるのよ」

そう言っただけを覗くラヴィニアに千花は素直に感嘆する。

「人間観察があ、すごいですね」

それに比べて、余裕がなく激昂までしてしまった千花は少し落ち込む。

そんな千花の様子に気づいたのか、ラヴィニアは慰めるように彼

女の頭を撫でて言った。

「ティカちゃんも、もうちょっとすれば、魔術師の彼の不器用さにも気づくと思うわよ」

「そうだったらいいんですけど……」

千花にはカイルのあの口の悪さは、そのまま性格の悪さから来ているとは思えないのだが。

けれど、ラヴィニアの言うことが本当だったらいいな、と千花は少しだけ思った。

それからいくらか落ち着いた千花はラヴィニアと一緒に何枚も映像に収まっているうちに機嫌も直り、最後には満面の笑顔になっていた。

その映像魔法器具で撮影した数枚の金色の板を持っていた袋に収めて、千花は元の格好に戻ると、ラヴィニアに心をこめてお礼を言った。

「ラヴィニアさん、今日は本当にありがとうございました！ とても楽しかったです！ シルヴァンさんもありがありがとうございました！」

「ああ、どういたしまして」

「わたしこそ、ありがとうティカちゃん。本当に楽しかったわ。よかったら、来週もまた来てくれるかしら？ まだしばらくはわたし達もルディアに留まるつもりでいるし」

ラヴィニアが愛しそうにぎゅっと千花を抱きしめると、千花もその背に腕を回した。

レイナルドとカイルが一瞬うらやましそうな顔になるが、千花の位置からはそれは見えなかった。

「はい、喜んで！ 来週も絶対来ますね」

予想外の人脈を作れた千花は、にこにこしてラヴィニア達に別れを告げた。

「それにしても、結構な時間を取ったな。そろそろ屋敷に戻らないと。レイドももう戻らないといけない頃だろう」

「ああ、そうだね」

カイルの言葉に、レイナルドが頷いた。

あれから化粧を落したり着替えやらしただけもあって、自転車を止めてあったところに戻った時には、既に夕方になっていた。

「つきあつて貰っちゃってごめんね。レイドは他に見て回りたいところあつたんじゃない？ なにか悪いことしちゃったみたい」

千花が申し訳なさそうにレイナルドに頭を下げると、彼はとんでもないというふうに関を横に振った。

「僕は君の護衛だよ？ それに今日は君といられてとても楽しかったし。……約一名邪魔なのがいたけど」

「……なにか言つたか、レイド」

さらつと爆弾発言をしたレイナルドに、カイルが顔をひきつらせる。

「いや、別に。それじゃ戻ろうか。ティカと別々というところが少し寂しいけどね」

「……では送る。ティカ屋敷に戻るぞ」

その言葉で、同時にレイナルドと千花を別々の場所に移動させるつもりなのだと察して、千花は素直に感心した。

性格には難ありだが、やはりカイルは当代一の魔術師なのは間違いないらしい。

22 策士の焦りとツンデレ

「兄さん、ただいま」

レイナルドは帰城すると、まっすぐにエドアルドの部屋に向かった。

エドアルドは居室でゆったりと読書をしていたようだったが、その傍には魔術師団副団長のアレクセイがいた。

「おかえり。楽しかったかい？」

「まあね。でも兄さんはアレクセイからだいたい報告受けているようじゃないか」

レイナルドに指摘されて、ばれていたか、とエドアルドは苦笑する。この第三王子は結構気配には鋭いのだ。

「カイルには隠し通せないとは思っていたが、おまえにも無理だったか」

「アレクセイは監視役だったんだろ。僕達がティカに妙なことをしないか心配だったのは分かるけどさ」

レイナルドが溜息をつく、懐から薄い金の板を出してきた。

「みやげだよ。それにはティカの舞姫姿が映ってる」

「……ティカは今ルディアで公演中の舞姫と仲良くなったらしいな。かなり熱烈に気に入られていたようだが」

これにはエドアルドも予想外の出来事だったらしく、彼には珍しく素直に驚いていた。

「なんでもティカの容姿が舞姫に気に入られたみたいだよ。まあ、ティカは可愛いから無理もないと思うけど」

まるで恋人のことをのろけるようにレイナルドが言ったので、エドアルドはそれに苦笑しつつも、受け取った板をとん、と指先で軽く叩いた。すると、彼のすぐ近くにティカの映像が映し出される。そのティカの姿は初々しくかつ少々妖艶でエドアルドの目を奪った。

「これは……美しいな。ティカにこの格好をさせたその舞姫には感謝と言うところかな。……それにしても、ティカには何度も驚かされるね」

城でも美しく装っているが、それとはまた違った美で、彼女はいずれどんなふうになるのだろうとつくづく思われる。

「……そういえばレイド、ティカと密着したそうだな」

当然看過できないことをエドアルドが聞くと、レイナルドはああと言った。

「自転車に相乗りするとき、ティカが僕に掴まらないと危険だったからね。あれ結構乗るのにこつがあつて、均衡を取るのが少し難しいんだよね。でも慣れれば楽しいよ。ティカと一緒に乗れて至福だったし」

いくらかにやけた顔でそう言ったレイナルドに、エドアルドの顔がひきつった。

「おまえはティカともう相乗りするな」

「いや、でもティカには時々ならいいっていう許可はもう取ってるし」

こういうときはかなりちゃっかりしているレイナルドはしれつと言う。

「おまえは……本当に要領の良いやつだな」

エドアルドは呻くように言うと、レイナルドを見た。

この末の王子はどういうわけだか、人に願い事をきかせるのが得意だ。たぶん人の心に自然体で溶けこむことができるのだろう。

そして、千花がそんな彼に流されて相乗りを容認してしまったのは想像にかたくなかった。

その後も贈り物を贈ってかなり喜ばれていたようであるし、実に抜け目がない。

アレクセイの報告によると、今日一日でレイドと呼ばせるなど、随分と千花と親しくなったようで、彼を彼女と一緒に街にやったのはまずかったかもしれないとエドアルドは思った。

いつそのこと週末に千花をカイルの屋敷にやるのはやめさせた方がいいのかと思うが、そんなことすれば彼女の機嫌を損ねるのは目に見えている。最悪、嫌われかねないだろう。

それに、伏兵としてカイルの存在も気が抜けない。

現在彼は千花に憎むとまで言われているが、週末ごとに護衛されながら彼の屋敷で過ごすのだ。

そうなれば、本来素直で優しい彼女のことで、もしかしたらそれにほだされてしまうかもしれないし、この先どう物事が転がっていくか分からないだろう。

これは気が抜けないな、わたしもなにか策を練らなければ、とエドアルドは強く心に思っているのであった。

——カイルは魔法で屋敷の門前まで移動したらしい。

その前でカイルが「今帰った」と告げると、屋敷の門が開いた。

「お帰りなさいませ、カイル様、ティカ様」

まだ二十歳そこそこの濃い茶色の髪と同色の瞳の男性が出迎えたが、千花には初めて見る人だった。

誰だろうと首を傾げていると、彼は笑顔で挨拶をしてきた。

「初めてお目にかかります。こちらで雑用を仰せつかっています、ジョシユアと申します。ティカ様には以後よろしくお願い申し上げます」

「あ、はい、よろしくお願いします」

ジョシユアが頭を下げてきたので、千花も慌ててそれに倣った。

「ティカ様はわたしに頭を下げられなくてもよろしいですよ」

「そうだ。使用人との区別もある、おまえはやたらと頭を下げるな」「う、うん……」

二人にそう言われたが、頭を下げられれば下げ返してしまうのが日本人の習性だ。しかし、とりあえず千花は頷いておいた。

玄関の扉をジョシユアに開けられて中に入ると、ナサニエルとメリサが既に待ちかまえていた。

「お二人ともお帰りなさいませ」

「ああ」

「ただいま帰りました」

二人に挨拶をすると、おもむろにナサニエルが切り出した。

「そろそろ夕食の時間ですが、ご準備いたしますか？」

「ああ、そうしてくれ。……ティカもそれでいいな？」

「うん」

昼食時はだいぶへばっていたが、カイルに貰った薬のせい、胃の調子は万全だ。

千花が領いたことで、城の食事よりはだいぶ質素になるが、それでも千花から見れば充分豪華な内容のものがすぐに用意された。

それをカイルと向き合って食べることになったのだが、驚いたことに彼は大皿の料理を千花のために皿に取り分けてくれた。

「……なんか意外」

「なにがだ」

千花が予想外のことに瞳を見開いて言うと、カイルが訝しげに見た。

「うん、まさか自分のことをおいといて、わざわざわたしの皿に料理を取ってくれるとは思わなかったから、ちよつと驚いた。……でもありがとう」

そう素直に礼を言った途端、カイルの頬が赤くなったので千花はびっくりした。

「べ、別にこれはおまえのためではない。食事の席では女性に料理を取り分けてやるのが常識だからだ。そのところは勘違いするな」
勘違いってなにをだと思いがら、千花は首を傾げつつ聞いてみる。

「……もしかして、カイルってツンデレ？」

「なっ、俺はデレデレなどしていないぞっ」

果たして意味が通じるか疑問を感じつつの発言だったのだが、召喚者のカイルには千花の言いたいことが分かったらしい。

かっとなくなりながらカイルが反論してきたので、千花は驚きつつも手を振って軽くないした。

「あー、はいはい。デレデレはしてないよね」

「……分かればいい」

デレデレは確かにしてはいないが、カイルがツンデレ属性なのは間違いないようだ。

……しかし、俺様だとばかり思っていたが意外すぎる。二十歳だと聞いたが、それでこの性格はどうなんだと思わないでもないが。

「……」

カイルが赤い顔のまま黙り込んで、食事に専念しようとしている様子がおかしくて千花は笑いをこらえるのに必死だった。

——不器用かあ、確かにそうかも。

千花はラヴィニアに言われたことを思いだし、なんとなく納得した。

こうなると、千花が舞姫の格好をしたときも彼としては本気で褒めていたのかもしれないと思えてきた。

「……なにをにやけている。食事が冷める、とつとと食べる」

「う、うん」

カイルが顔をしかめて言ってきたので、千花は慌ててナイフとフォークを動かす。そこで千花はまだカイルに今日の礼を言っていなかったことに気がついた。

「あの、言つの遅れたけど、今日は護衛ありがとう。いろいろと面倒かけてごめんね」

思えば、彼のおかげでこの世界では珍しい自転車も盗まれずにす

んだのだ。

それに文句を言いつつも、結局は最後まで付き合ってくれたのだし。

「まっただな」

盛大に溜息をつきながらカイルがそう言ったので、彼を見直しかけていた千花は下手に出たことを少々後悔した。

「いやいや、ここで怒ってはいけない。これはツンデレ、これはツンデレ。」

呪文のように心の中で唱えながら、千花も食事に専念することにした。

「……そういえば、城での教育の復習を忘れるんじゃないぞ。弟子が出来では師匠の俺が馬鹿にされる。そうならないためにもこの後俺が面倒見てやる。ありがたく思え」

「えええっ」

復習はもちろんするつもりではいたのだが、カイルがまさかこう言い出すとは思わず、千花は思わず叫んだ。

「食事中は騒ぐな。……言っておくが、俺は甘くはないぞ。覚悟しておけ」

その宣言通り、その後カイルにさんざんしごかれることになり、千花は彼に対する認識を新たにした。

——カイルはツンデレかもしれないが、やはり鬼畜だ。

23 挨拶にもいろいろある

「ティカ様、週末またお待ちしていますわ」

初めてカイルの屋敷で過ごした朝。

メリサに名残惜しそうに言われて、千花は本当に滞在を楽しみにされてたんだなあとちょっと感動しながら、はい、と笑顔で答えた。

「……それでは城に移動するぞ」

「うん」

カイルに言われて、千花は頷く。

カイルが短く呪文を唱えると、次には城の千花の部屋に移動していた。

「ティカ様、お帰りなさいませ」

千花とカイルが現れると、部屋に待機していたらしいエイミが早速挨拶してきた。

「あ、うん、ただいま」

「ティカ様お召し替えをしますから、こちらへ。エドアルド殿下とレイナルド殿下が既に隣の客室でお待ちですわ」

「え？」

お二人が待つてゐるって、今日なにかあったわけ？ と千花は思わず首を傾げる。

「さあ、あまりお待ちせしてはいけませんわ」

カイルを居室に残したまま、千花はエイミに問答無用とばかりに衣装部屋まで連れていかれ、例によってお姫様の格好をさせられた。千花がすっかり支度を終えて居室まで戻ってくると、そこには残っていたカイルと隣室から移動してきたらしい王子二人がいた。

「ティカ、おはよう」

エドアルドが千花に微笑むと、自然にその手を取って甲に口づけた。

「え、えっ!？」

まさかこういう挨拶の仕方をされると思っていなかった千花は思わずうろたえて叫んでしまう。

真っ赤になっっている千花をエドアルドが怪訝そうに見たが、やがてああ、とつぶやいた。

「ティカの国にはこういう挨拶の習慣はないんだね？」

「は、はい。エドアルド殿下、驚いてしまって申し訳ありません」

ああでも、びっくりした、と千花がドキドキしている胸を押さえていると、レイナルドがずっと彼女の前に立った。

「おはようティカ。昨日は楽しかったね」

「はい。え！？」

エドアルドに先程されたようにレイナルドにも手に口づけられて、千花はまたびっくりする。

「レ、レイド、様！」

真っ赤になっただけ抗議する千花に、レイナルドは楽しそうに笑った。

「ああは、ティカは本当に可愛いなあ。でも、これも作法のうちの一つだから今から慣れておかないと」

「あ……、そうなんですか？」

これは作法なのか、それにしても純粹培養の日本人にはちょっと心臓に悪い挨拶だ。

千花がしみじみそう思っていると、レイナルドは頷いた。

「うん、貴婦人に対する礼だよ。でも騎士からだともっと仰々しいよ」

「そうなんですか。じゃあ、少しは慣れておかないといけないですね」

今、千花の身分は王の客人と言うことになっているのだから、貴婦人扱いが順当なのだろう。

千花が納得して頷くと、カイルがずい、と前に出てきておもむろに彼女の手を取った。

「カイル？」

カイルが俯くと、淡い金髪が肩から流れて、彼の顔を覆い隠す。

千花はカイルにされるまま貴婦人への挨拶を受けた。……が。
先程と違って今度は冷静な千花に、カイルが眉を顰めた。

「……どうして赤くならない」

「はあ？」

千花はカイルがおかしなことを言い出したので、思わず素っ頓狂な声を上げた。

「第二王子や第三王子の時は赤くなっていたじゃないか。なぜ俺の時はそんなに普段通りなんだ」

「いや、だってこれは挨拶なんですよ。今更驚かないよ。……ちよつと、なんでそんなに不機嫌なの？」

「別に不機嫌ではない」

そう言つて横を向く姿は、明らかに拗ねている。

「嘘ばかり。二十歳つていつたらわたしの国でも成人なんだよ。

子供じゃないんだから、ちよつと気に入らないことがあつてもすぐ不機嫌にならないでよね」

「……」

千花の言葉にカイルが黙り込むと、王子二人が嘖き出した。

「ティカにかかると、さすがのカイルも形無しだな」

エドアルドがおかしそうに言つと、レイナルドも笑いをこらえるようにして頷いた。

「確かに。カイルにここまで言える女性もそういないと思うね」

千花は二人のその言葉に思わず首を傾げた。

「そうですか？ でも、カイルつてわがままじゃないですか。わたしとしてはもつと大人になってほしいと思いますね」

その遠慮のない千花の言葉に再度二人の王子が嘖き出した。

「……師匠に対してそこまで言うか。ティカ、後で覚えていろ」

「ええつ、嘘、なにそれっ！？」

後というのは魔術の訓練の時だろうが、昨夜の復習の時のようにかなりしごかれるのだろうか。

千花が戦々恐々としていると、エドアルドが見かねたように口を

挟んだ。

「カイル、程々にしておかないとティカがかわいそうだろう。それに、そんなふうだとまた更に言われるだけだ」

「……分かった」

渋々というようにカイルが頷いたので、千花はほっとした。どうやら鬼のしごきは免れたらしい。

「それはそうと、ティカ。前に桜並木を見せると言っただろう？」

「あ、そうでしたね」

だから、王子二人が千花の到着を待っていたのかと千花は今になって気がついた。

「桜並木、楽しみです」

千花が召喚された時は夏だったので、感覚的に妙なものはあるが、桜を堪能出来るのは嬉しかった。

「待て、俺も行く」

急にカイルがそう言い出したので、千花は意外に思いながらも聞いてみた。

「……カイル、桜好きだったの？」

「あ、ああ、まあ、そこそこな」

カイルからなんとも微妙な答えが返ってきたので、千花は照れるのかな？　と思いながらも深くは考えないことにした。

あれからとりあえず出口までカイルの魔法で移動した千花は、三人に案内されながら噂の桜並木までたどり着いた。

「うわあ、すごい綺麗……」

並木道には満開の桜の大木が立ち並び、その中を桜吹雪がひらひらと幻想的に舞っていた。

「この先には師団舎があるんだ。紅薔薇騎士団、白百合騎士団、近衛騎士団、魔術師団の四つがある」

「あかばら、しらゆり」

レイナルドに説明された騎士団の名前にすごいものがあつたので千花は思わず反応してしまう。

「ああ、やっぱりきらきらしいか。まあ、建国時からの名前なんて仕方ないけど、実際はむさい男の集団なんだよね。……でもまあ、当代の両騎士団長はそうでもないけど」

レイナルドが千花の思いをくみ取ったように苦笑しながら言った。「そうなんですか？　ちよっとお会いしてみたいです」

むさくないなら、さわやかな感じなんだろうかと思いつながら千花がそう言った途端、なぜかカイルが反応した。

「それは駄目だ」

「なんでよ」

またおかしな束縛が始まったかと千花は内心うんざりする。

「これ以上余計なこと……、いや、なんでもない」

「こ？　途中でやめるのよしてよね。なにか気になるじゃない」
なぜか途中で言うのをやめたカイルに千花は抗議する。カイルはそれに聞こえないふりだ。

「まあ、彼らには僕もちよっと会ってほしくないかな。彼らが君に好意を寄せたり、考えたくもないけどその逆があつたら嫌だし」

「なんですか、それ」

まじめに言っているらしいレイナルドの言葉がちよっとおかしくて、千花はついっつこんでしまう。

「ああ、でもそれは無理みたいだね。彼らだ」

それまで三人を眺めていたエドアルドが背後を振り返って言った。

「これは殿下方、カイル様、おはようございます」

そこには漆黒の髪と切れ長の紫の瞳が印象的な男性と、豪華な金髪に翡翠色の瞳の中性的な感じの男性が立っていた。

千花は実際の二人を見て、レイナルドがなぜ会わせたがらなかったか分かった。

はつきり言って二人とも美形だったからだ。

24 そこでなぜ求婚になる

「おはよう。ダグラス、ルパート」

二人は王子達の挨拶を笑顔で受けると、見慣れない千花の方を見て少しだけ瞳を見開く。珍しい顔立ちの異国の娘に少々驚いているのだろう。

「彼女は父王の客人で、カイルの弟子だ。名をティカ・サトーと言
う」

エドアルドに紹介されて、千花は略式の礼で彼らに挨拶した。

「ティカです。よろしく願います」

「白百合騎士団団長、ルパートと申します。お美しいあなた様にお
目にかかれて喜ばしいことの上ありません」

金髪の男性が片膝についてティカの手を取ると、恭しく口づけた。
ああ、これがレイド様が仰々しいと言っていた騎士の挨拶かあ、
と千花は納得する。

それにしても、これだけの美辞麗句を考えるのも大変だろう。

同じように漆黒の髪の男性が片膝について千花を真摯に見つめた。
その様子が先程のルパートのものより重く感じて、千花はなんと
なくドギマギする。

「紅薔薇騎士団団長のダグラスと申します。ティカ様、わたしをあ
なただけの騎士にしてください」

ダグラスがそう言っ、大切なものを扱うように千花の手に口づ
けたが、それは挨拶と言うにはなにか妙な感じがした。

「ばっ、ダグラス、いきなりなにを言っている！」

掴みどころのなさそうな感じのルパートが焦ったように怒鳴った
ので、千花はびっくりした。

「初対面で、俺の弟子にそんな挨拶をするやつがあるか！」

カイルも憤ったようにダグラスに怒鳴る。

「間違いだよ、ダグラス。いきなり初対面でそんなことしないよ

ね？ …… いやでも、ティカは綺麗で可愛いし……」

レイナルドはダグラスを問いつめたと思ったら、今度は一人でなにやら呟きはじめた。

「レイドは他人のことはどうこう言えないと思うぞ。 …… しかし、冗談にしても笑えないぞ、ダグラス」

エドアルドも厳しい顔になりながら言う。

「えっ？ えっ？ なんなんですか？」

一人話題に乗り切れなかった千花が慌てて周りを見渡すと、エドアルドが解説してくれる。その間もダグラスは千花をじっと見つめたままだ。

「『あなただけの騎士にしてください』っていうのは、騎士の求婚の言葉なんだよ」

「…… はい？」

その言葉に一瞬千花は頭が真っ白になりかけるが、慌てて言い繕った。

「えーと、ダグラスさんでしたっけ。それはなにかの罰ゲームですか？」

「いえ、ティカ様、この騎士の告白は、そんな軽い言葉ではありませんから」

ルパートが千花の言葉を完全に否定する。

それならなおさら困る、と千花は思った。

「…… そんな重い言葉を会っていきなりかけないでください」

千花がダグラスに向き合って抗議すると、彼は少し傷ついたような顔をした。

それに千花が少しだけ動揺すると、カイルが彼女の前に立って、ダグラスからの視線を遮った。

「ティカ様、わたしは……」

ダグラスがなにか言いかけたが、カイルがそれを阻止するかのように、移動魔法で彼をどこかへ送った。

「紅薔薇の師団舎に送った。 …… ルパート、やつの頭を冷やさせろ。」

正気の沙汰とも思えん」

「……かしこまりました」

ルパートが溜息を付いて頷く。そして、一瞬だけ千花を見た。
「大変失礼いたしました。それではわたしもこれで失礼します」
胸の前で腕を掲げて礼をすると、ルパートは師団舎の方へ戻っていった。

「……なんだったの？」

千花が呆然とそう言っていると、レイナルドが言いにくそうに言った。

「なんというか、ダグラスも君に一目惚れしたみたいだね」

「ええ？」

そんなに簡単に一目惚れがあつてたまるかと千花は思ったが、その当人のレイナルドにはさすがにそう言えなかった。

「……化粧にごまかされてるんですよ、きっと。素顔をみれば、ダグラスさんも元に戻りますから」

素顔も知らない人にいきなり求婚されても戸惑うだけだ。だが、さすがに千花の素顔を見ればそれが思い違いであつたと彼も気づくだろう。

「……そうだといいいけどね。しかし、あんなダグラスは初めて見たな」

エドアルドが顎に手を当てて考えこんでいる。

「ダグラスさんって、どんな人なんですか？　あまりしゃべらない人みたいでしたけど」

「そうだね、普段は無口で少々皮肉屋なところはあるかな。だが団員の信頼も厚いし、団長としてはなんの問題もない。剣の腕も立っしね」

「でも、ああいう性格の方がたちが悪いかもね。……きつと諦め悪いよ」

エドアルドの言葉を受けて、レイナルドが少しおもしろくなさそ

うにして言った。

「じゃあ、わたし、化粧を落として、今すぐダグラスさんに会いま
す。そしたらきつと百年の恋も冷めますから」

「それは、どうだろうね……。でもやってみるかい？」

「はい」

エドアルドが多少疑わしそくに千花を見たが、当の千花がやると
言っているので、それなりに協力するつもりではいるようだ。

とりあえず千花はカイルの移動魔法で自分の部屋まで戻って、速
攻でエイミに化粧を落として貰った。

「お待たせしました」

すっかり幼くなつた顔で千花は再び王子二人の前に現れた。

「お帰り。それじゃ紅薔薇まで移動しようか」

「はい」

千花はエドアルドの言葉に頷くと、カイルの移動魔法で四人同時
に移動した。

「やあ、お邪魔するよ。ダグラスはいるかい」

「はい、執務室にあります」

エドアルドが紅薔薇騎士団の副団長に声をかけると、四人は案内
されてダグラスの執務室に入室した。

「殿下、先程は失礼いたしました」

それまでダグラスの話を聞いていたらしいルパートが立ち上がつ
て、四人を出迎える。

「ダグラスさん」

千花がダグラスに声をかけると、彼は瞳を見開いた。

千花は黙ったまま動かないダグラスに近寄る。

「ダグラスさん、わたしの素顔はこんななんです。……ですから、

先程の求婚の言葉はわたし、聞かなかったことにしますね」

千花がにつこり笑って言うと、ダグラスの腕が動いた。

「可愛い」

いきなりむぎゅっと強い力で抱きしめられて、千花は窒息しそうになる。

「は、はい!？」

おかしい、こんなはずでは。予定では素顔を見せて幻滅されるはずだったのに。

ダグラスに抱きしめられて身動きもままならない千花は混乱する。
「ダグラス、なにをやっている。ティカを離せ! 僕ですらまだ抱きしめていないのに」

「レイド、後半は余計だ。それはそうとわたしからも命令だ。今すぐティカを離せ」

「ティカを離さないと今攻撃するが、それでもいいか？」

その三人の気迫に焦ったルパートが叫ぶ。

「おい、ダグラス離すんだ!」

ダグラスはふっと息をつく、千花を名残惜しそうに解放した。
ようやく圧迫から逃れられた千花は足がもつれそうになったところをルパートに支えられる。

「すみませんでした、大丈夫ですか？」

「は、はい、なんとか」

千花がそれに笑顔で返すと他四名の刺すような視線がルパートの背中に注がれた。

「ルパート」

「支えただけだろう。……それにしても実際の顔立ちは幼いんですね、ティカ様」

ルパートが千花をしみじみと眺めて言う。

「は、はい。これなら、ダグラスさんの気持ちも変わるだろうと思って化粧を落として来たんですが――」

「……どうやら無理だったようです。ダグラスに睨まれますよ」

「わたしは見た目十二歳なのに、どうしてですか！」

「あなたは十五には見えますよ。顔立ちだけで判断するからそう見えるんです。もっと全体を見ませんか」

「……はあ、そういうものですか」

ルパートに言われて初めて、童顔童顔と言われ続けているから、そこしか気にしていなかったことに千花は気が付いた。

「それはそうと、ティカはもう礼儀作法の授業だと思うんだが、そろそろ戻らないと」

「あ！ すっかり忘れてました」

エドアルドに指摘され、千花はすっかり授業のことを忘れていたことに気が付いた。

教師のゼネットは特に厳しい。千花は、当初の目的である花見を堪能できていなかったが、背に腹は代えられない。

「じゃあ、慌ただしいですけど、わたしはこれで戻ります。……ダグラスさん後でお話をしましょう」

「はい」

千花の言葉に嬉しそうに微笑みながらダグラスは頷いた。

「ティカ、無理に話をしなくても……」

レイナルドに不満そうに言われたが、でもなにもしないよりはきちんと話し合って、自分のどこが気に入ったのか聞くのも悪くないかもしれないと千花は思っていた。

それにしても、ここに来てなんだかいろいろ妙なことが起こっている。

けど、一つ一つ地道にこなしていくしかないなあ、と千花は拳を握って決意していた。

25 師匠の暴走

あれから慌てて自室に戻った千花は、エイミに化粧を再び施されて、礼儀作法の授業に臨んだ。

最初に、この間の授業で習ったことの復習から入ったのだが、カイルの昨晚のしごきが利いたのか、怒られることはなかった。

「はい、大変よろしいですよ。ティカ様、よく頑張られましたね」
そう言ったゼネットの眼鏡の奥の瞳が優しくなったので千花はびつくりしてしまった。

あれ……。

あまりの意外さに千花が固まっていると、ゼネットはすぐに元の能面のような顔になった。

「それでは本日は礼の授業をいたします」

——それからは元のゼネットだった。

「ティカ様、左足を後ろに移動させるのが早すぎます。……今度は遅すぎです！」

ひよつとして実は優しい人なんだろうかと思っていたら大間違いだった。

「ティカ様、重心がぐらついています！ もっと右足に力を入れてください！」

千花が今教わっているのは姫君の正式な礼なのだが、お姫様は本当に大変だとつくづく思わざるを得ない。

そして、終わり時間頃になって、ようやくゼネットに及第点を貰えた千花は、彼女にまた復習を怠らないように言われて礼儀作法の授業は終了した。

「今回もゼネット様は厳しかったですわね……。ティカ様大丈夫ですか？」

エイミがお昼のお茶を出しながら、椅子にぐったりとたれ掛かった千花を心配しながら言う。

「うん、なんとか。厳しいけど、出来れば一応認めてくれる人だし、そのそこはいいかも」

ゼネットのあの厳しさも職業上の熱心さから来るのであって、別にイビリではない。

「……まあ、確かにそのようすわね」

千花の言葉にエイミは頷くと、空になった千花のカップにおかわりのお茶を注いだ。

「この後はグレッグ先生の授業かあ。楽しみー」

焼きたてのパンにバターを塗りながら千花は笑顔で言った。

「ティカ様はグレッグ様がお気に入りですわね。確かに、あの方は好々爺ですけど」

「うん、グレッグ先生は、わたしの癒しだよー。教え方も上手いし、なんとというか彼は人にやる気を起こさせるのが上手いのだ。それで自然と千花も復習に力が入ったし、それに関してはカイルもなにも言わなかった。

「まあ、そうなのですか。それでは、この後の授業が楽しみですね」

「うん」

千花は味も形もどうみてもハンバーグなものを切り分けて口に運ぶと、上機嫌のまま昼食を平らげた。

「グレッグ先生、こんにちは」

「こんにちは、ティカ様」

千花はにこにこしながらグレッグを迎えた。

「きちんと復習もされているようですね。ティカ様が優秀な生徒でわたしも大変助かりますよ」

グレッグが優しい笑顔で言う、千花はちよつと照れた。

「そんなことないです。グレッグ先生の教え方が上手いんですよ」

千花がそう言う、グレッグは相手を崩した。

「それは、嬉しいお言葉ですね。ありがとうございます」

それから授業は和やかに進み、雑談に入ったところで魔術の訓練の話になった。

「ほう、ティカ様は水魔法を無詠唱で扱えるのですか。初めてです。それはすごいですね」

グレッグが心底感心したように言ったので千花は盛大に照れた。

「いえ、でも最初は失敗しちゃいましたし。無詠唱って言っても、心の中で強く思ったことで出来たんですけれど、それでいいんでしょうか」

千花の首を傾げながらの言葉に、グレッグが頷いた。

「ええ、それでいいんですよ。ティカ様は魔術の訓練についてはなにも問題なさそうですね」

「でも、わたしは異世界召喚魔法を学びたいのでまだ先は長いですが、千花が溜息をつきながら言う、グレッグは少し考え込んでいるようだった。

「……ティカ様は、元の世界に帰りたいのですか？」

「はい、それは帰りたいです。家族も心配していると思いますし」

千花は強く頷いて言った。

それに対して、グレッグは珍しく厳しめのことを言う。

「しかし、陛下やこの国の者は、あなた様を帰したくないと思われるでしょう。あなた様の存在は稀少ですから。……それでも結局はどちらを選ぶのかはあなた様次第ですが」

「……はい」

以前シモンが言っていた通り、数年後にあちらに戻っても、うま

く人生が運ぶとは限らない。否、その可能性の方が高い。

それでも、千花は帰りたかった。

そして、家族や友人に会いたかった。

「……正直なところを言いますと、戻った後どうするかまでは決まかねています。でも、一度は家に帰った方がいいと思うんです」

「……それもそうですな。まだその時まで時間はあるのですから、どうなさるのかはゆっくり考えられてください」

「はい」

千花はグレッグの慰めるような言葉に強く頷くと、再び語学の授業に入ってしまった。

語学の授業の後、千花はカイルが迎えにくるまでじっと部屋で待機していた。

「おい、演習場に行くぞ。……どうした？」

迎えにきたカイルを思わずじっと見てしまい、彼に不思議そうに言われて、千花ははっとした。

「ううん、なんでもない」

「？ 変なやつだな」

千花がカイルから目を逸らすと、案の定不審そうに言われた。

かなり難しいと言われる異世界召喚魔法を自由に扱えるカイル。

それは、手紙を時々送ってくれると言っていたことから明白だ。

——それなのにどうして。

「……カイルは、なんでわたしを家に帰してくれないの？」

千花が泣きそうな顔で言うのと、カイルは眉を顰めた。

きつと面倒なことを聞かれたとでも思っているのだろう、と千花は感じて内心むっとうしてしまう。

「またそれか。……それは、おまえを俺の弟子にしているからだ。

いい加減に理解しろ」

「でも、カイルは何度も召喚できるんでしょ？　だったら、一度くらい家に帰してくれてもいいじゃない」

「そんなことをしていたらおまえはまた帰せと言ってくるだろう。それは魔術を学ぶには効率が悪すぎる」

その突き放すような言葉に千花の大きな瞳に涙が溜まっていく。それを見て、カイルが動揺した。

「な、なにも泣くことはないだろう」

「でも手紙は送れるじゃない。屋敷に行くのを家に帰るのに当ててくれてもいいのに」

週末に家に帰るという案を提示した途端、カイルは大げさなくらいに反応した。その表情も相当不快そうだ。

「駄目だ。おまえは帰さない」

「なんで？　なんでよ」

カイルがそこで即答したので、千花は彼の服を掴んで問いかけたが、彼はそれに答えず、ただ視線を逸らすだけだった。

「なんで答えてくれないの？　ずるいよ、カイル。カイルひどい……っ」

涙をぼろぼろこぼしながら、千花はカイルの胸を叩く。

ふいに千花とカイルの視線が合った。

涙を流す千花を見て、カイルが顔をしかめた次には彼の腕が動き、千花の体を浚った。

「カ、カイル……？」

今まで問いつめていた相手にいきなり抱きしめられて、千花はうつたえる。

「いったい、これはなに？」

「なにが起こってるの？」

思いの外強い力で抱きしめられて、千花は身動きもままならない。

「カイル、どういうつもり？ 離して……っ」

なんとか上を向いてカイルに抗議した千花は、次の瞬間、なぜかカイルのキスを唇に受けていた。

——その驚きは抱擁された時の比ではなかった。

26 悔しすぎるがここは我慢

「やつ」

千花が首を振ってカイルの唇をよけると、彼の腕が緩んだ。

「な、な、なにをするの!？」

千花は慌ててカイルから数歩退くと、真っ赤な顔で叫んだ。

「……口づけだ」

——その返しはないだろう。

千花はカイルの返答に思わず脱力してしまいそうになりながら、叫んだ。

「そんなの分かってるわよ! わたしが聞きたいのはなんでこんなことしたかってことでっ」

「ここまでしてなぜ分からない。おまえが好きだからに決まってるだろう!」

カイルに開き直ったように叫ばれて、千花はびっくりした。

カイルがわたしを好き? そんな馬鹿な。

「……そんなことありえない!」

「なっ」

千花が拳を握って力説したので、カイルも驚いたように瞳を見開いた。まさかここで反撃されるとは思わなかったらしい。

「わたしのこと、馬鹿とか、頭がスポンジとか言ってたじゃない! そんなの信じられないよ!」

「そ、それは……」

それはさすがに言い過ぎたと思っていたらしく、カイルは口ごもる。

「それにわたしに対する態度も到底そうは思えなかったし! レイド様みたいにはつきり優しくしてくれるなら分かるけど」

レイナルドの名を出したことで、カイルはむっとしたようだった。
「こんな時に他の男の名を出すな」

「だって、レイド様はつきり好意表してくれてるし、分かりやすいじゃない。それに比べて、カイルは口は悪いし、意地悪だし、そんなんです突然わたしを好きって言われても、到底信じられないよ！」
「……では、どうしたら信じてもらえる。第三王子のようにしよっちゅう好きだ、可愛いとでも言えればいいのか？」

カイルにそう言われて、千花は背筋がぞわっとしてしまった。
四六時中そう言っているカイルはちよつと不気味な気がする。

「そ、それはちよつと嫌かも」

「ではどうすればいいんだ」

カイルが片手で頭を抱える。

「……やっぱり普段通りでいいかも。でも、口が悪いのはもう少しなんとかしてほしい」

「……分かった」

カイルが不承不承頷いたことで、千花は一瞬ほっとしたが、次にははっと気がつく。

「そういえば、わたしのファーストキス！ どうしてくれるの！」
カイルにツカツカと詰め寄って千花は彼に手痛い一発をお見舞いした。

「なっ、おまえは、本当に凶暴な女だな！」

千花の強烈な平手を受けた左頬を押さえて、カイルが叫ぶ。

「……当然の反応だと思うけど？ それに凶暴な女だと思うならやめたら？」

千花が冷たく言うと、カイルは押し黙った。

そこでドアがノックされて、二人の王子が部屋に入ってきた。

「ティカが訓練の時間になっても来ないようだから気になってね」

「あ……、すみません」

それでわざわざ心配して来てくれたのか、と千花は小さくなって謝った。二人とも忙しいだろうに本当に申し訳なかった。

それでもちよつと過保護すぎやしないかとは思ったが。

「……それにしても、口づけ云々と外まで聞こえてきたが本当なのかい？」

そんなただ漏れだつたのかと、千花はかーっと赤くなる。

「本当だ。俺はティカに口づけた」

カイルの開き直つた宣言に千花はぎよつとした。

普段だつたら、なんだかんだと誤魔化したりしそうなもののに。

「！ カイル、貴様！」

レイナルドがカイルの胸ぐらを掴んで睨んだ。

掴まれたカイルもまた、レイナルドを睨みつける。

「レイド様、やめてください！ キスは確かにシヨックでしたけど、わたしは大丈夫ですから！」

千花が慌てて二人の間に入って仲裁すると、レイナルドは渋々だが、カイルを掴んでいた手を離れた。

「だけど、許しがたいよ。君はカイルを嫌っていたはずだろう。それなのに、無理矢理するなんて」

「……そうだな。カイルは憎むとまで言われていたな」

レイナルドとエドアルドに容赦なく言われたカイルの顔が歪む。

「……まあ、大嫌いな相手にキスなんてされてすごく嫌でしたけど」
千花のとどめの言葉にカイルが撃沈する。

「……おまえ、本当に容赦ないな」

呻くようにカイルが言くと、千花は手を腰に当て、顎を上げて言つた。

「人のファーストキス奪つたんだから、これくらい言われて当然でしょ。あああ、思い出したらムカついてきた！」

千花は瞳に涙を溜めて真っ赤な顔でそう叫ぶ。

二人の王子がいなかったら、その場で地団太を踏んでいるところだ。

本当に最悪だ。ファーストキスの相手がよりによってカイルだな

んて。

それもこんな無理矢理とか、信じられない。

「……ティカの憤りはもつともだが、今日の魔術の訓練はこんなことがあったのならやめるかい？」

エドアルドの劣るような視線を受けて千花は戸惑ったが、結局は首を振った。

「……いいえ、訓練はします。そうしないと、いつまでも家に帰れなそうですし」

カイルが千花を家に帰さないつもりなのは、さっきのやりとりで充分分かった。それなら、自力でなんとかしてでも帰るしかない。

「……ティカがそう決めたのなら反対はしないけれどね。だが、カイルが君になにかしないか監視は付けさせてもらおうよ」

「好きなようにすればいい。だが、俺には無駄なことだぞ」

「カイル、おまえまだティカになにかする気か！」

再びレイナルドがカイルに掴みかかるうとしたが、今度はカイルの拘束魔法に阻まれた。

「今はなにもしない。……俺は嫌われているしな」

そう言つと、カイルはレイナルドの拘束を解いた。

一瞬カイルは自嘲的な笑いをこぼすと、次には呪文を唱えて移動魔法を施行した。

千花達が魔術師団の演習場に移動すると、そこにはなぜかルパートとダグラスがいた。

「やあ、いらしてくれて良かったです。体調でも崩されたのかと心配しましたよ」

ルパートが軽い調子で千花に声をかけてくる。

「遅くなつてすみません。……もしかして、わたしの訓練を見に来

られたんですか？」

千花が首を傾げながら言うと、ダグラスが頷いた。

「あなたのお姿を少しでも目に留めておきたいと思ひまして」

「そ、そうですか……。それはどうも」

察するに千花の訓練を見ようと言ひ出したのはダグラスで、ルパートはその付き添い及び、暴走を止める役目で来たらしい。

それにしてもいきなりこの世界に來た途端にモテだして、ちょっと怖すぎる。

ひよつとしてこの人達は美意識が少し変わっているのだろうか、と千花は首を捻った。

「余計な觀衆はいるが、氣を散らすな」

カイルが騎士達を目にして、不快そうに眉を寄せるが、その氣を散らす要因に自分も入っていることを理解してほしいと千花は思った。

「前に水魔法から入ったのは間違ひだった。おまえには防御壁と魔防壁を教える」

「あ……うん」

まあ、早目に防御壁は覚えていた方が確かにいいだろう。いきなり抱きしめられたり、キスされたりしてはかなわない。

「では見本を示す。おまえは俺の後について呪文を唱えろ」

「うん」

千花が頷いたのを確認すると、カイルはゆっくりと呪文を唱えだした。

千花もカイルの呪文の区切りのところで、それを繰り返した。

すると、キン、と空氣が鳴って薄い灰色の膜が目の前に現れた。

「わあ、この灰色のが防御壁？」

「そうだ、一度解除する。また俺の後について唱えろ」

言われた通りに千花が唱えると、防御壁はふっと消えた。

「ティカ、さっきの呪文は覚えてるか？」

「うん、大丈夫そう」

そんなに長い呪文でもなかったし、千花は少々安心しながら、今度は一人でもう一度呪文を唱える。すると、また灰色の膜が現れた。それから千花が防御壁を消す呪文を唱えるとそれは簡単に消えた。不意に千花は無詠唱でも出来るかな？　と考えて右手を伸ばすと、また灰色の膜が張られた。

それを目にした騎士達が息をのむ。

「まさか初めて習う魔法を無詠唱で実行するとは。カイル様の弟子とはいえ、陛下の客人となられるにふさわしい才能ですね」

ルパートが千花を信じられないものを見る目で見た。

「さすがティカ様、すばらしいです」

騎士達が手放して褒めるのを照れくさく感じながらも、千花は無詠唱で防御壁を消した。

「……それでは、魔防壁を教えるぞ」

カイルが少々複雑そうな顔をして、また同じように千花に呪文を唱えさせた。すると、今度は緑色の膜が現れる。

カイルが解除魔法を教えると、それも簡単に消えた。

千花は魔防壁も無詠唱で試してみたがこれもうまくいった。

その様子は、まさに水を吸い込む砂のようだった。

「いや、本当に末恐ろしい才能だね」

千花の訓練があまりにもすんなりと進むのでエドアルドは驚愕を感じざるを得なかった。

普通はどんなに才能がある者でも、初めて学ぶ魔法は少しもたつくものなのだが。

「この調子だと、ティカが言った三年よりも早く異世界召喚魔法を覚えてしまう可能性もあるね」

エドアルドの言葉にレイナルドも頷く。

いずれそう遠くない未来、彼女はカイルをしのぐ魔術師になる

だろう。

そして、自分の世界へと帰って二度と戻って来ないかもしれない。そうならないように、なんとか対策を講じなければならない、と他の新たな魔法をカイルから教わっている千花を見つめながら王子二人は感じていた。

27 ギャラリー付きの話し合い

結局カイルに教わった魔法は五つ、すべて初等魔法だ。

一度に教わりすぎて呪文を忘れてしまうことを防ぐため、カイルはいったんそこでやめると言い出した。

それには千花も頷いて賛成した。確かにもっともな意見だったからだ。

次の訓練には、カイルに拘束魔法を教えてもらうという約束を取り付けた千花は、持参したメモに教わった呪文をカタカナで書き写した。

「へえ、それがティカの国の文字か。変わった形だね」

ティカのメモをレイナルドが興味深そうに見て言った。

「カタカナって言うんですよ。これは日本語としてはかなり簡単な表記なんです。あ、本当のわたしの名前はこう書きます」

千花はメモに『佐藤千花』と書くと、漢字がかなり珍しかったのかレイナルドが目を瞠った。

「なにか随分と複雑な感じだね」

「佐藤は日本で一番多い名字なんです。わたしの名前は千の花って意味ですね」

「綺麗な名前だね。ティカに合ってる」

「あ、ありがとうございます」

千花が頬を染めて礼を言う近くで、二人の騎士達が「ニッポン？」

「ニホン語？」と首を傾げた。

「ああ、二人にはまだ話が行っていなかったか。いずれ話が行くはずだったが、ティカはカイルが異世界から召喚した者だ」

エドアルドが説明すると、ルパートとダグラスは息をのんだ。

「異世界の――」

「……ならば、陛下の客人というのにも納得できます。カイル様の弟子で恐ろしいほどの才能の持ち主だとしても、これだけの待遇は

余程の要人でしょうから」

ルパートの心からの言葉であろうをそれを聞いて、千花は確かにこんな小娘に特別待遇は傍から見てもおかしいよね、とつくづく思った。

「ただ、それを知っているのは一部だけだ。ティカが異世界人だということとは公にしないでほしい。彼女を余計な面倒事に巻き込みたくないからね」

エドアルドが多言無用とばかりに騎士二人に釘を刺す。

どうやら千花が思っていたよりも、異世界人という立場はやっかいなものらしい。

「——かしこまりました」

それに対して、二人は胸の前で腕を掲げて頭を下げた。

魔術の訓練が終わった後。

ティカはダグラスと話をするという約束通り、紅薔薇騎士団の会議室にいた。

本当は執務室の予定だったのだが、大人数で押し掛けたため、そうなってしまったのだ。

「お疲れさまでした、ティカ様。すごい速度で魔術を覚えてますね」ルパートにねぎらいの言葉をかけられて、千花は微笑んだ。

「ありがとうございます。でも、まだ初等魔法ですから、なんとかなってるんです」

「いえ、ティカ様はすごいです。短時間にあれだけの魔法を覚えられるのですから」

ダグラスが身を乗り出して熱心に言う。

「ありがとうございます。それにしても、わたし一人で来る予定だったのに、大人数になってしまつてすみません」

千花にも予想できなかった事態に、申し訳なくてダグラスへ謝っ

た。

一応ルパートがいるから大丈夫だと主張はしたのだが、それは簡単に却下され、結局、王子二人とカイルがくっついてくることになった。

「いいえ、いいのです。あなたとお話出来るだけでわたしは幸福なのです」

ダグラスに愛しそうに見つめられて、千花は居心地の悪さに身じろぎする。

「そ、そうですか……」

ダグラスの隣のルパートを見れば、ダグラスの盲愛ぶりにちよつと呆れているらしい。

本当になぜこんなに彼に好かれているのか、千花には理解不可能だ。

「つかぬことをお聞きますが、ダグラスさんてわたしのどこが好きなんですか？ 化粧の有無は関係なさそうですし、それが不思議で」

「そうですね……。あえて言えば、あなたの周りの空気でしょうか」「空気？」

千花が不思議そうに首を傾げると、ダグラスは頷いた。

「はい。あなたをとりまく清浄な空気にわたしは惹かれました」
清浄な空気なんて表現されると、なんだか自分がいかにも清らかな存在だと言われているようで、なんとも気恥ずかしくなる。

千花は少々熱くなつた頬を隠しながら自分の考えを口にする。

「く、空気ですか……。もしかしたら、わたしの膨大な魔力と関係あるかもしれませんね」

「ああ、そうかもしれないな。おまえの周りにはその身に収まらない魔力がまわりついているからな」

カイルが面白くなさそうにその様子を見やりながら言った。

「そ、そうなんだ。……カイルには他人の魔力が見えるんだね」

「ああ。他人の魔力の追尾も可能だぞ」

「え、それって、どんなの？」

「誰が今どこにいるか、俺には筒抜けになる。……まあ、面倒だし、滅多に使わないがな」

そういえば、街に観光に出てレイナルドと一瞬はぐれたときに、カイルは彼はこちらに向かっているといやに確信的に告げたことがあったが、それはこういうことだったのかと、千花は納得した。

「へえー……、それわたしにも出来るようになるかな？」

素直に感心して千花は言ったのだが、カイルは気乗りしないように少し眉を寄せた。

「まあ、他人の魔力が見えるようになれば可能だとは思うがな」

「そうなんだ！　もし見えるようになったらその時は教えてね」

「……ああ」

いつ他人の魔力が見えるようになるかは分からないが、GPSの機能に近い魔術は便利そうだ。

にこにこしてカイルに気軽に頼んだ千花に対して、カイルのその顔が一瞬かげったように見えたが、千花は気にしないことにした。

「そういえば、おふたりはおいくつなんですか？　あ、わたしは十六歳ですが」

「二十四です。あなたとは八つ違いですね」

そのダグラスの言葉に千花は驚いた。

そんな年上がこんな小娘を相手にするとは思えなかったからだ。

「え、そんな年上なんですか？　わたしの年齢からすると、二十歳過ぎててもかなり年上に感じるんですけど」

それには、千花と一つ違いのレイナルド以外の男性が反応した。

エドアルドも今年二十一歳なのだ。

「……年が離れているのは嫌ですか？」

少々不安そうにダグラスが聞いてきた。彼の頭の上に垂れた耳が見えたような気がしたのは、千花の気のせいだろうか。

「うーん、そこまで離れていると、共通の話題を見つけるのが難しそうとか」

特に八つも離れているとなると、自分がものすごく幼く感じそう
だ。

「そうだよな。やっぱり、歳が近い方がなにかと楽しいよね」

嬉しそうにレイナルドが千花の意見に同調する。

まあ、彼は身分はとんでもなく高いが、気さくだし、話していて
楽しいのは本当だ。

「……そうですか。やはり若い方がいいですか」

ダグラスが溜息をつきながら悲壮な顔で言ってきたので、内心千
花は大げさだなあと感じながらも、慌てて言った。

「いえ、でも年上の方も頼れる感じでいいと思いますよ、うん」

中には二十歳なのに子供っぽいカイルみたいなのはいるけど。

千花はそう思ったが、口には出さないでおいた。カイルがへそを
曲げることが容易に想像できたからだ。

「そうですか。それならよろしいのですが。……それはそうと、テ

イカ様、わたしの求婚の件、考えておいてください」

ダグラスに真摯な瞳でそう告げられて、千花はうろたえた。……

どうやっても彼の気持ちには応えることができないからだ。

「すみません。求婚はお受けできません」

「なぜです？ もちろんあなた様が貴賓なのは承知しておりますが」

身を乗り出して聞いてくるダグラスに千花は心底すまなそうに頭
を下げた。

「わたしはいずれ、自分の世界へ帰ります。ですから、どなたの求
婚も受けません」

28 なんだか上手く丸め込まれたような気もする

「ティカ様……」

千花の宣言に消沈するダグラスを押し退けるようにして、傍の三人から口を出された。

「ティカ、それは駄目だ」

「駄目だよ、ティカ」

「それは許さん」

上からエドアルド、レイナルド、カイルの順。

「誰の求婚も受けないなんて駄目だ」

代表してレイナルドが皆の意見を述べる。

「なぜですか？ それを決めるのはわたし自身です。私が元の世界に戻ることは陛下にもお伝えしたはずです。たとえ殿下方がおつしやられても、わたしの気持ちは変わりません」

「……ティカは結構意固地だなあ」

「どうやったら、君のその気持ちを換えられるんだろうね」

レイナルドとエドアルドが千花の思いの外固い決心に溜息をつく。

「……だったら、異世界召喚魔法を教えるのはやめるか」

「！ それは約束違反でしょ！」

カイルの言葉に反応した千花が彼に向かって習いたての火魔法を発射する。

「おい、危ないじゃないか！」

とつさに魔防壁を張ったカイルが千花に向かって抗議する。

千花が放ったのは初等魔法だが、いかんせん千花の魔力が膨大なので、威力もかなりなものになるのだ。

「ティ、ティカ落ち着いて」

「ここで攻撃魔法を使うのはまずい」

レイナルドとエドアルドに諭されて、千花はすっかり頭に血が上っていたことに気がついた。

「あ！ す、すみません！ 演習場でもないのに火魔法なんか使っちゃって」

魔法防御結界の施されていない場所での火魔法の使用は、下手をすれば大火事だ。

千花は己の重大なミスに気がついて、慌ててダグラスに頭を下げた。

「いえ、良いのです。カイル様がいらつしやれば火事にはなりませんし。……それはそうと、ティカ様はカイル様と仲がよろしいのですね」

「……は？」

ダグラスの言葉に千花の目が点になった。

今の殺伐としたやりとりを見て、どうやったら仲がよいと思えるんだろ。ダグラスの思考回路は謎すぎる。

「……いや、仲が良いとは言えないだろ。むしろカイルはティカに嫌われてるよ」

「……どうしてです？ ティカ様はカイル様のお弟子でしょう？」

安全なところに避難しながらも、おもしろそうに事態を見ていたルパートがもつともなことを聞いてくる。

「嫌っているのは無理矢理この世界に連れて来られたせいですし、カイルの弟子になったのは、そうしなければ生活の保障はないと脅されたからです」

千花が簡潔に説明した途端、騎士達が瞳を見開いたかと思ったら、次には憤っていた。

「カイル様、女性に対してそれはいくらなんでも酷すぎます」

「カイル様……、ティカ様を脅すとは何事ですか。事と次第によつてはわたしはあなたに勝負を挑みます」

ダグラスが据わった目でカイルを睨む。それに対してカイルも睨み返す。まるで二人の間で火花が散っているようだ。

「ダグラス、冷静になれ。いくらなんでも当代一の魔術師のカイル様にかなうわけはないだろう」

ルパートがダグラスを後ろから羽交い締めにする。

「分かっている。しかし、彼の方のティカ様に対する仕打ちは許せない」

ぎらぎらとした目で、ダグラスはカイルを睨む。

「ちょ、ちよつと待ってください！」

千花が慌てて二人の間に仲裁に入った。

「確かに召喚されて、弟子になった経緯に関してはとてもカイルを恨んでますし、今も大嫌いです」

千花がそう言った途端、カイルが辛そうに俯いた。

「けれど、今わたしがここにいるのは、陛下からここに留まれとの決定が下されたからです。それなのに、争いを起こされては困ります」

千花は先程カイルに火魔法を放ったことを棚に上げて言った。

「……でもまあ、カイルがティカを召喚してくれたから、僕は彼女に会えたんだけどね。ティカにとってはいい迷惑だろうけど」

「……まあそうだな」

レイナルドのしみじみとした言葉に、エドアルドが頷く。

「確かに、ティカ様とお会いできたのは嬉しいことです……」

ダグラスはそれでもまだ不満そうに呟いた。

「……それはそうと、カイルさっきの異世界召喚魔法を教えないってことは取り消してよね。じゃなかったら、わたしカイルの弟子やめるけど。うーん、弟子になるとしたらアレクセイさん辺りが適任かもー」

彼はまともだし、聞いたところによると、魔術自体は師団長レベルに達しているらしい。……シモンでもいいのだが、女癖が悪いので問題外だ。

「なぜアレクセイなんだ。それは駄目だ！」

千花の脅迫めいた言葉を聞いて、カイルが顔をしかめて叫んだ。

「だって、アレクセイさんが一番まともそうだし」

「アレクセイがまともなのは認める。だが、あいつも若い男だぞ。」

もし気の迷いでも起こしたらどうするんだ」

……キスまでしてきたカイルには言われたくないんだけど、と千花は心の中でつつこむ。

口に出して言うと、ダグラス辺りが黙っていそうもなかったからだ。

「……だったら、異世界召喚魔法教えてくれるの？」

千花がにつこりとカイルに笑顔を向けると、カイルは、うろたえたように後ろに退いた。

「……分かった、教える。教えればいいんだろう」

そして、渋々とだが結局それを認めた。

「しかし、結局話は平行線のままか」

エドアルドが少し疲れたように溜息をついた。

「すみません」

求婚されている身であんな風に宣言してしまったのは確かにまずかったかもしれない。その結果、彼らにかなり酷いことをしてしまったのかもしれないのだ。

おまけに、騎士団の会議室で火魔法を繰り出すという暴挙を犯してしまった千花は反省して小さくなる。

「ティカはあまり四角四面に考えず、もつと柔軟に考えたらどうだい？ いずれはもちろん元の世界に帰るのだろうが、その時にはこちらに滞在したくなっているかもしれないだし。先のことは誰にも分からないよ」

「……まあ、確かにそうですが……」

帰ってからどうするか迷っていたこともあり、エドアルドの説得に千花の瞳がゆらゆらと揺れる。

「それに、これから誰かを好きになるかもしれない。……その可能性は否定できないだろう？」

「……そうですね」

確かに、この世界にいる間にそうなるかもしれないことは考えられる。

現に今もこれだけエドアルド達には優しくしてもらっているのだ。それ故に、彼らに惹かれてしまうことも絶対にありえないと否定はできない。

以前、カイルが千花のことを異性として見ていると、レイナルドが指摘して、千花は否定したが、結局はその通りだったように。

「とりあえず、わたしは待つよ。君はまだそういう感情に疎いようだしね」

そう言っ、エドアルドは千花の手に口づける。

「僕も待つよ。妃は君だと決めているし」

そんな大切なことを決められても困るんだけどなあ、と千花は眉を下げながら思いつつも、今度はレイナルドに手を取られ、そこに口づけられる。

「ティカ様、わたしも何年でもお待ちしております。そしてわたしを選んでくださればとても嬉しいです」

ダグラスが片膝をついて、千花の手に恭しく口づける。

……だから、それは重いんですってば。

千花は少し頭が痛くなった気がして、こめかみに指を当てる。

「ああ、俺は……」

カイルがなにか言いたそうにしていたが、千花はそれを無視して言った。

「カイルは、魔法教える約束絶対破らないでよね」

こっちは大事なファーストキスを奪われたんだから、おかしいとは言わせないぞと千花は冷ややかにカイルを見る。

カイルが手を取ろうとしたのを避けて言った千花の言葉は結構辛辣でカイルは結局黙り込んでしまった。

「……ティカ様、魔力以外でも実は最強なんじゃないですか？」

それまで傍観していたルパートが楽しそうに言ったので、千花はそれにどう答えようかとしばし考えこんでしまった。

29 あの手匠にしてこの弟子あり

紅薔薇騎士団の師団舎からの帰り道、千花は、朝は堪能出来なかった見事な桜並木を通って帰途についていた。

ダグラスが送ると主張したが、既に同伴者が三人もいたし、それは丁重にお断りした。……非常に彼は残念そうであったが。

「それにしても、素敵な場所ですね」

何度通っても幻想的な様子に思わず溜息が漏れる。

「これは、三百年前に当時のカデイス国王が絶世の美女であるイルーシャ姫の為に植えさせたものなんだ」

「へえー……、そのイルーシャ姫って月読の塔の眠り姫ですよ？」
ちようど語学の授業でその姫君のことについて勉強していたこともあり、千花はエドアルドの話を興味津々に聞いた。

何百年も眠り続けた姫君が突然目覚めるなんて、おとぎ話のようでわくわくする。

「そうだよ。城に肖像画も飾られているけれど、現存している数少ない映像によると、実際はもっと美しかったようだね。あまりの美しさに国内外から求婚者が殺到したって話も残っている」

「今、姫が眠っていた塔は観光名所になっているよ。ティカさえよかったら今度見に行かない？」

レイナルドに誘われて千花は一も二もなく頷いた。

「はい！ ぜひ見たいです！」

「……そんなに見たいのなら、今すぐ移動するが」

カイルが気のなさそうに言うと、レイナルドは少々むっとした。千花と二人きりになる機会を邪魔されたかららしい。

「あ、でも今は桜見てるから今度でいい。これからだと時間も遅くなっちゃうし」

まだ桜を満喫していなかった千花は少し慌てて言う。

塔は逃げないし、今はまだこの美しい風景を見ていたかった。

「……そうか」

カイルは少々残念そうだったが、そこまでの強行スケジュールにするつもりはない。

千花は舞い落ちる花びらに手をかざすと、覚え立ての風魔法でその手のひらに花びらを集めた。

それをハンカチに包むとドレスのポケットにしまいこんだ。

その様子を見守っていたエドアルド達は、なんの迷いもなく魔術を施行する千花に純粋に感心したようだった。

「……あの短期間ですっかり魔法を自分のものに行っているね。その花びらはどうするんだい？」

「あ、これは乾かしてポプリにでもしようかと思うんです。せつかく綺麗なんですし」

「それなら、もう少し量が必要だろう」

「うん、そうなんだけど、手近に瓶がないし」

千花がそう言うと、カイルはどこからか花びらを収容するのに手頃な大きさの瓶を召喚してきた。

「……これならいいだろう」

「あ、うん。ありがとう」

カイルについて、いろいろと思うところはあるが、せつかく親切に出してくれたんだし、千花はありがたく彼に礼を言って早速使わせて貰うことにした。

千花はハンカチの中の花びらを瓶に移すと、もう一度無詠唱で風魔法を駆使して瓶に花びらをいっぱいまで収納していく。

「ティカのこういうところは女の子だなあ」

レイナルドが微笑ましそうに言うと、千花は少し恥ずかしそうに頷いた。

「わたし、桜の花の色合いとか匂いとかが好きなんです。でも、日本人は結構桜好きな人いると思いますよ。日本の国花ですし」

匂いで言ったら、桜餅などに使う塩漬けの葉が一番なのだが、この際贅沢は言っていられない。

集めた花びらは天日で乾かして、再び瓶詰めにするつもりだった。できれば桜のエッセンスがあればいいのだが、後でエイミかディアナに聞いてみようと思つた。

にこにこして瓶を抱える千花を優しい目で見ながら、エドアルドが少し考えるようにして言った。

「では塔に行くのは明日にしようか。そうしたら、朝一番か、魔術の訓練が終わつてからだな。ティカはどっちがいい？」

エドアルドのこの言い方だと、もしかしくなくても千花につきあう気なのだろうか。

……忙しいだろうに申し訳ないなあと思いつながら千花は答えた。

「あ、それなら魔術の訓練が終わつてからでお願いします。明日はコーデリア様に庭園で朝食を一緒にとお誘いを受けてますので」「義姉上と？」

「はい。この間いろいろあつてお茶会のお誘いもうやむやになつてしまいましたので」

今日、侍女を通じてわざわざ彼女から丁寧なお誘いがあつたのだ。王太子妃のお誘いとあれば、無下に断るわけにもいかないだろう。

「……しかし、大丈夫かい？ 義姉上が出られるのなら、兄上もまず出席すると思うが」

少し心配そうにエドアルドが千花を見る。

考えてみれば、コーデリアが出席するのなら彼女を熱愛する王太子が出ないわけはないのだ。

「あ、そうですね」

「……兄上は悪い方ではないのだが、口調が厳しいから慣れない者は敬遠しがちなだよ」

……それはなんとなく分かる気はした。

あの口調で尋問などされたら、涙目になるかもしれないと千花は思った。

「なんだつたら、その朝食会に僕達も参加するよ。ティカはまだこの世界になれていないんだから心配だし」

「そうだな。それがいいだろう。わたしからそのように手配しておく」

「……すみません、ありがとうございます」

それはちよつと過保護かなあと思わないでもないけれど、王太子が苦手なのは確かだったので、千花はほつとしてしまった。

「それならば俺も参加する」

突然カイルがそう言い出したのが意外で、千花は少し驚いた。彼の性格だったら、まず面倒と言いつうだったからだ。

「なんで？」

「コーデリアは俺の姉だ。参加してなにが悪い」

「ま、まあ悪くはないけど」

そう言われてしまうと、千花はなににも返せなくなってしまう。

千花がエドアルドの意向を探るようにちらりと窺うと、彼は苦笑した。

「まあ、たまにはいいだろうね。義姉上もカイルと積もる話もあるだろうし」

見ると、レイナルドも仕方なさそうな顔をしている。

当代一の魔術師というだけでなく、王太子妃の弟という立場は王子達からしても結構重要なもののようなのだ。

それで、千花は以前から聞こうとしていたことを思い出した。

「……そういえば、聞くの忘れてただけどコーデリア様の実弟ってことはカイルって貴族なの？」

「ああ、俺は王妃を多く輩出してきたエトール侯爵家の出だ。今は兄が家督を継いでいるので俺は独立しているがな」

「そうだったんだ。コーデリア様の弟なら確かにそれなりの家の出だよな」

それを聞いて千花は納得して頷いた。貴族にしてはカイルはかなり口が悪すぎると思ったが。

「……なにか俺が貴族だと不満そうだな、ティカ」

「え、そんなことないよ。気品のあるコーデリア様の弟にしては、

性格に隔たりがありすぎるなとは思ってたけど」

「ほう。それはどういう意味だ」

凄みのある笑顔でカイルが尋ねたが、千花は素知らぬ顔で答えた。
「えー、それはもちろん、コーディア様は性格いいのに、カイルは……ちよつと、瓶取らないでよ」

千花の遠慮のない言葉に頬をひくつかせたカイルは彼女が大切に持っていた桜の花びらの瓶詰めを奪おうとする。

「カイル、子供の喧嘩ではないのだから、そういうことはやめるんだ」

エドアルドが呆れたように言うと、カイルがばつが悪そうに瓶から手を離れた。

千花は桜の花びらの瓶詰めを胸元に抱え込んで、なんとか死守してきたことに安堵して笑顔を浮かべた。

自分もかなりのものだが、カイルの大人げなさは相当だ。これはわがまま放題に育ったんだということが容易に想像できた。

「カイルがシモンさんの弟子になったのはいくつなの？」

「八歳の時だ。師匠は魔術師としてはまともだが、生活態度に問題がありすぎて、正直グレッグ老あたりに師事すれば良かったと後悔したぞ」

シモンも歳の割にはかなり大人げないが、そういう人が師匠だとこんなふうになってしまふものかと千花はまじまじとカイルを観察した。

「なんだ」

少々居心地が悪そうにするカイルから目を外すと、千花は首を振った。

「ううん、別に。グレッグ先生なら確かに良かったかもね」

もしカイルがシモンではなくグレッグに師事していたら、この問題ありな性格も形成されなかったかもしれない。

そこでふと、わたしは大丈夫だよな？ という考えが浮かんだが、怖いので深くは考えないようにした。

30 師弟のあり方

「コーデリア様、おはようございます。本日はお招きありがとうございます」

コーデリアの朝食会に招かれた千花は略式の礼で挨拶をした。

本当は習いたての正式な礼を披露する絶好の機会でもあったのだが、それはさすがに大仰に取られそうなのでやめておいた。

「おはようございます、ティカ様。いらしてただけで嬉しいですわ」

コーデリアが優しく微笑んで千花を迎えた。

ああ、やっぱり綺麗な方だなあと千花はうっとりコーデリアを見つめる。

「……ティカ、おまえは前もコーデリアに見とれていたが、もしかして妙な気でもあるのか？」

カイルのその突然の言葉に、コーデリアとルイスガルドが呆気に取られる。

千花はカイルがいきなり失礼なことを言い出したので、思わず叫んでしまった。

「あるわけないでしょ！ 変なこと言わないでよね。綺麗な方に見とれることって、普通にあるでしょ」

「しかし、おまえは俺には見とれないじゃないか。男女の差はあるにしろ、俺とコーデリアはかなり顔立ちが似ているぞ」

またこいつはおかしなことを言い出したよ……と千花はカイルをちよっとうんざりしたような顔をして見つめた。

まあ、確かに顔立ちは似ている。……似ているが。

「わたしがカイルに見とれる訳ないじゃない。それに、コーデリア様とカイルじゃ性格が違いすぎるし」

……実は最初にカイルに会った時に千花は見とれてしまった訳だが、それは黒歴史なので封印しておく。

「……そうか」

カイルが幾分がっかりしたように呟くと、それまで二人のやりとりを静観していたコーデリアが口を開いた。

「……カイル、ひよっとしてティカ様に想いを告げたのですか？」

「ああ」

カイルが頷いたのを後目にしつつ、千花はちよつと引つかかったことをコーデリアに確認する。

「……コーデリア様、カイルの気持ちを知っていらしたのですか？」

「ええ、カイルがあれほど興味を持ったのはティカ様が初めてでしたから」

そう言つと、コーデリアはにっこりと綺麗に笑つた。

……そうか、それで国王との謁見の後、カイルを嫌わなくてくださいとおっしゃられたんだ。

あれが単に姉弟愛から出た言葉ではなく、コーデリアに確信があったからだと分かり、千花は納得した。

「……それで、想いを告げてどうなったんだ」

興味をひかれたらしいリスガルドがカイルに尋ねた。

「大嫌いと拒絶された。その前に強引に口づけたせいもあるが」

「……」

ばらすなよ！

そう叫びたいのを千花はかるうじてこらえる。

千花が怒りを抑えながらふるふる震えていると、コーデリアが宥めるようにその背中を撫でた。

「酷いですわ、カイル。それではティカ様がお気の毒すぎます」

「……まあ、やりすぎたのは認める。でもティカも悪いんだぞ」

「なんでよっ」

こっちは被害者だぞ、と千花は憤る。

「おまえが無防備に泣くからだ。あんなふうに泣かれたらつい手を

出したくなるだろう」

それは、隙だらけってことだろうか、と千花は考える。

「勝手なこと言わないでよ。……まあ、この世界に喚び出した時点で勝手だけど」

千花が口を尖らせて抗議すると、カイルは肩を竦めてなんてことのないように言った。

「まあ、俺に見つかった時点で諦めるんだな」

「なに、そのなにかの事故みたいな言い方」

千花は思わず呆れるが、カイルはどこ吹く風だ。

「千花様、どうぞ席にお着きになってください。カイルも」

コーデリアに促されて見ると、既に他の人達は着席している。

それで千花は侍女に案内された席に座った。

「おはよう、ティカ。今日はよい朝だね」

エドアルドに挨拶されて、千花も笑顔でおはようございますと応える。確かに今朝は朝食会にぴったりの穏やかな気候だ。

「ティカ、おはよう。飲み物は何にする？ コーヒーもあるけど」

レイナルドもにつこりと千花に笑いかけて尋ねてきた。

「おはようございます。…… コーヒーあるんですか！？ じゃあ、ぜひコーヒーで」

ここでは飲み物と言ったら、ミルクティーが主体だとばかり思っていたので、千花は喜んで注文する。

「コーヒー…… そういえば、ティカのところではかなり多く飲まれている嗜好品だったな」

カイルが思い出すように顎に手を当てながら言った。

「そう。ここにはないと思っていたから嬉しくて」

千花が思わずにこにこすると、それを見た周囲の目も優しくなる。

当の千花はそれには気づかないままだ。

侍女が千花のカップにコーヒーを注ぐうとすると、千花はふと思

いついたように言った。

「あ、コーヒーは半分の量で。あとの半分は温めたミルクにしてください」

「かしこまりました」

頷いた侍女はその通り千花のカップにコーヒーとミルクを半々で注いでいく。

「まあティカ様、それはよい飲み方ですわね。……わたくしもそれをお願いします」

コーデルリアが感心したように言ってから、侍女にそう頼むと、彼女を熱愛するルイスガルドもそれに倣った。

結局、その場にいた五名全員が千花の頼んだ飲み物を注文した。

「……まあ、これは飲みやすくておいしいですわ。わたくし、コーヒーは苦くて少し苦手でしたけど、これなら大丈夫です」

コーデルリアが驚いたように言くと、千花ににこにここと笑いかけた。「それは、カフェオレって言うんです。わたしはそのままでも大丈夫ですけどね」

まあ、ブラックは胃に悪いのでそうは飲まないが。

「そうか。それなら、ザクトアリアからもう少し輸入するか。これなら女性でも飲めるようだしな」

ルイスガルドは少し考え込むようにして言った。

「そうですね。市井にもこれなら広がるでしょう。ティカ様よいことを教えていただいてありがとうございます」

「え、そんな。たまたま向こうの世界にある飲み物だっただけですし、わたしはなにも」

コーデルリアに感謝するように頭を下げられて、千花は頬を染めながら慌てて手を振った。

「でも実際これおいしいよ」

「ああ、そうだな。これなら確かにコーヒーも広まるだろう」

レイナルドとエドアルドも頷きながらそう言う。

「……ティカの世界は嗜好品が多いな。そういえば、この間興味を

引かれて、コーラというものを飲んだが」

「え……、コーラ飲んだの？」

思ってもいなかったカイルの言葉に千花はびっくりして聞いた。いくら異世界慣れしているとはいえ、そんな刺激の強いものを。カイルは結構好奇心が強いらしい。

「ああ。だが、炭酸というものが強くてむせた」

「……さもありなん。」

「……まあ、あれも慣れれば中毒になってやめられない人もいるけどね」

「……いるのか？」

信じられないというようにカイルが千花を見た。

「うん。ちなみにコーヒーも中毒になるよ。だからほどほどに飲むのがいいかもね」

「まあ……。ティカ様は本当に物知りですわ」

尊敬の目でコーデリアが見てきたので、千花は真っ赤になる。

こんな知識でそんなふうに見られたらどうしていいか分からない。

「そ、そんなことないです」

恥ずかしさから俯くと、カイルがまたおかしなことを言ってきた。

「……おまえ、やはりおかしな気が」

「あるわけないでしょ！」

思わず手近にあった銀の盆で千花はカイルの後頭部を殴りつつ、つつこみを入れる。

それを他の者達が啞然として見ていたが、しばらくしてこれがこの師弟のあり方だと気づき、仕方ないなというように苦笑いしていた。

31 高等魔法に至るまでの難題

「あ！ すみません、非礼なことして」

千花はカイルを殴った後はつと我に返り、小さくなって周りの人々に謝った。

「本当だな」

カイルがそう言ってきたので、千花はぎつと彼を睨み付ける。

誰のせいだと思ってるんだか。

……まあ、殴ったのは少々やりすぎたが。

「およしなさい、カイル。……ティカ様、カイルはどうやらあなたを構いたくて仕方ないようですわ」

「え、えっ!？」

思ってもいないことをコーディネリアに言われ、千花はうるたえる。

「おい、コーディネリアなに言っている。俺は別にそんな意図はない」
カイルが眉を顰めて否定したが、コーディネリアは微笑んでそれをかわした。

「まあ、そんなことを言っても、誰も信じませんわ。……そうでしょう？ ルイスガルド」

「そうだな。好きな娘を構いたくてしょうがない子供のような」

「なるほど、子供ですか」

それにエドアルドが納得したように頷いた。

「ふざけるな、俺のどこが子供なんだ」

「えー、そのものじゃない」

その言葉に反応したカイルが千花に手を伸ばす。……しかし、千花がとつさに張った防御壁にそれを阻まれた。

カイルはそれを忌々しそうに見てから、千花を睨む。

それに千花はあかんべで返してやりたかったが、ロイヤルな方々

の前だったので一応自重した。

「ティカは随分と自然に魔法が出せるんだね」

それを目にしたレイナルドが感心したように言った。

「呪文習得後は、強く心に思っただけで出来るみたいです。今のところ初等魔法しか教わってないですから、これからもそうできるかは分かりませんが」

「でも充分すごいよ。……僕としては少々複雑だけどね」

千花に元の世界に帰ってほしくないレイナルドは、本当は彼女を魔術師にしたくないのだ。それ故にこうした発言になり、どうしたらいいか分からない千花はちよつと困った顔をした。

「ティカ、そんな顔しないで。君を困らせたいわけじゃないんだ」

「レイド様、わたし……、いえ、なんでもありません」

千花はレイナルドに声をかけようとして、結局はやめた。……いつか家に帰るつもり千花は、彼の希望には応えられないと気がついたからだ。

「……まあ、今はそういう話は置いておいて、ティカはなにが食べたい？ わたしが取るが」

少し重たくなった空気を振り払うかのようにエドアルドがそう言ったので、千花は少しほっとした。——だがかし。

「アルド兄さん、ティカの世話なら僕が焼くよ」

「いや、俺が——」

千花を巡る恋敵同士の火花が散る。

それぞれが別々の料理を取り、その結果、千花の前にはたくさんの皿が並ぶことになった。

困った。こんなに食べれないよ……。――

千花が困り果てて目の前の料理を見ると、ルイスガルドが呆れたように言った。

「おまえ達、そんなことで張り合っでどうする。エドアルドまでなんだ。ティカが困っているぞ」

それで初めて火花を散らしていた男達が我に返り、一斉に気まずい顔になった。

「ティカ様、無理にお食べになることはありませんわ。各皿から少しずつお取りになればよいのです」

「あ……、そうですね」

コーディネアの提案に、千花がほっと息をついた。それならば、なんとかそれぞれの顔を潰さずに済みそうだ。……盛られた料理はもつたないが。

「……それはそうと、ティカの魔法の習得状況はどうだ。はかどっているのか」

絶大な魔力を持つ千花の魔術師への進捗状況はいずれこの国の王になるルイスガルドにとつても、気になることのようにだった。

「ああ、そのことなら今のところ全く問題ない。むしろ、進みが速すぎるくらいだ。……ただ、全く文字が分からない今のティカでは魔術書を読むこともかなわないから、今後どうなるかは分からないがな」

「……魔術書が読めないと、進みが遅くなるの？」

カイルが少し不安になるようなことを言ったので、千花はそれに反応する。

「ああ。応用魔法や高等魔法は魔法書が読めた方が教えるのも手つとり早いからな。それに口述だけで教えるのは、構成が複雑になる分、間違いも起こりやすい。高等魔法を修めるなら、それをまず解決しなければならんだろう」

「……それって、今のわたしでは高等魔法を覚えるには致命的なこと？」

初等魔法はかなりの速さで覚えていただけに、カイルの言葉は千花にはかなりショックだった。

「そういうことになるな。まあ、今のままでも不可能ではないが、魔法を覚えるのに不利なことには変わらない」

……言葉を理解できなければ、高等魔法が覚えにくいなんて。それじゃ、いつ帰れるか分からないじゃない。

思いもかけないことに千花が呆然としていて、エドアルドとレイナルドが心配そうに声をかけてきた。

「ティカ、言葉のことはすぐ解決できることじゃない。焦らず、じっくり学んでいけばいい」

「そうだよ。焦ってもどうしようもないし。ティカ、あまり気に病まないで」

「は……い、ありがとうございます」

それで千花ははつとして、二人になんとか礼を言う。

「……なんなら、魔法習得の時間を語学に回してもいいが」

カイルも一応気を遣っているのだろう。少し難しい顔をしてそう言ってきた。

それに対して、千花は首を横に振った。

「ううん、魔法は魔法でちゃんと勉強するよ。……けどわたし、今すぐ言葉が理解できたらいいのにな。そしたら、その分早く家にも帰れるし」

そう言った途端、パキン、どこかでなにかが割れる音がしたが、千花はあまり気にしなかった。気にする余裕もなかった。

「ティカ、おまえ——」

「……え？」

どういうわけか、カイルが息をのんで千花を見ている。

「なに、カイル」

「……いや、なんでもない」

いやに真剣な様子で言ってきたので、なにかあるのかと思えば、そんな言葉が返ってきたので千花は気が抜けた。

「……変なの」

通常なら、そこで変なのとはなんだとカイルの突っ込みが入りそうなものだが、それもなく千花は首を傾げる。

「ティカ様、料理が冷めますわ。どうぞ召し上がってください」

「あ、はい。いただきます」

カイルの様子が変なのは気にはなったが、とりあえず今はコーデリア主催の朝食会なのだ。それだけに気を取られているわけにもいかない。

千花はコーデリアに頷くと、とりあえず目の前にある皿に向き合うことにした。

庭園での朝食会を終え、自分の部屋に戻ってきた千花は部屋に控えていたディアナに迎えられた。

「ティカ様、おかえりなさいませ。コーデリア様の朝食会はいかがでした？」

「うん、楽しかったよ。コーデリア様といろいろお話もできたし、庭園は綺麗だったし」

王太子とコーデリアがあまりにもらぶらぶだったため、新婚なのかと思いきや、実は二人の間には一歳になる王子がいるらしいというのも分かったし、それに二人と話しているうちに、苦手意識を持っていたルイスガルドのことも苦にするほどでもなくなったのは収穫だった。

……だがカイルが言っていた、言葉が理解できなければこれからの魔法習得は難しいということだけが、千花の心に重くのしかかっていた。

——まだ礼儀作法の授業には時間があるし、ちょっと語学の復習

でもしよう。

千花は長椅子に腰を下ろすと、語学の授業に使っている絵本を広げた。

あれ……。

その途端、かなりの違和感が襲い、千花はまばたきを何度も繰り返した。

そして、その違和感がなんなのか、千花はすぐ理解した。

千花は目の前の絵本に目を通す。

すると、今まで読めなかったはずの文字が読めるのだ。

それもごく自然に、まるで慣れ親しんだ日本語のように理解できる。

「嘘……」

——なぜ、こんな突然に？

千花は確認のため、震える指で言語疎通の指輪を抜き取る。

それでも、しっかりと絵本の内容は理解できた。

「ティカ様、どうなさいました？」

お茶を持ってきたディアナが、千花の様子がおかしいのを不審に思ったのか声をかけてくる。

その言葉も指輪なしで完全に理解できた。

「デイ、ディアナ、わたし、わたし……っ」

千花は立ち上がって胸元を押さえる。嬉しすぎて、千花の全身に震えが走った。

「ティカ様、どうか落ち着かれてください。どうされたのです」

ディアナが興奮を抑えきれない千花をどうにか落ち着かせようと

するが、当の本人はろくに聞いてはいなかった。

「ディアナ、どうしようわたし……っ、なぜかこの言葉が分かるようになっちゃったみたい！」

ドレスの胸元を掴んで千花がそう訴えると、ディアナは信じられないことを聞いたかのように瞳を見開いてその場で固まった。

32 言語修得と恋愛模様と初志貫徹

千花がこの大陸の言語を突如修得したことはすぐに王や王子の知るところとなり、大騒ぎになった。

そのため、この後予定に当てられていた礼儀作法の授業は急遽取りやめとなった。

——場所は変わって、謁見の間。

そこには千花の関係者が事の真偽を確かめるために集まっていた。「こちらの言葉が分かるようになったというのは本当なのか」

国王のカウスランドが千花に確認を取る。

「本当です。なぜ突然分かるようになったのかについては分かりませんが、言語疎通の指輪が必要なくなったのは事実です」

「それで、どこまで理解できるのだ」

カウスランドの問いに、事前にいくつか本を持ってきてもらっておいてよかったと千花は思った。

「書き取りに関しては、日常会話は全く問題ありませんでした。あと、通常の本なら読めると思います。魔術書はまだ試していませんが。」

すると、グレッグが千花の前にすつと一冊の本を差し出してきた。

……どうやら魔術書らしい。

千花は頭を下げてそれを受け取ると、パラリとページを繰った。

そこには『浮遊魔術』という文字が見出しに記載されており、その呪文と思われるものが記載してあった。

迷わず千花はそれを口にする。

すると、千花の体が十センチ程浮き上がった。

千花の様子を見守っていた人々の口から驚きの声があがる。

千花も内心うわあ、と感動していたが、今はこの魔術書の呪文を覚えることに集中した。

千花は浮遊魔術の呪文を暗記すると、その隣の解除魔法を飛ばして、『飛行魔術』という記述を詠唱していく。

「あれ……？」

てつきりこれで、どこかへ移動すると思ったのだが、千花の体はその場で浮かんだままだった。

「どこに向かうかまず決める。そうすれば移動できる」

そこでカイルの指導が入ったことで、とりあえずこの場をぐるりと時計回りに移動してみることにした。

すると、ゆつくりとだが飛行魔術を施行することができた。

千花は皆の周りを一周するとその場で浮遊した。

この呪文を覚えてしまいたかったが、確認のために皆来ているのだ。そう時間を取るのもまずいだろう。

千花は先程飛ばした浮遊魔術の解除呪文を唱えると、ゆつくりと絨毯のうえに着地する。

すると、周囲からほつつという感嘆の溜息が漏れた。

「……魔術書を読むことについても全く問題ないようですね」

グレッグが安心したように微笑む千花に微笑み返した。

「……そうか。それではこれでティカの魔術修得を遮るものは何もないということだな」

ルイスガルドが得心したように言うと、グレッグが「そうなります」と頷いた。

「しかし、なぜ突然分かるようになったのだ」

カウスランドが至極当然の質問を千花に向けた。

魔術書を読むことのできた千花は、嬉しさに頬を染めて笑顔になっていたが、慌てて顔を引き締めた。

「……どうして分かるようになったのかはわたしにも分かりませんが、ただ、魔法を修得するには魔術書が読めなければ難しいとカイルに聞いて、焦っていたのは確かです」

「……ふむ、ティカにも分からないか。カイル、そなたの考えはどうだ」

「……あの時ティカは無意識に自分をこの世界の理に会わせた可能性があります」

カイルのこの口調を聞くのは千花にとっては二度目だが、未だに聞き慣れない。

そんなことを思っていたせいか、千花の反応が若干遅れた。

「え……？」

——理に無理矢理合わせた？

それはどうということだろう。

千花と一瞬だけ目が合ったが、カイルは王へと視線を移した。

「にわかには信じがたいが、そんなことが可能なのか？」

「はい、おそらく言語疎通の指輪を無意識で解析し、それを更に発展させ言語を理解したのだと思われます」

……言語疎通の指輪で？

でもあれって、文字はまったく理解できなかったよね？

その辺、どうなってるんだろ。

千花はカイルの王への返答に、内心で首を傾げつつ思う。

かといって、当の本人でも分からないことなのだ。

カイルは稀代の魔術師の再来と言われるくらいの実力者なのだし、多分それが正しいのかもしれない。

「しかし、こうなるとわたしの授業は必要なくなりますな。ティカ様はともよい生徒だったので残念ですが」

グレッグが少々寂しそうにそう言ったので、千花は愕然とした。

「え……」

確かに彼の言う通り、言語の授業は必要ないだろう。

だが、彼の授業を日々楽しみにしていた千花にしてみたら、思ってもいなかったことだった。

「で、でもそうなら寂しいです」

千花は王の前だというのに、構わずグレッグに駆け寄って眉を下げて言った。

もしかしたらグレッグは、千花がこの世界で一番気を許して話せる人物かもしれないかった。

それが、これからはそう会えなくなってしまうかもしれないと思うとかなり哀しい。

「ティカ様、ありがとうございます。……わたしは日頃王立図書館にあります。もし、お暇ができましたら、訪ねていただけると嬉しいですな。もちろん、おすすめの魔術書もその時にお渡しいたしますよ」

グレッグに穏やかな笑顔で言われ、千花は目に涙を浮かべながら、「はい」と微笑んだ。

その様子を見ていたレイナルドは、少しおどけた様子で言った。

「ティカは、グレッグが一番のお気に入りなんだね。僕があんなに求愛しているのに、ティカはこんな年を取った男がいいんだ。ああ、世の中は無情だなあ」

それに千花と周りの人間は思わず笑ってしまった。

「レイド様、お年を取られていてもグレッグ先生は素敵なお方ですよ。尊敬できる方です」

「……ティカ様にそこまでお褒めいただき恐縮ですな」

千花の絶大な信頼と好意を感じたらしいグレッグが破顔する。

「ティカの好みは、落ち着いた、尊敬できる男性ということか。わたしもグレッグの域になれるように少しは修行した方がよいかもな」
エドアルドが冗談めかして言うと、ルイスガルドが呆れたように言った。

「アルド、おまえはまだ若いのに今から枯れてどうするんだ」

「いや、その方がティカの好みかと思ひまして」

「……本当に枯れた男が好みなのか？」

千花の傍に移動してきたカイルがやや真剣に聞いてくる。

……なんだか話題が逸れすぎて、頭が痛くなってきた。

「……尊敬できる人が好みなのは本当だよ」

だからカイルは、はなから除外だね、とは千花は言わなかった。

……王の前だったので。

「……そうか」

カイルが一瞬気落ちしたように見えたが、次には勝手に復活した。

「ならば、師匠の俺は尊敬できる男になれる可能性はあるな」

「……はあ？」

なにを言ってるんだこの男は？ と千花が胡乱な目でカイルを見るが、彼は堪えた様子もない。

「そうか、尊敬できる人か」

レイナルドも少し考えるような仕草を見せると、千花に笑いかけた。

「僕も、ティカの理想に近づけるように頑張るよ」

「は、はあ……」

確かここは謁見の間で、自分は言語修得の確認のために呼ばれたはずだが、なぜか話が大幅にずれている。

千花が困惑するのを見て、王妃のユリアーナが楽しそうにくすくすと笑った。

「まあ、ティカが言語疎通を完全にできるのならば、この先の彼女の恋愛模様も楽しそうですね」

「王妃様、実にそうですね。そう言えば、紅薔薇のダグラスもティカ様に夢中だそうですね」

コーデリアまで楽しそうにそんなことを言ったので、千花はぎよつとする。

「まああつ！ あの朴念仁のダグラスが？ これはおもしろいことになってきましたわね」

王妃が目を輝かせて千花とコーデリアを交互に見る。

「はい、初対面で求婚したそうですね。ティカ様の周りは実に華やかですね」

恋愛話になると俄然興味が湧くのか、王妃とコーデリアはにこやかに千花を取り巻く恋愛模様について話し始めてしまった。

……もしかしてわたし、徐々に包囲網敷かれてるんじゃない？

このままだと周囲が求愛者の話を持ち出して、元の世界に戻るなんて酷いと詰られかねない。

そうだったら、自分は元の世界に帰るときちんと言えるだろうか？
ふと千花は不安になったが、しかし両手の拳を握って思い直した。

——いやいや、ここは鉄の意志を貫くのみ。初志貫徹だ。

「……しかし、ティカの周りは随分と騒がしいな」

一人だけ少し呆れた目で一部始終を見ていた国王カウスランドが言った。

「まあ、これでティカの魔術の修得効率は格段に上がったわけであるし、実に喜ばしいことであるな。ティカはこれから精進するよ」

收拾がつかなくなりそうになっていたところをカウスランドがどうにかまとめてくれたので、千花は心底ほっとした。

求愛してくれている王子達やダグラスには悪いが恋愛とかはまだ興味はない。

今の千花には魔法を修得することが最大の関心事だった。

「はい、かしこまりました」

とりあえず、これからの魔法修得を遮るものはないのだから、こ

のまま突き進んでいけばいい。

——そうすれば、いつか家に帰れるのだから。

求愛者が知れば大いに嘆きそうなことを考えながら、国王に対して千花は微笑み、この世界での努力の賜である見本のような正式の礼をした。

33 火花再び

「防御壁と魔防壁の色を消す魔法なんてあるんだねー」

緊張した二度目の謁見のしばらく後、千花はカイルに魔法を教わっていた。

「まあ、そのままだとどんな魔法なのか相手にばれるからな。とっさに張る分にはいいが」

「あ、そっか。そうだね」

灰色の膜を出せば、『防御壁張ってますよ』と主張してるようなものだし、確かに不都合があるだろう。

そんなやりとりを見守っているギャラリーはレイナルドとエドアルド、ダグラスとルパートだ。

それ以外にも、魔術師達が興味深そうに千花の訓練を見守っている。

……しかし、仕事は大丈夫なのだろうか。

王子達はともかく、ダグラスとルパートはそうそう見学しているのもまずいんじゃないか？

そう思っただけで千花が聞くと、少しくらいなら大丈夫、という答えが返ってきた。

「ティカが気になるのは分かるが、もう少し務めに身を入れないと逆に彼女の迷惑になるぞ」

エドアルドが珍しく厳しめにダグラスに説教すると、今度はレイナルドがその彼に言った。

「そう言うアルド兄さんも最近は執務に顔を出してないらしいじゃないか。ハリスが嘆いてたよ」

その途端にエドアルドが苦い顔をした。

「……執務？」

千花が不思議そうに彼に聞くと、エドアルドは仕方なさそうに答

えた。

「いずれ兄の手伝いをするために、宰相の下で学んでいるところなんだ」

「え、だったらエドアルド殿下忙しいんじゃない……、すみません」

なんだか悪いような気がしてしまい千花は恐縮する。

「いや、ティカが謝ることじゃない。わたしが勝手にしたくてしていることだから」

「そうだよ、ティカが謝ることはない。悪いのは執務があるのに放っておいてるアルド兄さんだから」

「レイド……」

エドアルドは渋い顔をしてなにか言おうとしたが、結局は口を噤んだ。

「その点、第三王子は気楽でいいな」

カイルの嫌味ともとれる言葉に、レイナルドは気にする様子もなく肩を竦めた。

「まあね。でもまあ、ガルド兄さんが即位したら武術関連でなにか役に立ちたいとは思ってるけどね」

お気楽そうなレイナルドでも一応は将来のことを考えているらしい。

千花は元の世界にいた時には、いずれ大学に行くくらいのことしか考えていなかったたので、この世界の人達の自立心の高さは見習いたいなと密かに思った。

でもまあ、とりあえず自分には魔法を覚えて元の世界に戻るという目標があるのだ。なにをおいてもそれを優先するべきだろう。

千花は気を取り直して、カイルに教わった隠匿魔法を唱えてから防御壁を唱える。

千花からは防御壁の灰色は見えているのだが、果たして皆からは消えているのだろうか。

千花は自分の張った防御壁に近づいて行って、ペタペタと触って

みた。

「防御壁の色、消えてます？」

確認のためギャラリーに聞いてみると、きちんと消えているらしい。

それを聞いて、千花は安堵の息を付いた。

「それでは解除魔法だが……」

カイルに解除魔法を確認して千花はノートに記述していく。

最初はメモで済ましていたが、こう覚える魔法が多いとやはりノートは必須だ。

千花は解除魔法を暗記すると、防御壁に向かって唱えた。

「きちんとできているぞ」

カイルがそう言ったことで、千花は安心して彼にほっと笑いかけた。

するとカイルは瞳を見開き、嬉しそうな顔になった。

あ、しまった。嬉しくて、ついカイルに笑いかけちゃったよ。

でもいいか。これくらいで、まさか勘違いされる事もないだろうし。元の世界に戻れない元凶がカイルなのは忘れちゃいけない。うん。

千花は認識を新たにすると、カイルに聞いた。

「そう言えば、以前ルディア市内に行った時、カイル飛行魔法使ってたじゃない。その時消えることもできるって言ってたけど、どうやるの？　今の段階じゃ、まだ早いかなあ」

「いや、この隠匿魔法を使えばいいだけだ」

てつきりもつと難しいという答えが返ってくると思っていた千花は拍子抜けした。

「あ、そうなの？　じゃあ、今やってみる」

千花は今習った隠匿魔法を唱えた後、無詠唱で浮遊魔法を使い、詠唱省略で飛行魔法を試みた。

自分が消えているのは分からないが、浮遊魔法と飛行魔法は完璧

だった。

「三つの魔法をあんなに簡単に……っ」

鳴り物入りで王の客人になったカイルの弟子を興味本位で見に来た魔術師達も千花の才能に驚愕したようだ。

その様子で、自分がきちんと周りに見えなくなっているのが分かり、千花は嬉しくなった。

千花がそのままぐるりと演習場を回っていると、ダグラスの前でいきなりがばりと抱きしめられた。

「えっ、えっ？　なんで？」

驚きのあまり千花が無意識で魔法を解除すると、周りからも驚きの声があがる。

「愛する方の気配はわたしには分かりますから」

「そ、そうなんですか……」

それは分かったから、その腕を離してほしい。

千花がそう言おうとした途端、ダグラスに罵声が浴びせられた。

「ダグラス、ティカを離せ。いつまでそうしている気だ」

攻撃魔法を放つ準備をしているカイルが言くと、エドアルドも顔をしかめて厳しく言った。

「ダグラス、どさくさに紛れてティカを抱きしめるとはどういうことだ」

「ダグラス、ティカを気安く抱きしめるのはやめてもらおうか」

一度ならずも二度もその現場を目撃したレイナルドも憤慨している。

「ダグラス、ティカ様は陛下の賓客だ。自分の立場を忘れるな」

ルパートが友人を諭すと、ダグラスの腕から力が抜けた。

今度は気配を消す魔法を教えて貰おう――。

そう思いつつ、千花がふらふらとそこから抜け出ると、エドアルドがそれを受け止める。

その途端、千花を巡る男達の激しい火花が散った。

エドアルドはただ支えただけなのに大袈裟すぎないかと千花は慌

てて、彼の腕から抜け出した。

千花はこれおかしな状況から抜け出すためにあることを言うてみることにした。

時間的には少し早いかもしれないが、この後の予定に入っているので構わないだろう。

「あ、あのっ、わたし観光名所の月読の塔に行ってみたいです。ちよっと早いですけど」

……その千花の要望で、速攻で観光名所行きが決まったのは言うまでもない。

伝説の姫君が眠っていたとされている塔の中は千花の予想に反して昼間のように明るかった。

たぶん魔法で管理されているのかもしれない。

ちなみにダグラスはルパートに引きずられて赤薔薇騎士団に帰っていた。……自分も同行すると相当渋っていたが。

「殿下、ようこそお越しくださいました。すぐにもイルーシャ姫の部屋にお入りになれますよ」

魔術師らしい受付の青年が、感じよくそう言った。

ちなみにイルーシャ姫とは、この塔の眠り姫のことだ。眠りにつく前は八百年前の王の妃だった姫は、絶世の美女として今も語り継がれている。

転移用の魔法陣で四人が姫の部屋へと移動すると、寝台のうえでイルーシャ姫と思わしき人物が眠っているところだった。

もちろんこれは映像なのだろうが、結構生々しい。

「うわあ……、綺麗な人……」

緩く波打つ長く淡い金髪に、小さい顔に絶妙に配置されたパーツ、けぶるまつげ。

閉じられているため瞳の色は分からないが、間違いなく絶世の美女だ。

コーデリアも美しいと思ったが、この姫君は更にその数段上を行く。

やがて映像のイルーシャ姫の瞳が開かれるとそれは淡い青色で、着ている同色のドレスとよく似合っていた。

映像のイルーシャ姫はやがて寝台から起きあがると、長椅子に腰掛けて静止した。

「残念だが、この映像はこれで終わりなんだ」

エドアルドが千花が物足りなく感じると思ったのか、すまなそうに言ってきた。

三百年前の映像なら現存しているだけでも儲けものだろう。……
それも、こんな美女の映像なら。

「……映像に近寄ってもいいですか？」

「いいよ。もう動かないから」

レイナルドに言われて、千花は早速長椅子に座っているイルーシャ姫の映像に近寄った。

「見れば見るほど、綺麗な方ですねー……」

なんでもその昔、この姫を巡って国同士の争いが起こったらしいが、この美貌ならそれも頷ける。

イルーシャ姫の映像にうつとり見入る千花にレイナルドが声をかけた。

「ティカ、気に入った？」

「はい、とても。すごく綺麗な方ですね！ みなさんそう思いますよね？」

エドアルドやカイルにも同意を求めると、なぜか全員に苦笑された。

「まあ、確かに美しいけれど、過去の人物だしね」

「映像よりは実在の人物の方がわたしはいいな」

「それは同感だな」

こんな絶世の美貌を目にしてそういう三人は相当な変わり者だと千花は思ったが、実際に三人はこの映像をかなりの回数見ているのかもしれない。

だとすれば、そういう意見が出るのは仕方ないかもしれないな、と千花は相変わらずイルーシャ姫の映像に目を奪われながら思った。

「わたしは映像よりも、ここにいるティカの方がいいな」

ふいに千花はエドアルドに右手をとられて、そこにキスを落とされた。

「アルド兄さん、どさくさに紛れてずるいよ。僕だってティカのことが好きなんだから」

負けじとエドアルドから千花の右手を奪うと、レイナルドもそこにキスを落とす。

「俺も王子達には負けん」

カイルが更にレイナルドから千花の手をひったくって口づける。

……これって、間接キスじゃない？

千花はそう思ったが、三人のためを思っ言わないでおいた。

収まったと思った男達の千花を巡る火花が再び塔の中で繰り返される。

千花はそれを無理矢理見なかったことにして、目の前のイルーシャ姫の映像に没頭することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094p/>

魔法の国のティカ

2011年10月3日22時45分発行